

アジアの人々の協働から学ぶ

XXXII



第32回国際ワークキャンプ報告書(インドネシア)

A REPORT OF INTERNATIONAL WORK CAMP (INDONESIA)

2018

桃山学院大学

事前研修



全員初対面・・・
なので親睦を深める
仲良くなる所から
スタートです

ミーティングや準備など
各プログラムの
実践練習を行いました！



いざ出国！インドネシアへ！

日本を飛び立ち
約7時間の空のお散歩



緊張と不安と楽しみで
胸がドキドキでした

到着後インドネシア学生との初対面・・・
言葉が伝わらず、打ち解けるのが難しい



IWCワークキャンプ初となる快挙！
日本領事館に招待されました。



ブリンビンサリ村へ移動



バリの景色を堪能

バスの中も和気藹々



入村式



ワーク作業開始

施設の子供たちの為に



農作業や
塀を作ります。



交流会



歌やダンスを

披露しました



日曜礼拝

インドネシア学生
と共に歌を披露し



文化に触れ
感動しました



日本語プログラム

あいうえお表や
紙芝居やゲームで



日本語に触れて
もらいました

日本食プログラム

子供達も興味津々！



1人1人に料理を
よそい配りました



離村式

ホストファミリーに
感謝の気持ちを伝え



別れを
惜しみました

ブリンビンサリ村から離れ、文化探訪とインドネシア学生とのお別れ



立派な教会

涙のお別れ

インドネシア学生の
大学にお邪魔しました



エヴァリエーション



施設の改善
問題点を提案



帰国



良い経験と
良い思い出



メンバーお気に入り
至高の1枚





思い出



IWC 32nd. テーマ

「一歩踏み出す勇気」

Keberanian untuk
melangkah selangkah
demi langkah.

IWCは今年で32回目を迎えました。
参加者各々が自らの目標、また未来に向けて
まず、「一歩踏み出す勇気」を持つという
願いを込めてこのテーマを掲げました。
これまで培ってきたIWCの歴史、思いを
胸に刻み、私たちは飛び立ちました。

目 次

・ 第32回IWCテーマ『一步踏み出す勇氣』	1
・ 「一步踏み出す勇氣」を持って 第32回国際ワークキャンプ実行委員会委員長 社会学部 村 上 あかね	4
・ スケジュール	6
・ 事前研修について	15
・ 現地プログラム	
入村式	17
ホストファミリー（ホームステイ先）	18
ボランティアワーク（塀作り）	21
ボランティアワーク（農作業）	23
交流会	24
日本語プログラム	27
日本食プログラム	31
エヴァリュエーション	34
離村式	37
お別れ会	38
日曜礼拝・教会の雰囲気	39
文化探訪（1日目）	41
文化探訪（2日目）	44
バリの習慣・歴史・役に立った言葉	46
・ 事後研修について	48

参加学生のレポート

【桃山学院大学学生】

「私の感じたIWC」	上久保 圭 ……	49
「感謝」	大西 芽瑠 ……	52
「IWC32回での経験」	藤原 健嗣 ……	54
「私が過ごした22日間」	三井 隆司 ……	58
「気づき」	前川 未侑 ……	61
「初めての海外、初めての経験や発見、 そして初めての気持ちinインドネシア」	副隊長 池田 翔三郎 ……	63
「Terima kasih」	隊長 富士 拓真 ……	67
「初めての体験」	辻村 圭弘 ……	70
「小さな子どもが教えてくれたこと」	山本 雄大 ……	73
「いずれ大輪の花を咲かせるために」	板倉 悠佑 ……	76

【インドネシア学生】

Selamet Riadi ……	79
I Gede Aditya Wahyu Wardana ……	80
Marten Dwi Putra Yuda M. ……	81
Gusti Ayu Mutiara Karismayani ……	82
Agnes Nyoman Putri Jenita ……	83
Aprilia Ayu Anggraeni ……	84

引率者レポート

「3度目のバリ」	第32回国際ワークキャンプ団長 チャブレン	宮嶋 眞 ……	86
「第32回国際ワークキャンプ（インドネシア）を振り返って」			
	経済学部	吉田 恵子 ……	90
「引率教員の立場から見たIWC」	経済学部	櫻井 雄大 ……	93
「第32回国際ワークキャンプ（インドネシア）を振り返って」			
	学部事務課	朝倉 康仁 ……	96

「一歩踏み出す勇氣」を持って

第32回国際ワークキャンプ実行委員会委員長

社会学部 村上 あかね



この国際ワークキャンプ（IWC）は今年度で第32回を迎えた。古い資料によれば、1959年に創立された本学が開学25周年を迎えたことを機に構想が持ち上がったという。1987年に第1回の派遣が行われ、途中、テロやSARSによる中止（第18回）、病気による途中帰国（第30回）を余儀なくされた時もあったものの、本学の中では長い歴史がある海外派遣プログラムの一つである。過去の参加学生、引率教職員、関係者から構成される「世界市民」のネットワークは、2019年に創立60周年を迎える本学の歴史に確かな足跡を刻んできた。このようなプログラムが桃山学院大学にあることを誇りに思う。これまでの活動が

評価され、2018年には日本インドネシア国交樹立60周年記念事業に認定される栄誉に与ったことも特筆すべきであろう。

今回は8月20日（月）から9月10日（月）の22日間にわたって、インドネシアのバリ島で活動を行った。宮嶋眞チャプレンを団長とし、学生10名、引率者として吉田恵子経済学部准教授、櫻井雄大経済学部講師、朝倉康仁学部事務課員の合計14名が現地へ赴き、ディアナ・ブラ大学の学生と「協働」した。現地語でアスラマと呼ばれる児童養護施設的环境をよりよいものにするため、レンガを積み上げて塀を作ったり、野菜の苗を植えたりするだけではなく、施設の改善点を提案するエヴァリュエーションも行った。学生たちが子どもたちと信頼関係を築くことによって、彼ら/彼女らの率直な意見を引き出したことは見事というほかはない。相撲やダンスの披露をしたり、バリ舞踊や音楽を鑑賞したり、小中学校で児童生徒に日本語を教えたり、ホームステイ先の家族や子どもたちに日本食をふるまうなど現地の方々との交流、領事館訪問、市場やスーパーでの買い出し、世界遺産見学など盛りだくさんの内容だったと聞く。インドネシアならではの食事や入浴習慣も新鮮だったようだ。詳しい活動内容や感想は各自のレポートをご覧いただきたい。

毎年私たちを受け入れてくださるバリ・プロテスタント・キリスト教会、スィクラマさん、ならびに現地関係者、暖かくもてなして下さったホームステイ先のご家族には感謝の気持ちでいっぱいである。

このキャンプの参加にあたり、学生たちは筆記試験と面接による厳正な選考を経たのち、事前・事後の研修と合宿に参加することが義務づけられている。異文化理解については小池誠国際教養学部教授、大野哲也社会学部教授、インドネシア語については由比邦子兼任講師にご指導いただいた。研修は4月27日から毎週行われ、講義を聞くだけではなく、インドネシア語の讃美歌「Hari ini」（この日は主が創られた）の練習をしたり、自分たちが現地でも何をどうやって行うか話し合いや準備を重ねた。健康管理については、日本側は保健室の今井敏子学生支援課員、現地では看護師の石井美和さんに丁寧な対応をしていただいた。叶屋真一学部事務課長、中森一輝学部事務課員、馬詰雅子チャペル事務室員、そして国際ワークキャンプ実行委員会の先生方など、みなさまのお力添えにあらためて感謝申し上げたい。

出発前にインドネシアで大きな地震が発生したほか、関西国際空港が台風の影響を受けて閉鎖されたため、滞在を4日間延長して成田国際空港経由で帰国することになったが、全員が無事だったことに安堵している。例年よりも参加人数が少なかったため、これまでのような活動ができるかどうか懸念もあっ

たが、むしろお互いによく協力して、成果報告会まで一人も欠けることなく活動をやり遂げたことは立派である。

7月の結団式では、「世界が変わる体験、自分はこれができるようになったと言える経験を持ち帰ってほしい」と述べた。観光客として楽しんだり、お客さんとして世話をしてもらったりするだけではなく、厳しい社会の現実直面すること、自分に何ができるかを考えて行動することは成熟した大人になるために必要な体験であり、今後の人生を歩むうえで大きな財産になったのではないだろうか。「一歩踏み出す勇気」から得たものを大事にしてほしい。

回を重ねたこのワークキャンプにはインドネシア側の後継者の養成、日本側の引率者の確保など課題はあるものの、すでに第33回の準備が始まっている。来年度は参加者が増えるとともに、参加者のジェンダー・学部・学年の多様性が増すことに期待したい。在デンパサール日本国総領事館、奨学金を給付してくださる日本学生支援機構、桃山学院大学、桃山学院大学教育後援会にも改めて御礼を申し上げるとともに、引き続きご指導とご支援をお願いする次第である。

スケジュール

国際ワークキャンプ（インドネシア）日程表

日程	時間	スケジュール
8月20日 (月)	8:30	関空4F中央コンコースに集合
	8:30	点呼
	9:00	搭乗手続き（関西国際空港）
	11:00	GA883便にて出国 (所要時間6:45 時差-1時間)
	16:45	デンバサール空港到着
	17:00	入国手続き
	19:30	ホテルチェックイン
	20:00	夕食、インドネシア人学生と合同オリ エンテーション自己紹介
	22:00	就寝

初めまして!!
緊張してしゃべれなかった(笑)



日程	時間	スケジュール
8月21日 (火)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	9:00	学生・引率者 在デンバサール日本国 総領事館訪問
	11:30	昼食（ホテル）
	12:30	プリンピンサリ村へ出発
	16:30	ホームステイ先へ移動
	18:30	施設にて全員で夕食
	20:30	帰宅 就寝

日本国総領事館にて集合写真!!
日本茶を久々に飲んだ気がしました(笑)



プリンピンサリ村の人たちとの
集合写真!!

日程	時間	スケジュール
8月22日 (水)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	9:00	入村式・ボランティアワーク定礎式
	10:30	ボランティアワーク：塀建設基礎作業
	12:00	昼食
	14:00	ミーティング
	15:30	施設内見学ツアー
	16:30	フリータイム 学生ミーティング、交流会準備、 子供たちとの交流等
	18:30	夕食
	19:30	ミーティング
20:30	帰宅、就寝	



初めて聞いたガムラン！
かっこいい!!



ワーク頑張るぞ!!

日程	時間	スケジュール
8月23日 (木)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:30	ボランティアワーク：塀建設基礎作業
	12:00	昼食
	15:30	ボランティアワーク：農作業
	17:00	フリータイム 洗濯、子供たちとの交流等
	18:30	夕食
	19:30	ミーティング
	20:30	帰宅、就寝



掘作りのためのブロック運び!!
重いけど頑張る!!

日程	時間	スケジュール
8月24日 (金)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:15	ボランティアワーク
	12:00	昼食
	15:00	ボランティアワーク
	18:30	夕食
	19:30	ミーティング
	20:30	帰宅、就寝



午後からの農作業!
慣れない仕事で難しい・・・

日程	時間	スケジュール
8月25日 (土)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:15	ボランティアワーク
	12:00	昼食
	13:30	交流会準備
	17:30	夕食
	19:00	交流会
	20:30	ミーティング
	21:00	帰宅、就寝



交流会の準備! インドネシア学生と
「世界に一つだけの花」練習中!!



教会前で集合写真！

日程	時間	スケジュール
8月26日 (日)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:15	日曜礼拝
	11:00	フリータイム
	12:00	昼食
	13:00	ホストファミリーとの交流、休憩等
	15:00	近辺散策
	17:00	フリータイム
	18:30	夕食
	19:30	ミーティング
	20:30	帰宅・就寝



ダムでパシャッと！
インスタ映え＼(^o^)/



日程	時間	スケジュール
8月27日 (月)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:15	ボランティアワーク
	12:00	昼食
	13:30	フリータイム・日本語授業準備
	18:30	夕食
	19:30	ミーティング
	20:30	帰宅・就寝

日本語授業の準備！
インドネシア学生と綿密な打ち合わせ



小学校で集合写真！
うまく教えられたかな～・・・

日程	時間	スケジュール
8月28日 (火)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:45	日本語授業（小学校）
	11:30	日本語授業・交流会終了
	12:00	昼食
	15:00	振り返り、ボランティアワーク
	18:30	夕食
	19:30	施設・ウディヤアシ財団に関する授業 (スイクラマさんより)
	20:45	帰宅・就寝



小学生がダンスを披露してくれました！
最後はみんな参加して踊りました！



動物の名前を日本語で教えました！
Bagus！（良い） Pintar！（賢い）

日程	時間	スケジュール
8月29日 (水)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:30	日本語交流会（ムラヤの中学校）へ 向け出発
	9:00	日本語交流会
	11:00	ムラヤの施設で昨年度のボランティア ワーク成果の見学
	11:30	ムラヤの施設を出発
	12:30	昼食
	15:00	ボランティアワーク
	18:40	夕食
	19:40	ミーティング
	21:00	帰宅・就寝



BBQの準備～
子供たちも見守ってくれてます（笑）

日程	時間	スケジュール
8月30日 (木)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:30	ヌガラの市場・スーパーへ
	12:00	昼食
	13:30	日本食パーティー準備
	18:00	日本食パーティー
	20:00	ミーティング
	20:30	帰宅・就寝



Enak! エナッ! (おいしい!)



エヴァリュエーションの準備!
みんな真剣です・・・

日程	時間	スケジュール
8月31日 (金)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:15	ボランティアワーク
	12:30	昼食
	15:00	エヴァリュエーションのための ミーティング
	18:00	フリータイム
	18:45	夕食
	19:30	エヴァリュエーションのための ミーティング
	20:45	帰宅・就寝



塀が完成した記念碑！
一文字ずつメンバーが刻みました。

日程	時間	スケジュール
9月1日 (土)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:30	ボランティアワーク
	11:00	エヴァリュエーションのための ミーティング
	12:00	昼食
	13:00	フリータイム
	15:00	エヴァリュエーションのための ミーティング
	18:30	夕食
	19:30	エヴァリュエーションのための ミーティング
	20:45	帰宅、就寝



畑も完成させることができました!!
育つのが楽しみ!



お世話になったホストファミリーとのお別れ。
様々な思い出があり、本当に感謝です。

日程	時間	スケジュール
9月2日 (日)	6:30	集合
	7:00	教会で礼拝
	9:30	朝食
	12:15	エヴァリュエーションリハーサル
	12:30	昼食
	13:30	離村式準備
	14:00	荷物整理等
	17:00	集合
	17:30	離村式・夕食
	21:00	帰宅、就寝



お世話になったプリンピンサリ村を出発。

日程	時間	スケジュール
9月3日 (月)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:30	プリンピンサリ村出発
	12:00	(バリプロテスタント教会本部) 昼食
	13:00	エヴァリュエーション
	14:00	アガペーフェスティバル
	15:00	文化探訪へ出発
	16:00	タナロット寺院散策(1時間)
	18:00	ホテル到着
	19:00	夕食
	20:15	振り返り
	21:30	近隣のコンビニエンスストアへ買い物
	22:30	就寝



バリプロテスタント教会本部にて集合写真！
とても緊張しました・・・



初めていく場所や、初めて見る光景に
胸躍りました!!
ティルタ・エムプル寺院(タンパクシリン)
で身を清めるヒンズー教の信者

日程	時間	スケジュール
9月4日 (火)	7:00	朝の集い
	7:10	朝食
	8:15	文化探訪へ出発
	18:00	ホテル到着
	19:00	夕食
	20:15	振り返り
	21:15	近隣のコンビニエンスストアへ買い物
	22:30	就寝



ディアナプラ大学で歌を披露！
大人数の前でめちゃくちゃ緊張した（笑）

日程	時間	スケジュール
9月5日 (水)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:30	ディアナ・プラ大学訪問
	10:00	バリ博物館見学
	11:30	昼食
	12:50	日本人会へ出発
	13:00	日本人会訪問
	14:00	移動
	15:00	ヌサ・ドゥアの五大宗教施設訪問
	17:00	マタハリショッピングモールにて買い物・夕食
	20:30	ホテルへ移動
	21:30	近隣のコンビニエンスストアへ買い物
23:00	就寝	



ヌサ・ドゥア教会にて集合写真！
五大宗教の施設が並んで建っていた。



お疲れさまでした！
日本へ帰ると寂しさと懐かしさが・・・
これが最後の集合写真！（新大阪駅）

6～9日（木～日）台風21号による関西国際空港閉鎖のため飛行機待ちでホテル滞在、事後研修を進めた

日程	時間	スケジュール
9月10日 (月)	0:45	GA880便にて出国 (所要時間7:00、時差+1時間)
	8:50	成田国際空港到着
	9:25	入国手続き
	10:00	成田エクスプレスにて 東京駅へ出発
	13:00	新幹線にて新大阪へ出発
	15:40	新大阪到着・解散



事前研修について

私達は4月27日から毎週金曜日の5限に、IWCに向けての事前研修を18回重ねて来ました。最初は旅行、健康に関するオリエンテーションでした。その中では、「インドネシアに行くということはサバイバルだ。水や土には気をつけないといけない。また蚊が媒介するデング熱や鳥インフルエンザ、狂犬病もある。」と伺い「本当にいっても大丈夫か？」と不安が募ったように思います。幸い今回は途中で病気にかかる人はおりませんでしたが、東南アジアに行く際は健康面にも気をつけないといけないと思いました。そして5月12日のチームビルディングを通して、今まであまり繋がりがなかったこのメンバーで始めて繋がりを実感できたと思います。大縄やフラフープを使った簡単な事ばかりでしたが、メンバーの顔や名前を覚えただけでなく、少しずつですが交流が深まったのが良かったと思います。



続いて宗教や今回の活動拠点となる児童養護施設について学習しました。今の日本の大学生にとって宗教はあまり馴染みがない、またボランティアや児童養護施設についても殆ど知らないという人が多いと思います。そこでこの授業を受けることによって、事前に心構えができたのは良かったと思います。私が印象に残ったのは、インドネシアは多宗教国家でありながら上手く共存していると言うことです。世界の殆どの国では、人々は何らかの宗教を信仰しています。その中には自分の宗教以外には心を閉ざし、時に争いになることもあります。ここインドネシアでは全体としてはイスラム教、バリ島としてはヒンドゥー教、プリンビンサリ村に限ればプロテスタント系のキリスト教と、様々な宗教が混じっています。過去には迫害された人が環境の悪い土地に追いやられたり、マイノリティの人たちが苦しい環

境で生活していたことがありました。ですが今となっては、お互いに助け合い1つの国として成立しています。そのあり方は今の社会にとって参考になるところがあるというのが分かり、とてもためになりました。



それから「簡単な挨拶程度は出来ないとコミュニケーションが取れない」という最悪な事態に陥ることを避けるため、簡単なインドネシア語の言葉の学習をしました。挨拶やお礼など日常的に使うものから、年齢や家族構成、自分の趣味などホームステイ先や現地の人との話のタネになりそうな言葉も学習しました。発音が難しく、実際使ってみたら通じないということもたくさんありました。

そして事前研修の仕上げとして1泊2日の合宿を行いました。内容としては、日本語プログラムや日本食、交流会に向けて自分たちで時間を有効に使い、現地で最高の授業・交流会が出来るように準備していきました。このようにして私達は、インドネシアで滞りなく、より良いワークキャンプとなるように準備してきました。この事前研修があったからこそ、今回のワークキャンプはスムーズに進んでいたのでは無いかと思います。



入村式

ワークキャンプ3日目、村に到着後2日目の8月22日に入村式が行われました。

伝統の音楽や踊りを披露してもらい、初めてガムランの演奏を、異文化の音楽を聴いて、スピリチュアルや文化を感じました。全ての音色が新鮮でとても心地の良い演奏でした。

普段聞くことができない演奏やダンスを見たり聞いたりする事で異国に来ている、これから始まると感じ、身が引き締まりました。

その後、子供たちが伝統的な帽子や服などの衣装を着せてもらい、親しく接してくれました。私たちは子供たちや村の方々があまり受け入れてくれないだろうと想像していましたが、子供たちの人懐っこさや村の方々の優しさと歓迎にとっても驚きました。アウェー感を全く感じませんでした。役員の方々や警察の方に挨拶をしていただきましたが、前で話す役員の方々が挨拶で笑いを取りにいていたのが印象的でした。日本の役員の方々はしっかりお堅い挨拶なので、インドネシアと日本の違いを感じました。宮嶋チャブレンの挨拶の際に今回は最小参加人数ですが、今までで一番パワフルなメンバーですという挨拶をしていたのを真似をし、隊長が挨拶の時に“*We are powerful!*”と挨拶をし、会場が盛り上がりました。また、入村式ではワーク開始の儀式を執り行いましたが、セメントの上に石を乗せ安定させ、横の石との間をセメントで固めるという事だったのですが、1人1人がその作業を行うと共に石のサイズが段々と大きくなり、大きい石を置いた人には拍手が起こり盛り上がりました。

私たちが賓客という事でアスラマのスタッフの方々がお菓子箱を用意してくださいました。その箱にはインドネシアのお菓子やケーキが入っていました。正直お腹が空いていたのでお弁当がよかったのですが、インドネシアのお菓子はとても甘かったのですがサクサクしていてとても美味しかったです。インドネシアのケーキはしっとりふんわりしているシフォンケーキの中に果物が入っていて、フルーツティーでとても美味しかったです。



ホストファミリー（ホームステイ先）

ホームステイ先はアスラマのあるプリンペンサリ村のご家族の家に13日間宿泊をしました。メンバーがいくつかのグループに分かれ、各家庭にお世話になりました。

①富士拓真・藤原健嗣

家はゲストハウスのような家でとても自由な環境でした。だが、ゲストハウスのような家だったため、他国の人たちとの交流も出来たが、家族との交流する機会が他の家族に比べては少なく、もう少し家族団欒のような時間を過ごしたかったと思います。夜帰る際に家に辿り着くまでに、たくさんの犬がいて、襲ってくるのではないかと、少し危険だと感じました。

<感想>

ママがとても優しく受け入れてくれました。洗濯を手伝っていただいたり、コーヒーをよく出してくれるなど、帰ってきた時は必ず迎えてくれ、昼間はインドネシア語をわかりやすく教えてくれるママです。



②板倉悠佑・山本雄大

家はバリの伝統的な形の家で、ホームステイだけではなく他のお客さんを招いて家を観光的な感覚で紹介しているお家でした。

<感想>

挨拶を欠かさずしてくれるが、英語が少しだけしかできないので、ジェスチャーや簡単な単語を使って交流してくれた。また、家にいるときには紅茶やバナナを出してくれる家族です。



③三井隆司・アディティヤ

家には家族とは別に、たまに知らないお客さんがいたり、最後の日には3人もくるようなぎやかな家族で、お風呂やトイレがほかの家より少なかったり、犬が二匹いたが一匹は放し飼いでもう一匹は離れた場所に隔離されていた。

<感想>

ママはパンやコーヒーを出してくれたがチーズを食べることができずに残してしまいました。たくさんコミュニケーションを取ることができなかったが、帰るのが少し遅かった時にはパパが探しに来てくれたりしてくれて、お別れの時には優しさを思い出し、感極まって涙が出ました。



④池田翔三郎・ウェル

パパが双子（写真の左右）でどちらがどちらかわからず初めは間違えて大変でした。兄のブディさんは観光業をしていることから日本語がすごく上手で関西弁をよく使いこなしており、コミュニケーションがうまく取ることができる家族でした。

<感想>

夜には日本語の歌をギターで弾いてくれ、一緒に歌ったことがとてもいい思い出です。ママの出してくれるバリコーヒーを毎日飲んでいるとすごく好きになりました。



⑤大西芽瑠・アグネス・ムッティ

ママが一人暮らしで犬二匹と猫一匹を飼っておられ、とても可愛くて快適な部屋を提供してくれました。毎朝の見送りや帰宅時には出迎えてくれ本当のお母さんのようで、英語は話せないが身振り手振りでコミュニケーションを取ってくれた明るいお母さんです。

<感想>

ワークで疲れているとアイスを買ってくれ、ルームメイトの学生がインドネシアの学生ですごく不安だったけれど平等に接してくれてすごく楽しい時間を過ごすことができました。



⑥前川未侑・アブリル

アスラマからは一番近くのお家で、小さな赤ちゃんがいましたが家にいる朝晩は家族が寝ていたため交流する機会がすごく少なかったです。トイレは水洗式でしたが、紙は備え付けられておらず、少し文化の差を感じる家です。ママはすごく笑顔で接してくれましたが、パパはシャイで無口で、でも怒っているわけではなさそうでした。

<感想>

とても過ごしやすい環境を提供していただき、マイペースな私にはピッタリでしたが部屋に鏡台が一つしかなく、ここだけ不便を感じました。



⑦上久保圭・辻村圭弘・ユダ

夜帰るのが遅いにもかかわらず待っていており、毎晩遅くまでたくさん話をしてくれ必ずコーヒーか紅茶とお菓子を出してくれました。また、パパもママもこれまでに何組ものホームステイを受け入れているようで、学生と仲良くなりたいのがすごく伝わってき、英語はそこまで通じないのですが、言葉なしでも側にいてくれる大変明るくて暖かい家族でした。

<感想>

必ずお菓子と飲み物を出してくれ、小学生の子供と遊び、すごく楽しい時間を過ごすことができました。親戚の結婚式に出席させてもらったり、銃を持たせてもらったり日本では体験できない経験をいくつもさせていただきました。



どこのホームステイ先の家庭もすごく明るくて温かみのある家族ばかりでした。本当の子どものように受け入れていただき、文化の違う中で私たちが過ごしやすいような工夫をしてくれ、日本では出来ないような体験をさせていただきました。お別れが寂しく涙ぐむ学生も中にはおり、13日間すごく貴重な時間を提供していただきました。

《プレゼントしたもの》

洗濯ロープ・ピンチハンガー、洗濯バサミ、ハンガー、タオル系、ティッシュ、体洗うタオル、リストリン、現地調達した服をプレゼント、サンダル、ボールペン、スープ

《手土産》

インスタント春雨セット、煎餅のアソートと味一番（甘辛いおかき）は好評、桜抹茶のキットカット、洗濯洗剤、味噌汁、塩分チャージの餡、日本の絵柄のお箸、かりんとう、ベビーカステラ、白い恋人、クッキー、ふりかけ

ボランティアワーク（塀作り）

「ワークを頑張りました！」

私たちがプリンビンサリ村に着いた翌朝入村式が行われました。ガムランなどのインドネシアの伝統楽器で私たちを迎え入れてくれました。

その後に、施設のスタッフの人や、プリンビンサリ村の人々、警察などの方が隣家との境界を仕切るブロック塀を設置する場所に一人ずつ一つの石を置く「定礎」式を行いボランティアワークが開始されました。

この日のワークは一列にラインを作り、石を渡しながらか運ぶということを行いました。事前学習や過去の話でどんな感じかということイメージできていましたが、正直全員そんなにしんどくなく簡単なものだろうと当初は思っていました。

しかし、実際にやってみるととてもしんどく疲れました。けれどメンバー全員が口を揃えて「やりがいのある仕事でした」と言っています。

次の日からは午前のワークと午後のワークに分かれ、主に朝はブロック塀作りを3時間、午後は農作業を1時間半行いました。日によって男子がブロック塀作り、女子は農作業と分けたり、各自のコンディションによってメンバーの希望する仕事を選択する日もありました。



ペース配分としては、午前は30分ワークを行い、20分休憩というペースで行いました。午後は30分農作業を行い、30分休憩し、また30分農作業を行うというペースで行いました。日差しがとても強く、汗もかき、体力を奪って行くためこまめに休憩を取って行うのがよいと感じました。

ブロック塀作りのボランティアワークの主な仕事内容は、土台にする岩や石をバケツリレー方式で運んで行くこととセメントに混ぜる砂や小さい石などをバケツに入れて運ぶということを行いました。インドネシア学生と日本学生で、「スンマンガ!!（頑張れ）」や「頑張ろう!!」と声を出しながら、

全員一丸となって働きました。

トラックがギリギリ入れる所に置かれた山のような岩や砂、ブロックを、作業現場までおよそ5,60m運ぶのですが運び終わった時の達成感はメンバー全員大きなものでした。

今年は例年と比べて人数が少なく、一人当たりの負担が大きくなりましたが、誰一人弱音を吐かずに頑張ったおかげで、当初の予定より早く終わらせることができました。

午前はブロック塀作りのためのワーク、午後は農作業という毎日で、時には前日に雨が降って、地面がぬかるんでいてすべて転んだり、くつが重くなったりと作業がとてもしんどい時もありました。

インドネシア学生は小さい頃から経験があるのか、すごく手慣れた感じで進めていて、やったことがあるのかと尋ねたところ「初めて」と言っていたので驚きました。

ワーク中にアスラマの子供達も手伝ってくれて、笑顔で、楽しみながらワークをしていました。しかし、石や岩を運んだりしているときは、危ない瞬間もあるので注意しながら作業していました。

ある程度ブロック塀が完成してくると、運搬の作業が進んだのでブロックを固定するためのセメント作りや、実際にブロックを積む作業を体験させてもらいました。日本では経験する機会が無いものなので、職人さんの指導を全員が食いつくように見つめて説明を聞いていました。これはワークが早く進んでいたため体験させてもらえたことです。

そしてブロック塀が完成すると、その塀の真中にセメントで下地をつくり、一人一字ずつ文字を刻みました。この作業はミスが許されないものなのですごく緊張しました。



「一歩ふみ出す勇氣」

IWC32nd 2018.09.01

桃山学院大学 UNDHIRA.

この記念碑が完成したときは全員でハイタッチをし喜んだことを覚えています。

最後のワークの日はインドネシアのドキュメンタリー映画のカメラクルーが撮影をしていたため、全員が今までになくはりきって作業し、微笑ましい雰囲気が流れていました。

メンバーは、「毎日やっていたボランティアワークが終わると寂しい」と口を揃えて言っていたのが印象的です。



ボランティアワーク（農作業）

第32回ワークキャンプの内容は、ブロック塀作りの他にプリンピンサリ村のアスラマ施設の畑で農作業を行いました。

ワークは主に、毎日、午前と午後の2回で、午後に農作業をしました。

ワークの内容は、畑の畝の整備、畑のビニール被せ、ビニールが飛ばないように端を止め、そのビニールに直径10cmの穴をあけました。その穴に種や苗植え、肥料を与え、水を撒き、植えた苗が真っ直ぐ伸びるように添え木の設置、添え木に沿ってロープを張ることです。

竹を様々な用途に合わせて切り、多種多様な使い方をしていたのに驚きました。

今年は、インゲン、ナス、唐辛子、空芯菜、小松菜の5種類の野菜を植えました。

この畑の収穫は、子供たちの毎日のおかずになるようです。また余分が出たら、町の市場で売ってアスラマの資金にもできるということで、私たちの作業にも力が入りました。

私たちが、農作業をしていると、自然とどこからともなくアスラマの子供たちが集まってきてくれて、お手伝いをしてくれました。

日中のワーク作業は、とても過酷で、何度も「もうやめたい…。疲れた…。」と諦めそうになったのですが、その度に、インドネシア学生から教えてもらった、「スンマンガッ！（頑張れ！）」という言葉が畑の中で飛び交い、みんなが一生懸命頑張る、誰一人欠けず一致団結して作業を終えることが出来ました。

重いものや力仕事の重労働は、男子が率先して女子をサポートしてくれました。また、「やる時はやる！休む時は休む！」という、メリハリをつけて作業することで、より作業効率がupしました。とてもしんどいワークでしたが、みんなで協力する楽しさや、頑張れ！などの声かけの大切さを実感し、それらを通してやりがいをも身をもって体験できました。

炎天下での過酷な作業でしたが、アスラマの子供たちも手伝ってくれ、声を掛け合ったり、励ましあったりしながら、インドネシア学生との絆を深め、子供たちと交流し、お互いの言語を教えあうなど楽しく作業ができ、時間が経つのがあつという間に感じました。

このワークを通じて、IWCのメンバーが1つになれた気がしました。1つのワークをチームみんなでやり遂げることで、達成感やチームワークの大切さを実感し、学びました。

またこのような作業は、日本では体験できないことなので、とても貴重な経験になりました。



交流会

交流会では子供達との交流をし、親睦を深めると同時に日本の文化に触れていただくため歌やダンス、相撲を子供達の前で披露しました。その為に事前研修から準備をして来ました。事前研修ではどんなダンスを踊るか、なんの歌を歌うかについて皆で意見を出し合って決めました。また、メンバーの一員が高校の時代相撲部の経験者であることから、日本の国技である相撲をプログラムの中に取り入れました。

昨年は、当時流行していたダンスなどを取り入れていましたが、私たちは「錯覚ダンス」というダンスを披露した。「錯覚ダンス」はモノクロの衣装でのダンスで、横の人とは正反対の動きをし、相手には錯覚に見せるダンスです。

歌は「世界に一つだけの花」を披露した。この歌は、「世界には様々な花があるけれども、その中で同じバラの花でも一つ一つ違って、美しく咲いている。それと同じように、人間も一人一人違った個性を持ち、輝いている。アスラマの子供達も一人一人違って同じようにonly oneに輝いてほしい。」という思いが歌詞に込められていることからこの歌を選択しました。

交流会スケジュール

1. ガムラン演奏によるオープニング（アスラマの男子）
2. ダンス（アスラマの女子）
3. 錯覚ダンス（日本人学生）
4. インドネシア学生による斉唱
5. 世界に一つだけの花（日本人学生による斉唱）
6. Gemu Fa Mi Re ダンス（インドネシア学生）
7. 相撲（日本人メンバー）

<子供達>

子供達は、バリでの伝統的な演奏の「ガムラン」、踊りの「バリ舞踊」を私達に披露してくれました。男の子は「ガムラン」女の子は「バリ舞踊」と分かれて、伝統的な衣装に身をまとい、女性は化粧をすることで、いつも遊んでいる子供達とは全く違う好印象でした。



<事前研修>

効率的に事前研修を進めるために日本では「世界に一つだけの花」は既に皆が知っている曲であることからまた錯覚ダンスは足だけの簡単な動きのため練習や確認を後回しにし、先に他のプログラムの準備に専念出来る様にしました。その間にメンバーには参考になる動画や歌詞カードなどを配布する事で、各自で覚えてくるスタンスを取りました。

本格的に練習を始めたのは、八月に入ってからの合宿だった。ダンスを覚えているメンバーもいれば覚えていないメンバーもいた事から、ダンスをメインに行うことになり一から動作の確認を行ったが、全体のテンポやコンビネーションが特に重要になることをそこでやっと気づき大苦戦しました。

合宿が終わってまた別の日に皆で集まる機会を設けて、最終確認をすることにした。その頃には皆が覚えていたが、また「どうすれば綺麗に錯覚しているように見えるだろう」と言う課題を残して最後の練習が終わりました。

一方、歌の方も意外と二番の歌詞を忘れてしまっているメンバーも多くいたが、歌う回数を多くすることでその課題は解決に繋がって行ったと感じます。また、相撲に関しては時間が余ったらと話を進めていたため、事前研修では特に何か用意することはありませんでした。

全体的にその場では覚えているが、日にちが空くと忘れてしまうのではないかと不安を募らせたまま事前学習が終了しました。

<交流会本番>

本番は夕食後に、子供達と一緒に机や椅子を移動させ、皆で会場設営をしました。

発表の順番に関しては、子供達が日本人学生、インドネシア学生の発表を楽しめるように、また同じく私達学生も子供達の演技を見れるように順番を決めた事が全体の盛り上がりにつながったのではないかと思います。私達も着替えや準備があったため、バリ舞踊の後に日本人のダンスを入れることで、女の子達も着替えや化粧を落とし、リラックスした気持ちで見てもらえるようにと組んだことで全体の成功につながったのではないかと感じています。



私達は歌とダンスと相撲を発表しました。最後に行った相撲が大盛り上がりでダンスが少し盛り上がりで欠けた事が心残りです。

相撲は不安がありましたがルールを説明し、実際に子供達やスタッフに参加してもらう事で見ている方や実際に体験している方の両方が楽しめるものになりました。

錯覚ダンスに関しては、子供受けが少し悪かったのか笑っている子や笑っていない子も見受けられました。



インドネシア学生によるダンスの際には、途中で日本人学生や子ども達も誘われ、インドネシア学生と共に踊る事で、より仲が深まったと思います。

全体の進行に関しては、間をスタッフが歌で繋いでいただくなど、皆の協力があってとてもうまく進めることが出来たと思いました。また、日本人メンバーからすると、インドネシア学生や子供達、スタッフと各場面で交流出来た事でとても親睦が深まったのではないのかと感じています。

私達がいつも見ている子供達は元気いっぱいに遊んでいる姿でしたが、交流会では、真剣に取り込むという普段見ることができない姿を見ることができました。

<反省点>

- ・簡単な振り付け、メジャーな歌だからと言ってダンスと歌の練習を後回しにしたことで練習不足の面があった。
- ・相撲は日本文化としての説明文を十分考えておくべきだった。
- ・「錯覚ダンス」は子供にとっては少し難しかったのではないのか。そして、会場の広さを考えていなく真近で見ていた子は錯覚をおこさずただのダンスになってしまっていた可能性がある。

日本語プログラム

・日本での事前準備

小学校・中学校での授業ということで、子供達に興味を持ってもらえそうな「動物」をテーマに、あいうえお（50音）表を作成しました。あいうえお表は、動物の写真と共に、その動物の名前をひらがな、ローマ字、インドネシア語で表記したものです。苦労した点としては、まず50音から始まる動物探しが挙げられます。市販のカルタを購入し、そこに出てくる動物を使用するという案もありましたが、あまりにも難しい動物の名前が多かったため、自分たちで一から考えることにしました。

どのような授業内容にするかも悩みました。小・中学生相手の授業なので、堅苦しくなく、遊びの要素を多く取り入れたものにするのを心掛けました。例年カルタを実施していたため、今年は趣向を変え、「神経衰弱ゲーム」にしました。また、あいうえお表で使用した動物の写真をA6サイズにコピーすることで見やすさと持ち運びやすさのバランスを取り、さらに強度を持たせるため、ラミネート加工を施しました。動物伝言ゲームは、あいうえお表にある動物の名前をその場で数個選び、お題とすることで、授業の一貫性を保ちました。同様に、動物バスケット（席とりゲーム）についても、あいうえお表にある動物の名前をその場で1人ずつ割り当て、3チームないし4チームに分ける形にしました。動物伝言ゲームと動物バスケットに関しては、ルール確認を事前に行い、授業を円滑に進められるように準備を進めました。手洗い指導と歯磨き指導については紙芝居の形とし、私たちが帰国した後も継続して学習を行えるように紙芝居をプレゼントしてきました。

合宿では、画用紙から名札の大きさに切り分け、ネームプレートを作成する作業を行いました。生徒人数が明確ではなかったため、施設のスタッフ、学生、引率教員の分のみを用意し、現地では必要に応じて養生テープを胸元に貼り付けて使用する形を取りました。

・現地での事前準備

小・中学校共に同じ内容だったので、小学校訪問の前日に半日、日本語プログラムの時間を作っていただきました。スケジュール説明をして紙芝居の翻訳が済めば終わりだと思っていたので、さほど時間はかからないだろうと踏んでいました。はじめに全体に向けてスケジュール説明をしました。その後に、班ごとに分かれてスケジュール・ゲームの確認、紙芝居の翻訳をしてもらいましたが、ゲームの確認と紙芝居翻訳はかなり時間がかかりました。まず、ゲームに関しては、神経衰弱・伝言ゲーム・フルーツバスケット自体を現地学生が知らなかったため、何度も説明しながら実際にやってみることで理解を深めてもらいました。伝言ゲームとフルーツバスケットは全体でやったのですが、仲が急速に深まった気がしました。

紙芝居の翻訳は、各班苦戦していました。なにが大変だったかというと、インドネシアの学生に伝えるため日本語を英語に翻訳することでした。知っている単語を最大限に使い、それでも分かってもらえないときはジェスチャーを交えて必死に伝えました。紙芝居は日本語も知ってもらうために、日本語で私たちが朗読した後に、現地学生に翻訳してもらうという形を取りました。現地学生ははすごく表現力豊かで、日本の学生もいい刺激を受けました。

授業時間的に、どちらか1つしかできなかったため、班ごとに割り当てを決めました。

【あいうえお表】

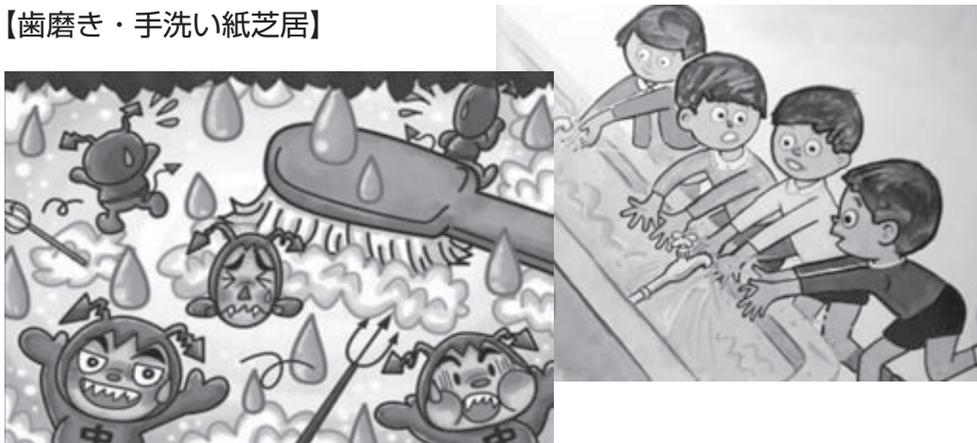
あいうえお ひょう

わ <small>ワ</small> Iwa Ishizuka	ら <small>ラ</small> Raku Rokurokoma	や <small>ヤ</small> Yaku Yakuzuna	ま <small>マ</small> Mamaoaji Mamao	は <small>ハ</small> Hamaoaji Hamaoaji	な <small>ナ</small> Nanaoaji Nanaoaji	た <small>タ</small> Tanaoaji Tanaoaji	さ <small>サ</small> Sanaoaji Sanaoaji	か <small>カ</small> Kanaoaji Kanaoaji	あ <small>ア</small> Aanaoaji Aanaoaji
	り <small>リ</small> Riru Riru		み <small>ミ</small> Mimuroto Mimuroto	ひ <small>ヒ</small> Hiru Hiru	に <small>ニ</small> Niru Niru	ち <small>チ</small> Chiru Chiru	し <small>シ</small> Shiru Shiru	き <small>キ</small> Kiru Kiru	い <small>イ</small> Iru Iru
を	る	ゆ	む <small>ム</small> Muroto Muroto	ひ <small>ヒ</small> Hiru Hiru	ぬ <small>ヌ</small> Nuru Nuru	つ <small>ツ</small> Turu Turu	す <small>ス</small> Suru Suru	く <small>ク</small> Kuru Kuru	う <small>ウ</small> Uru Uru
	れ		め <small>メ</small> Muroto Muroto	へ <small>ヘ</small> Heru Heru	ね <small>ネ</small> Neru Neru	て <small>テ</small> Teru Teru	せ <small>セ</small> Seru Seru	け <small>ケ</small> Keru Keru	え <small>エ</small> Eru Eru
ん	ろ <small>ロ</small> Roku Roku	よ	も <small>モ</small> Muroto Muroto	ほ <small>ホ</small> Huru Huru	の	と <small>ト</small> Turu Turu	そ <small>ソ</small> Suru Suru	こ <small>コ</small> Kuru Kuru	お <small>オ</small> Ouru Ouru

【動物神経衰弱】



【歯磨き・手洗い紙芝居】



〈授業内容〉

9：15～10：00 授業（自己紹介、50音表の読み上げ、ひらがなでの名札作り、動物神経衰弱）

10：00～10：15 休憩

10：15～11：00 授業（手洗い指導or歯磨き指導、動物伝言ゲーム、動物バスケット）

※小学校、中学校共に上記のスケジュールです。

・小学校訪問（プリンビンサリ村）

当初、各クラス40名程度だと聞いていたのですが、その半分の20名程度でした。四年生、五年生、六年生の計3クラスに分かれての授業でした。失敗したと覚えることは大きく見るとなかったのですが、小学生に日本語で動物の名前を覚えてもらうのは少し困難に思えました。はじめの50音表で動物の名前も一緒に紹介したのですが、動物神経衰弱では名前というより絵で覚えている子供が多かったです。そこで、正解が出たら正解したチームに動物の名前を聞くことで、少しでも動物の名前が定着するように工夫しました。動物伝言ゲームでは、動物神経衰弱の様子をみて、短めで発音しやすい動物の名前を使用することで、子供の正答率をあげました。動物バスケットは、子供たちはとても楽しそうに参加していたのですが、白熱しすぎて怪我をってしまう子供がいました。楽しさを求めすぎて、安全性に対する配慮が欠けていたかもしれません。その後のミーティングでも、小学校で動物バスケットは少し危険ではないかという意見が出ました。





・中学校訪問（ムラヤ町）

小学校と同様、各クラス人数は20名程度でした。中学二年生が2クラス、中学三年生が1クラスの計3クラスでの授業でした。小学校での授業の次の日だったので、初日よりリラックスして授業が行えました。日本の中学生というと、思春期が始まり、恥ずかしがって授業に対して消極的になるのが一般的ですが、インドネシアは正反対でした。自己紹介をすると名前を叫んでくれたり、何かわからないことがあると自ら声を挙げてくれたりと、すごく授業が進めやすい環境でした。小学校でのあいうえお表を踏まえて、中学校では同じ行を段々スピードを上げて読むなど、飽きられないように心掛けました。この方法はかなり盛り上がったので、来年度の参考にしてください。動物神経衰弱は、外からの光でカードの裏面を透かしてズルをする子供がいたので、カーテンを締め切るという対策を取りました。



小学生とは違い、体格も大きいので、1クラスを半分に行ってもよかったかもしれません。紙芝居は、中学生には少し幼稚すぎたかなと思います。同じ内容でも、劇にするなどの対策が必要かと思われました。動物伝言ゲームは、小学生とは違い、難しい動物の名前を使ってあげた方が、逆に喜ばれました。難しくって言えないのではないかと思う動物を選んだ方が、盛り上がりました。動物バスケットは、かなり盛り上がりました。しかし、クラスによってはイスが壊れるという事案もあったため、来年度はもう少し安全性の高いゲームを考えると良いと思います。

日本食プログラム

<事前研修>

○料理選び

私たちは日本料理として何を振舞おうか考えるにあたって、過去のIWCワークキャンプを参考にしながら検討し、アスラマの子供たちはあまり肉を食べる機会がないという情報がありましたので、「皆で楽しみながらお肉をいっぱい食べてほしい」という願いを込めて、BBQをしようと考えました。また、BBQだけでは日本食パーティーとしては物足りないのではないかといいこともあり、インドネシアの方々が「日本のとろっとしたカレーを毎年楽しみにしている」という話を聞き、BBQとカレーに決定しました。



○出発前の材料

出発前の事前準備として、実際にどのくらいの量が必要になるのかをネット上や料理本などの情報を元に計算し、材料をアスラマのスタッフに用意してもらいました。

BBQ		ミニカレー			
肉（豚・鳥）	各22kg	肉（鳥）	10kg	カレールー	業務用2.5箱
ソーセージ	200本	ジャガイモ	25個		
とうもろこし	30本	ニンジン	15本		
焼肉のたれ	業務用10本	玉ねぎ	25個		

○出発前調理グループ・調理グループの割り当て（合宿での調理）

事前研修の合宿では、予行演習としてアスラマで振舞う料理を全員で作りました。アスラマでの必要な作業やそれらに割り当てるメンバーを考え、実際に試したところ、包丁を使った作業などでメンバーの得意不得意が出ていたため、グループの振り分けを見直す必要がありました。

<実際の日本食プログラム（現地アスラマ）>

実際に使用した量と残った量

BBQ		ミニカレー			
肉（豚・鳥）	22kg	肉（鳥）	10kg	カレールー	業務用3箱
ソーセージ	200本	ジャガイモ	35個		
トウモロコシ	30本	ニンジン	30本		
焼肉のたれ	業務用2本	玉ねぎ	40個		

○当日の材料についての詳細

カレーに使用するジャガイモ ニンジン 玉ねぎは正確にはわからないがインドネシアの玉ねぎは日本のサイズの半分のサイズだったので予定の2倍くらいの量を使用し、ジャガイモは日本のサイズより少し大きいサイズだったので、35個くらい使用した。

ニンジンは日本より細く、これも2倍くらい多く使用した。

○インドネシアと日本の野菜

インドネシアと日本の野菜では大きさが違いました。日本の農業はあらゆる工夫を凝らし、大きく立派な野菜を生産しているのですが、インドネシアの野菜は日本よりも小さく、ニンジンなどは細く感じました。感想としては小さい分より多くの数の野菜の皮を剥き、適切な大きさに切らないといけないのでその分時間がかかったし、疲労も大きかった。

○子供やホストファミリーの反応と評価

子供たちは「エナッ（おいしい）」と喜んで食べ、おむね良い評価だったと感じました。しかし、お肉を食べ過ぎるとお腹を壊してしまうため、お肉の量などは少なめで良かったのかなと感じました。カレーは毎年のように振舞っているので、みんな安心して美味しく食べてもらえたようで、とても嬉しく感じました。特に子供たちは先ほど述べた通りお肉を食べる機会があまりないため、とても喜んでもらえました。



○子供たちのお腹について

子供たちは普段肉を食べる機会がないので肉を食べすぎるとお腹を壊してしまうという事を向こうに行き、知りました。キッチンの方々が子供たちの食事に関して詳しいので質問させていただくと中学生の子供たちはお代わりしてもお腹に問題はないと教えてもらいましたが、小学生などの小さい子供たちは食べすぎるとお腹を壊してしまうので大きい子供と小さい子供でお肉などの量を変える必要があります。

アドバイスとしては子供たちがたくさん食べれないという予想外の事態によりお肉が残ってしまったので来年はお肉の量を少なくした方が良いと思います。また、インドネシアのスパイシーな味付けに慣れているホストファミリーの方向けとして、インドネシアの辛いソースはアスラマ施設の方々に用意していただき、それとは別に日本の辛い調味料や辛いソースなどを別途作るか購入し、必要に応じて使ってもらう形も良いのではないかと思います。ともあれ、全体的にホストファミリーの方々も美味しいという評価をいただき、たくさん食べてもらうことができました。

○作るときに苦勞した点や良かった点やアドバイス

肉切り班・・・BBQとカレーというお肉を大量に使用するため、必要分の肉を切り分けなければいけないが、例年肉切りに時間がかかると言われていたことを考慮し、なるべく多くの人数を振り分けましたがそれでも2時間はかかってしまいました。

その中で鶏肉はとても切りやすく調理しやすかったが、鶏の皮や豚肉の骨周りの身に関しては施設の調理担当の方々が別に利用するため、それらの処理をする人を別に割り当て、また大まかに切り分ける作業と細かくする作業という形で分担することで、効率よく作業を進められ、時間短縮をすることができました。今年インドネシア学生を合わせ16人だったため、それ以上の場合は肉用の包丁などを購入しより多くの人数を割り当てれるようにするか、より適切な役割分担をしないと、おそらく上手くいかないと思います。



カレー班・・・まず全員で野菜の皮を剥きますが、ピーラーの刃が悪く、とてもやりずらく少し危ないと感じる部分もあったので、来年はピーラーを現地購入すると良いと考えます。包丁は野菜や肉などの切れ味は悪いが、指はよく切れるのでとても危ないので気を付けないといけないと思います。

○反省点

- ・小さい子供達があまりお肉を食べられないという点が最大の誤算でした。
- ・おかわりしたくても気を遣っておかわりしない子供もいたのもっと料理を積極的に配る方法もあったのかなと考える。
- ・BBQのとうもろこしは不人気だった。

○感想

実際に調理する際に臨機応変に状況を見て、メンバーが遅れている所に行きサポートするなど、班ごとに判断し、休憩時間や作業方法などの工夫を行ったため、時間内にきちんと調理完了できたので良かった。全てにおいて、子供達の笑顔が嬉しかった。



エヴァリュエーション

私たちIWC32メンバー16名は、13日間プリンビンサリ村に滞在し、村内の施設であるアスラマ（児童養護施設）でのボランティアワークを通じて感じた施設内の問題点や、スタッフや子供達にインタビューしたことをまとめた上で、既存の問題点の指摘や新たな提案を加え、日本・インドネシア両学生がそれぞれの言語で、バリ・プロテスタント教会（アスラマを運営しているウィディヤアシ財団の母体）の責任者の方に向けて総括を準備しました。

アスラマにいる子供達は両親もしくは片親がいない子、虐待を受けた子や家にタイル張りの床がなく土間で暮らしているような貧しい境遇の子供達です。アスラマはこのような子供達を支援するためにウィディヤアシ財団が掲げた6つのミッションを目標に掲げて運営されています。

発表の内容をまとめるにあたっては、次ページの「6つのミッション」を指標とし、評価しました。

実際のプレゼンテーションは、ウィディヤアシ財団からディレクターのMade氏、バリプロテスタント教会の総主事のNyoman augustinus 牧師にご出席いただき、財団の本部会議室にて実施しました。

評価の進め方としては、まずそれぞれのミッションについて、キャンプ参加学生各自が10段階の数値による評価をつけた上で、その根拠について話し合いを行いました。

その後インドネシア学生2人日本人学生3、4人の3つのグループに分かれ、小学生、中学生、スタッフのそれぞれにヒアリング調査を実施しその結果をまとめました。

調査内容について

実施日：8月31日（金）15：00～

調査方法：アスラマのスタッフと小学生と中学生に財団が掲げる6つのミッションについて10段階評価をつけてもらいその点数の理由を述べてもらう。

対象者：アスラマのスタッフ9名中8名

小学生22名中16名

中学生19名中12名

調査の結果を6つのミッションごとにまとめてインドネシア人学生1人日本人2人の5つのグループ（4のAccess to formal educationはきちんと子供達が学校に行き正規の教育を受けているので省きました）に分かれてプレゼンテーションの内容を考えました。子供達やスタッフの回答内容はインドネシア語で日本人学生には理解できないため、英語でインドネシア学生に説明してもらいその中で大切なものはどれかということ話し合い私たちの提案としてまとめました。

プレゼンテーションの方法

まずは隊長とインドネシア学生が初めの挨拶をし、1の担当者から順番に発表して行きました。まずは日本人学生が日本語でプレゼンテーションをしその後インドネシア人学生がインドネシア語でプレゼンテーションをしました。1～6まで終わったあと終わりの挨拶を隊長とインドネシア学生がしました。

その後、Made氏とNyoman augustinus 牧師さんからの応答をもらいエヴァリュエーションを終りました。

エヴリユエーションの内容は以下の通りです。

1. Children in family-based care

スタッフの意見としては「子供達を家族のように思っていて優しく接している。」「1日3食食事をきちんと与えている」「家族のいる子供は時々親が会いにくる」と述べていました。

子供達の意見としては「スタッフは家族のように優しく接してくれていて満足してるいる。しかし、中にはスタッフに嫌われていると感じたり不安や不満の声もあった」「新しく入って来た子が以前からいる子供たちの中にうまく入れずコミュニケーションがとれずグループ行動ができていない」「服が破れており新しい服が欲しい」と述べていました。

私たちの提案としては「子供達が強く成長することを願っており、メンタル面のサポートをしてほしい。」「また服を与えてあげたい。」となりました。

2. Nourishing food

スタッフの意見としては「1日3食きちんと食べさせている」「食費はアスラマの予算と外部からの寄付で成り立っており、栄養士がたてた献立に従って、バランスの良い食事を提供しようとしている。しかし、寄付をいただいても足りていないのが現状で不十分な状況です。」と述べていました。

子供達の意見としては「肉、野菜、果物が少なくもっと食べたい」「ビタミンやカルシウムなどの栄養分が不足している」と述べていました。

私たちの提案としては「可能であればアスラマの食費の予算を増やして欲しい」「寄付が増える方法や、寄付を安定させる方法をもう一度考え直しても良いのでは無いか」「農作業を手伝わせてもらったがより多くの畑を作り収穫量を上げ予算を補ったり、余分が出れば販売して利益を出すのもいいのではないか」という意見になりました。

3. Safe and hygienic living space

スタッフの意見としては「3ヶ月に1回医師が来て子供たちの健康記録が作られている」「子供達は週に2,3回ビタミン剤を飲んでいる」「十分な野菜やフルーツを食べれていない状況にある」「アスラマにはクリニックという部屋があったが今年はなくなっている。今年の9月に改装し整備する。」と述べていました。

子供達の意見としては「3ヶ月に1回医師が来て診察してくれる。」「風邪をひいた時はスタッフが薬をくれたり体温などを測ってくれる。しかしスタッフの人数が少ないためきっきりの看病はできない。クリニックがないため他の子供達と同じ部屋で寝ている。」と述べていました。

私たちの提案としては「子供達はグループごとに分担して掃除しているため部屋は清潔さを保っているが、トイレなどの水回りが汚く健康に影響が出るといけないので綺麗に掃除すべき」「また子供達のタオルが足りていないのでシャワーのあとに一つのタオルを共有している。また服が破れていたり数が少なくいつも同じ服を着ているのでタオルや服の数を増やすべきである」「アスラマには門がなく誰でも入ることができる状態で危険なので門を設置すべきである」「バスケットボールとバレーボールを同じコートで同時に行っており危険な状況なのでコートを分けるなど遊び場所を確保すべきである」「遊び道具も少ないので増やすべきである」「子供達の遊び場所に石や棘、ガラスなどが落ちてるのできちんと取り除くべきだ」「古くなった男の子の部屋を優先的に改装するべきだ」という意見になりました。

4. Access to formal education

「きちんとした教育を受けさせること」は、現在、すべての子供達が学校に行くことができているので達成されていると判断し割愛しました。

5. Quality health care

スタッフと子供達の意見としてはどちらも「安全でとても過ごしやすい場所である」と述べていました。

しかし私たちの視点からみればいくつかの問題点があると感じました。

私たちの提案としては「医療に関しては薬の提供はしているものの何名かの子供達は皮膚病に罹患したり、シラミを持っている状態である。また怪我をした時もすぐに手当てをしてはいるが、常駐の看護師がいないため病気の発見に時間がかかることが懸念される。よって看護師を常駐させるべきである」「住環境に関しては女子の建物は建てられてからさほど時間が経っていないため、清潔ですが問題点もあります。具体的には一部のトイレのランプが切れていることや、洗濯物干場の不衛生、ベッドの破損などが見受けられました」「男子の建物は1976年の建設以来、一度も改装されておらず、天井の破損による雨漏りがあったり、その影響で使用不可となった部屋が多数あることです」今あげた問題点を改善することによりより良くなるのではないかという意見がありました。

6. Additional training in wholesome values and productive life skills

スタッフの意見としては「子供達は料理を作る経験や毎月一回、農業体験をすることができる。また男子はガムラン、女子はバリ舞踊など自分で選択することができ、ライフスキルを磨いている。しかし現状は子供達はそういったライフスキルを取得するよりも遊びを優先してしまっている」と述べていました。

子供達の意見としては「コンピュータ、自転車、ピアノ、日本語、英語、バリ舞踊、工作、歌、絵、ガムランなどの練習ができるので嬉しい」と述べていました。

私たちの提案としては「洗濯や掃除、食事の後片付けといったライフスキルはあるが、料理や農業などのスキルが足りないということです。スタッフのインタビューでもあった通り子供達は遊ぶことを優先してしまっています。そこで私たちは子供に興味を持ってもらえるようなプログラムを作ることが必要だと考えました。例えばライフスキルの一環として農業を組み込むことです。洗い場でも当番があるように、農業も当番制にすることで継続性も見込めると思います。またそれを行うことで自然や命の大切さについて考えてもらうきっかけになると思います」「生活に関する自立はできていますがソフトスキルが足りないように感じました。アスラマでは担任制度をとっていますが、一人一人と話す時間をとれていないのが現状です。そこで私たちは、食事やお風呂の時間が決められているように、スタッフと子供たちが話し合う時間を作る必要があると考えました」この2点を実施することで社会に出るための準備にも繋がると考えました。

離村式

ワークキャンプ14日目 9月2日（日）に離村式が行われました。

ホストファミリーやアスラマの子供達が集まる前に私たちが離村式の準備をしました。

準備終了後、ホストファミリーが来られるまでの間はアスラマの子供たちと遊び、写真を撮り、楽しみました。ホストファミリーが来られると私たちは共に座り、しばらく談笑しました。

まずは子供たちの伝統的な演奏とダンスから離村式はスタートしました。その後、会場にいる全員で何曲か歌を歌い、楽しみました。そして、村長さん、牧師さんなどの挨拶が続きました。お偉いさんの話が終わると、私たちの隊長の挨拶の番が来ました。隊長はかなり緊張していました。その後、子供たちが日本語の歌を歌ってくれました。日本語の歌を練習してくれていた事と楽しそうに歌ってくれていたのを見て、とても嬉しく、感動しました。またプリンビンサリ村を特集するドキュメンタリー映画の撮影と日程が重なっており、映画のインディーズバンドも一曲披露してくださりました。綺麗な歌声でした。次にホストファミリーに感謝の気持ちを手紙に書いたものを読みあげました。各メンバーごとに感謝の気持ちを伝えていくのですが、メンバー1人1人手紙を読み終わるごとに別れの時間が近づいてくるのがとても悲しく感じました。ホストファミリーの方々や子供たち、スタッフの方々には家族のように接してもらい感謝の気持ちでいっぱいです。子供たちとの別れもホストファミリーとの別れも嫌でした。後半はホストファミリーの方と一緒にご飯を食べ、写真を撮り、楽しい時間を過ごしました。



お別れ会

デンパサールに戻りワークキャンプ15日目、ヌサドゥアにある教会で9月3日にインドネシア学生とお別れ会を行いました。

16日間ともに過ごし、協力し、ボランティアワークなどの全てのプログラムを共にがんばってきたインドネシア学生とお別れの時です。

日本メンバー全員がインドネシア学生の1人1人に手紙を書いたので全員で横一列に並び、インドネシア学生一人ずつに出てきてもらい、日本人メンバーとハグする者や握手する者、グータッチをする者など色々な形で別れの挨拶をかわしました。あるメンバーは涙を流しておりました。インドネシア学生からのサプライズのお手紙もあり、全員感動しました。

初めて会った時から1日1日過ぎていくごとに仲が深まり、最後のおしゃべりの時には13日間の一日の記憶が蘇り、想いがこみ上げてきました。



日曜礼拝・教会の雰囲気

私たちは日曜礼拝に2回参加しました。

1回目のアスラマのすぐ隣にある教会はバリ島の文化を大切にした伝統的な建物の教会で、2回目は車で5分程度離れた西洋的な教会でした。同じプリンビンサリ村にある教会なのにスタイルの違い、開始時間に違いがあり、村の人達がどちらに参加するのか選択できるようになっていました。日本では選択の余地がありませんと聞きました。

日曜礼拝には村の8割ぐらいの人が参加しており、小さな子からお年寄りまでたくさんの人が参加していました。しかしお年寄りの方のほうが多く過疎化が進んでいると感じました。

写真はアスラマのすぐ隣にある伝統的な教会です。



バリ・ヒンドゥーの様式をとり入れ、キリスト教会とは感じさせない雰囲気が入りにくさが全くありませんでした。また、全面的に壁がなく開放的で風通しがよく涼しかったです。

インドネシア語で進行するため、理解するのがとても難しかったですが、インドネシア学生たちが、どこをやっているのかを教えてくださいました。

2回目は西洋的な教会（次ページの写真）に行きました。その土地の雰囲気とはかなり違う建物では不思議な感じでした。とても現代的で、室内にはエアコンがついており、進行はプロジェクターを使っていました。また歌を歌うときには、キーボード、ギター、ドラムなどの楽器で伴奏していました。伝統的な教会とは全く違う雰囲気でした。



日本人学生・引率者が思ったことや感じたこと

- ・毎週やっているのに、一生懸命、祈ったり、歌ったりしていてもだれないのすごかった。
- ・日本では経験できない新鮮な感じ。
- ・教会という感じがなく入りにくさがない。
- ・堅苦しい感じだと思っていた。
- ・女性の牧師さんが多く、親しみやすい。
- ・たくさん歌を歌うので楽しい。
- ・献金を集めて捧げる役割を子供たちが行って驚いた。

文化探訪（1日目）

文化探訪1日目にバロンダンスの見学、キンタマーニ高原見学、ティルトエンブル寺院、ゴア・ガジャ遺跡、ウインドゥサリという土産店を訪れました。



朝は最初にバリの伝統舞踊であるバロンダンスを見学しました。劇場はバリの伝統的な建物になっていて、入口にはバロンダンスのストーリーについての説明が各国言語に翻訳されて置いてありました。

バロンダンスは最初、20人くらいの奏者によるガムランの金属楽器の力強い伴奏から始まりました。観る前は古くからある伝統的な舞踊だけに理解できない内容なのかなと思ったりもしましたが、いざ鑑賞してみると、実際は楽しく愉快でかつ迫力のある舞踊で堂々と振る舞う大臣の演技や、劇中で色々なキャラにちょっかいを出す、お調子キャラの猿に、主人公のバロンも獅子舞の様な怖い風貌でしたが、実際は猿のちょっかいに振り回されてしまう可愛いキャラだったなど魅力的なキャラクターが登場し、ディズニーのショーを見ているかの様でした。言葉が分からなくとも観ているだけで面白い劇で、むしろ観るだけで楽しめる様に出来ていると思いました。劇中のトークにしてもインドネシア大統領のモノマネなど面白いジョークが多く、特にインドネシア語のわかる人にとっては笑いが絶えないステージでした。



昼前にキンタマーニ高原の展望台へ行きました。キンタマーニ高原はバリ島の中でも標高1500mの所にあり、バスで登って行くうちに段々寒くなっていき、別世界へと来た気分でした。当日あいにく霧が非常に濃くて、視界がきかなかったのですが、今まで見たバリの南国の景色とは違い、みかんの木や高い木や草などちょっと日本の山頂にも似た風景でした。途中で停車していたら突然、果物売りの人がやってきてバスの窓の横から押し売りされ、困惑しながらキンタマーニの展望台地点に着きました。みんな日本語で「寒い、寒い」やインドネシア語で「リネン、リネン」と言いながらレストランに入りました。中は中華風のレストランでした。サテやトマトスープ、黒米と書かれたおしるこの様な料理にパイナップルの料理などがバイキング形式で並んでいて美味しかったです。美味しい料理を食べると自然と体温も上がって元気になってきました。その後は隣にある展望台に登りました。展望台から見えるというパトゥール山と湖は霧が深くで見えませんが、高い展望台は下を覗くだけでも下手をしたら落ちそうでスリル満点でした。



次に山を下って、暖かい所へと行き、タンパクシリンにあるティルタエンブル寺院へ行きました。ティルタエンブル寺院はヒンドゥー教のお寺で、バリの人々が日々飲んでいる綺麗な湧き水が湧いてくる神聖な場所でした。入場の際には伝統的な柄の大きなスカーフを腰に巻きました。場内は何百年も樹齢のありそうな樹木が立ち並んでおり、辺りはマイナスイオンに溢れているように感じました。そこに建っていたヒンドゥー教の寺院も日本のお寺や神社に近い雰囲気を感じました。観光客は白人（恐らくオーストラリア人）が多く、日本人もそこそこいました。そこでは綺麗な沐浴場があり、人々が聖水で身を清めていました。この世での迷いを洗い流してくれると言われていたようです。他にも知らない像やシンボルが沢山ありましたが、ヒンドゥー教の雰囲気を肌で感じられる場所でした。

その次にバスに揺られてゴア・ガジャ遺跡へ行きました。この寺院も綺麗な水が湧き出る事で有名な寺院で、ジャングルに囲まれた谷に建てられた寺院でした。ひっそりとした所で、中には洞窟もあり、神聖な雰囲気がしました。廻っていると日本語をペラペラに話すガイドさんがいました。一緒に説明を聞いて写真を撮って貰ったり、フジヤマといった昔の日本の歌と一緒に歌ったりしました。実はガイドは有料だったようで、二人の学生はお礼を払っていました。



帰る前に遺跡の前にあったお土産物の狭い市場を通りました。行く先々で片言の日本語で「コレヒャクエン」や「ヤスイヨ」といった凄まじい客引きに合いました。ずっと飛んでくる片言の日本語に笑いを耐えながらなんとか客引きをスルーして、バスに乗ることができました。



最後は夕方に大きなお土産屋専門店に行きました。他に比べてちゃんとした建物の店でしたが、値段は観光客向けに高めに設定されていました。自分としては後で行ったスーパーの方が良いものが沢山買えましたが、見応えある物ばかりで、大きな木像や家具製品などここでしか見られない物もあり、目の保養になりました。

プリンビンサリ村にいる間はキリスト教の文化に触れていましたが、この日はバリで大多数を占めるヒンドゥー教の文化に触られました。異国の雰囲気を感じながらもどこか日本にも似た所がある、そんな文化探訪でした。

文化探訪（2日目）



この日は『出会いと別れが多くあった日』だったと思います。

初めに、今回共にこのワークキャップを過ごしたインドネシア学生の母校「ディアナプラ大学」を訪問しました。ここはバリの観光産業に関わる人を養成する4年生大学です。私達は初めに、教室を見学し、続いてホールのような場所を訪れました。数百人の学生が見ている中、舞台上に立つというのはなかなか無い経験かと思われます。そして私達は「世界にひとつだけの花」を歌いました。今まで「アスラマ」や「教会」などさまざまな場

所で、私たちが感謝を伝える手段としてこの曲を歌ってきました。途中からはインドネシア人の学生も交えて、チーム全体の仲間意識を確認する素晴らしいものであったと思います。その曲を皆で歌うのもこれが最後。チームとして何かするのもこれが最後。なので、歌っている途中から寂しさと悲しさがこみ上げてきました。それと共に、今までやってきたワークや交流会、日本語プログラムに日本食など一緒にやった活動が思い出されたように感じます。その後教室に戻りディアナプラ大学の人と留学生のドイツ人学生に私達がやってきたことを報告しました。まず日本人学生が日本語で話し、それをインドネシア語に、さらに英語に通訳していく。2段階の通訳は初めて見ましたが、日本語と英語を聞き比べてみると感情の捉え方が大きく変化していました。異なる言語は難しいなあと改めて感じました。ここでは同年代の学生との『出会い』がありました。

続いて「バリ日本人会」を訪れました。ここは、バリで生活する日本人の交流や、サポートをするだけでなく、子供たちに日本語などを教える「補習校」というものです。日本で言うところの塾に近いものだと思います。インドネシアはとても暑い国なので朝早くからお昼までは現地の学校。夕方からは補習校に来るというシステムです。算数は現地の学校でもやっているので必須科目としては「国語」となります。授業があるのは月・水・金の3日。全生徒数は180人ですが、日本で教員をしていた人は2人しかいません。故に全ての生徒を先生が見ることはできないというのが現状です。しかし日本語を学ぶということは観光産業の就職にも役に立つので、地域でのイベントを開催するだけでなく、テレビやSNSを使うなどしてお金を集め、授業の質をあげ、ここで学んだ子が将来的にインドネシアの役に立つ。というシステムを作ってみるのはどうか？と思いました。そして、日本語プログラムで使っていた「あいうえお表」・神経衰弱用のカードをプレゼントしました。これは日本語を始めたばかりの子供達にとってとても役に立つそうです。ここでは異国で生活している日本人との『出会い』がありました。





3箇所目として「ヌサドゥア5大宗教施設」を訪れました。この場所はインドネシア政府がどこの国の人が訪れて来ても、それぞれの宗教で礼拝ができるように、政府公認の5大宗教の祈りの施設を設けているという珍しい場所です。今回はプロテスタント系のヌサドゥア教会のみ訪れました。ここの礼拝堂の正面にあるレリーフは「種」がモチーフで、1つの種の中に葡萄や聖母マリアらしきものが三重に重なっています。植物に信仰を重ねるといところが、普通のプロテスタント系教会と違い、バリ文化を大切にしようとするそれまでの教会の歴史が垣間見えました。そしてここで私達日本人は、今までの感謝を込めて書いた手紙をインドネシアの学生の一人一人に渡しました。日本人学生は祭壇の前に一列に並び、インドネシア人学生は椅子に座ってもらい1人1人名前を呼んで前に出て来てもらいました。各々今までの思いがこみ上げて来て、お互い言葉を掛け合ったり、握手や抱擁でお互いの繋がりを再確認し、涙を流さずにはいられませんでした。手紙を渡すという事によって人は「別れ」というものを実感します。17日という長い間ずっと一緒

にいた事で、もはや友達という関係をこえ、家族といってもいいぐらいのかけがいのない存在になっていたのだと思います。今の時代SNSはあれど、いやあるからこそ実際に人と触れ合うというのはなかなか難しい事なので尚更喪失感は大きいと思います。その悲しいけれどもどうしようもない感情を十分に書き表すことはできません。私達は心に穴が空いたようになりました。そして私達が帰ろうとした時にインドネシア学生に呼ばれて、なんと今度は彼らから私達宛に手紙をくれたのです。しかもインドネシアの学生の手紙は、キレイに包装してくれていて中にはプレゼントをくれる学生まで居ました。感謝感激です。私達はここでお互い手紙を交換する事で『別れ』を実感しました。

そして、最後に「マタハリ・ショッピングモール」というクタの中でもかなり大きいショッピングモールに行きました。インドネシア学生に自分が欲しいものを伝え、そのお店に連れていってもらいました。私個人としては日本の漫画のインドネシア語版や紅茶の葉。他の学生は、知り合いへのお土産や化粧品、服やアクセサリといった身だしなみに関するものが多かったように感じます。夕食はインドネシアの学生と共にインドネシアで有名なファミレスの料理を頂きました。ここではインドネシアの日常に『出会い』ました。

最後に、ホテルで食事を一緒にしました。ここでは長いこと別れを惜しむのではなく、すぐに出発することになりました。晴れやかな気持ちで、お互いを送り出すことができたのではないかと思います。このIWCにおける絆の強さを感じる事が出来た1日でした。

バリの習慣・歴史・役に立った言葉

私達はインドネシア、バリに来て歴史や文化、習慣について日本とは大きく異なり違いがあることに気づき、そこからたくさんを学びました。一番印象的だったのがトイレ、お風呂場、水回りで、一番苦労した点でもあります。ホームステイ先の家を含め、多くのトイレでトイレットペーパーが設置されていませんでした。また水洗タンクがない、もしくは機能しないところが多いため、水溜めから手桶で水を汲み尿や便を流すといった日本では到底考えられない貴重な経験をしました。そのため全ての排出物を流すのに時間がかかったのもよく覚えています。体を洗うことについても風呂と洗面所の水は冷水しか出ないので、朝晩など震えながらシャワーを浴びていました。

次に手を洗う習慣、歯磨きに対する認識、意識の違いについても日本とは異なる点が多くありました。例えば家に帰れば手を洗う習慣や朝と夜ご飯の後に歯を磨くといった習慣があまり根付いていないように思いました。一番身近だったホームステイ先の家の人や歯を磨いている所や風呂に入っている所を一度も見ることがありませんでした。たまたまその現場を見る機会がなかっただけかもしれませんが、滞在中に見ることはありませんでした。

インドネシアは多宗教国家であり、ヒンドゥー・カトリック・プロテスタント・イスラム・仏教等を信仰している人がいます。バリ州では住民の83%がバリ・ヒンドゥー教徒だそうです。

私はインドネシアに来て本当にみんな優しいと思いました。これは正直一番実感したことです。ホームステイ先の人を含め、道ゆく人、知らない人までも暖かく迎えてくれました。日本では知らない人に挨拶すると寒い目で見られる場合があります。また外国人なら尚更だと思えます。しかしアスラマに行く途中、バイクですれ違う人に、僕らの不慣れなインドネシア語で挨拶をしても全員が笑顔で接してくれて笑ってくれたのが、今でも鮮明に覚えていて、嬉しかったです。

また料理に関しては全体的に味が濃く辛めの料理が多かった印象があります。日本人メンバーには辛めの味付けが苦手と言っている人も数人見られました。アスラマでの食事・ホテルでの食事・ヴィラでの食事、全体的にエスニック系の様な味付けで個人的には大変美味しかったです。香辛料が多くスパイシーな味付けなので、初めて食べる方はいきなり多くの量を取らない方がいいと思いました。私も美味しいからと調子に乗ってしまい、一度にたくさん量を摂取したことにより、お腹を下したことがあり、反省しています。

そして全体的にインドネシア、バリの人は朝起きるのが早く、そして夜寝るのが早いです。これの理由は早く起きて日の出とともに仕事をし、日が沈むと帰りすぐに寝るといった生活スタイルが主流だからだそうです。私のホームステイ先の家族も、かなりの早起きでビックリしました。私は滞在中は毎日4時45分に目覚ましをセットしていましたが、それよりも早く起きていて驚きました。

インドネシアに来た時に街の中のバイクの数にも驚きました。道路に走っているバイクの数が尋常ではなく、日本とは比べ物になりませんでした。空港に降りてから移動中に見たのですが二人乗りはもちろん三人乗り、赤ちゃんを抱えながらの四人乗りもありました。また小さい子供までもがバイクに乗っていることに驚愕しました。インドネシアでバイクの免許を取ることができるのが17歳と聞いていたのですがその年齢に達してないであろう子供までもが乗り回して、その辺はもう暗黙の了解なんだろうと思いました。

最後に私がインドネシアに来てよく使い役に立った言葉を紹介します。暑い（パナース）が一番使う頻度が高かった気がします。コミュニケーションに困った時はとりあえず、パナースを使っていました。

美味しい（エナツ）コーヒー（コピ）

インドネシアではホームステイ滞在中・ホテルを含め、ほとんど毎日コーヒーを飲んでいました。コーヒーをご馳走してくれるお母さん、おばあちゃんに コピ エナツ!! とご馳走してくれる度に毎回言っていました。

僕を含め、日本人学生もだいたい、ここで紹介した言葉を使う機会があったと言って、大変役に立ったと思いました。

全ての経験が私にとって経験値となり、日本とは違った視点で物事を捉えることができるようになり、今までより視野が広がった気がします。インドネシア・バリでの経験は僕の人生の宝物です。



ヤシの実を割ろうと悪戦苦闘!

事後研修について

事後研修

今回は予定通り帰国することが出来ないというイレギュラーな事態に陥りました。そこで、私達は事後研修を前倒し、帰国後の活動が進めやすいように朝と夜、1日に2コマ取り組みました。私達がバリーで今まで取り組んできたプログラムを十数個の項目に分け、それぞれに対して担当者を決めて個人個人で報告書を作っていました。しかし個人作業というわけではありません。自分が担当しているところに関して、他の人はどう思ったのかお互いにアンケートを行ったり、同じ活動をやっているもの同士意見を出し合うなど協力しあって報告書を作っていました。

日本に帰ってきてからは報告書の内容の質の向上、写真の添付をして報告書の原稿を仕上げていきました。それとともに、学園祭で私たちが発表する為の資料を作成していきました。学園祭の資料としてはパワーポイントで各々が担当した部分について写真を使ってスライドを作りました。また、それまでに作成した文章をもとに当日の発表原稿を作成し、本番に向けて練習して行きました。



そして学園祭当日、一人二、三分程度で各自が体験したことを伝えていきました。各々が何を学び、感じ、どのように成長したのか。私たちがこのプログラムを通じて得たことを他の人に伝えることによってこの経験がより確かなものとなりました。

海外に行くということだけでも貴重な経験ですが、さらにボランティアもするとなるとかけがえの無いことだと思います。それを少し時間が経ってから振り返っても鮮明に思い出せるのはそれだけ中身が濃かった証だといえるでしょう。この事後研修を通して、バリーの体験が一生残るものになったと思います。

参加学生のレポート

私の感じたIWC

社会学部 4年次生 上久保 圭



8月20日から9月10日までインドネシアに行った。従来の予定では、9月6日に帰国の予定だったが台風21号の影響で関西国際空港が閉鎖になったため延泊になった。しかし、いつもはテレビで見ている災害に家族や友人が遭遇している事から、アスラマで経験したボランティアとは少し違うが、災害について考え直すきっかけにもなったように思う。この22日間に感じた事は忘れることのない日々になったように感じている。

本プログラムは過去に話を聞いており、以前からプログラムの事は知っていた。私がこのIWC32回に参加するきっかけとなったのは、就職活動だった。就職活動を行う上で、大学生活の中で私は何か残ることや、何か次のステップに繋がるようなことをしたのかと考えたときに、何気なく平凡に過ごした大学生生活しか頭に浮かぶことがなかった。ある日、某大手企業の説明会に参加した。その際に「挑戦する勇氣」と言う言葉を頂き、最後に最高のチャンスだと感じ応募する決心がつき、参加することになった。

IWCのメンバーとの顔合わせをしたのは4月である。毎年20人近くいると話していたが今回は10人といった約半分の人数で初めはすごく不

安だった。自己紹介が終わると4回生が1人と言うことに気づき、不安は更に増していく一方だったのが記憶に新しい。だが、参加したからには4回生として何か伝えられることや下級生から感じ取れることが必ずあると考え、このメンバーで必ず成功させようと心に決めた。

事前研修・合宿では10人だからこそ取れるコミュニケーションで、実際にプリンピンサリ村のアスラマと言う施設の子供たちに披露するプログラムについて話し合ったり、バリ島の文化やインドネシア語、そして何よりも健康面について事前学習では考えた。現地での主な活動内容はアスラマの壁を作るボランティアワークがメインで、他には小・中学校での日本語授業や日本食パーティー、アスラマの子供たちとの交流会だ。メンバー10人で各班に分け、詳しい内容を各班で決めて練習をしたり皆で気づいたことを共有できてすごく当初の不安からは解放されていた。

そして、あっという間に月日は流れ出国の日の8月20日になった。インドネシアにつくまではワクワクが止まりません。約7時間のフライトを経て空港に着陸。見たことのない風景がその時点で広がっていた。早速ホテルに向け入国審査を済ませて外に出るとタクシーの勧誘の嵐だった。だが、この感じた事こそが異文化体験なのだと思う。バスを走らせると周りには2人や3人乗りの原付に囲まれ、左右から車スレスレで追い越されたり少なからず衝撃的だった。この背景には公共交通機関などが少ない上に、時間がダイヤ通りに走っていないかったり、日本より交通ルールが緩いのだと思い、他には首都圏にいるのに電車が走っていない事に気付いた。このことが原付の多い一つの要因なのかなと考えながらバリの街並みやお店を見ているとホテルに到着した。ここで今回のIWC32回に参加するディアナプラ大学の学生と合流した。ディアナプラの学生は英語がペラペラで積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢、こ

の積極性は見習わないといけないうごく感じたのだが、私は英語がすごく苦手です話さずことなんて出来ない。事前研修で由比先生にインドネシア語を教えていただいたが、もちろん会話に使えるレベルではない。そんな中すごく簡単な英語でゆっくりと翻訳を使いながら話してくれるインドネシア学生にすごく温かみを感じた。

一晩過ごし、全てが新しい経験であり、不安を募らせたままプリンビンサリ村へ出発。変わっていく景色を眺めながらバスに揺られ3時間半ほどで到着。早速ホストファミリーの家へ向かい、私はインドネシア学生と日本人学生と二人でホームステイさせていただくことになった。実際に初めて泊まる家を見て思いのほか綺麗な家ですごく安心した。プリンビンサリ村は想像している村の感じではなく、とても自然にあふれていて、部屋にはベッドも扇風機もあり想像を遥かに超えるところだった。

<生活面>

プリンビンサリ村での食事は全てアスラマで頂くことになっており、まず初めに「ハエが多い。」と率直に感じた。食事中は体には常に何匹か止まっているのではないかと。言うくらい飛んでおり、ハエが運んでくる菌や汚れが食べ物や、食器に止まることで付着するような衛生環境だった。以前はなかったと聞いていたが、食堂には網戸がついている。だが完璧に張り付けられているわけではなく、小さい穴からどんどんと入ってくる。初めはすごく嫌だった。ましてや私は虫が大嫌い。そうも言ってもらえない。ここで13日間毎日3食食事させていただくと言う事を思いながら食事していると意外とすぐに慣れてきたのだ。手にハエが乗っかかるとも気にならないくらいになった。日本で食事しているときにハエなんて考えられない。私たちの当たり前はこちらでは当たり前ではなく、普及していない事の方が多く、一切通用しないということだ。私たちは日頃からどれだけ良い環境で過ごさせてもらっているか身に染みて感じた。

次にお風呂やトイレの水回りの環境についてだ

が、事前学習で「湯船はなくお湯は出ない水シャワーを浴びることになり、トイレはトイレトーパーペーパーを流さずゴミ箱に捨てる。」と聞いていた。正直この水回りに関しては全く想像もつかなかった。中にはシャワーのない家もある。そんな家庭はバケツのようなものの中に水を溜め、桶で水をかぶるマンディーと言われる入り方もあるようだ。私のルームメイトはシャワーがあるにも関わらず毎日マンディーをしており、初めはすごく驚いた。パリの気候は乾期で日中は日本のように暑い、夜になると少し肌寒い気温である。そんな気温の中アスラマから21時には帰ってきて水シャワーを浴びる。毎日凍えるような寒さだった。どれだけわがままを言ってもお湯はもちろん出てこない。お湯が出るありがたみを心の底から感謝しないとイケないと感じた。トイレに関しては私の家ではトイレトーパーペーパーを流していいと言われていたので苦痛に感じることは特になかったが、アスラマやホテルのトイレでトイレトーパーペーパーを流して詰まったり、逆流している事を見る場面が多々あった。確かに日本のトイレは水洗でボタンを押したりすると流れる。アスラマのトイレも流し方は同じということもあり「流してもいいだろう」といった考えで流すと詰まってしまう。詰まると誰かが直さなければならない。こういった小さな異文化に適応していかないと、アスラマの職員などの仕事を増やしてしまおうのだ。

<アスラマでの活動内容>

まずは、なんと言ってもボランティアワークだ。今回はプリンビンサリ村のアスラマの堀を作る手伝いと農作業の手伝いをさせていただいた。基本は午前のワークで堀づくりをし、午後からのワークで農作業をした。堀づくりは大きい石や小さい石で土台を固め、その上にブロックを並べる作業である。日中暑いこともあったので自分でペース配分をすることがすごく重要になった。レーン作業で小さめの石を一行に並んで渡して行ったり、個人で砂をバケツで運んでいるときなどのメンバー同士の掛け声や、気遣いなどの助け合いがすごく良いチームワークとなり、予定よりも早く仕

事が終わり、休憩を多くとる事が出来た。そのお陰で終盤には職人さんに余裕ができ、セメントを混ぜたり、ブロックをセメントで繋げて乗せるなどの作業もさせていただいた。午後からの農作業では、耕した畑の畝に黒のビニールシートをかぶせてそれを風で飛ばされないように竹を使って止めるのである。日本ではどうしているかはわからないが、初めて農作業をする中で一番驚いたことだった。更にその竹で止めたところは意外としっかりと止まっている事に驚いた。そこに穴を空けて種を蒔いて上から肥料の入った土を被せるという簡単な作業だった。日本では農作業をするにも工事するにもなんでも機械が使われる。だがアスラマでは機械といったものはなく、一輪車やバケツを使ったり、セメントはもちろん機械で混ぜるのではなく、シャベルやスコップなどを使い一つ一つ手で作業をする。日頃機械がありふれている日本の生活とはかけ離れ、何事も自らの手と足で作業をし、日に日に出来あがっていく壁を見ると大きな達成感が込み上げてきた。

次にアスラマの子供たちとの交流会だ。事前に日本で何を披露するかなどを決め、練習をしてきた。私たちは「錯覚ダンス」と「世界に一つだけの花」そして「相撲」を披露した。アスラマの男の子は「ガムラン」女の子は「バリ舞踊」と言った伝統的なものを披露してくれた。日頃明るく元気に遊ばまわっている子供たちだが、真剣な眼差しで取り組む姿勢は日頃の子供とは別人のように輝いて見えた。日本人学生の「錯覚ダンス」は喜んでくれるかと心配していたが、それなりに喜んでくれただろうと感じた。それよりも喜んでくれたのが「相撲」だった。バリで伝統的な文化を披露してくれると聞いていたので、こちらも用意をしていた。これが子供たちも参加できてすごく喜んでくれ、交流会はすごくスムーズに進み大成功したように思う。この背景には、アスラマ職員との事前の打ち合わせやインドネシア学生との順番決めなど、しっかりとコミュニケーションをとることで成功に繋がったと感じている。

次に日本語プログラムである。プリンビンサリ村の小・中学校で日本語の授業をするものである。

今回の授業では「あいうえお表」「動物神経衰弱」「紙芝居」「伝言ゲーム」「動物バスケット」の5つを行った。日本人学生とインドネシア学生のペアで授業を行うが、これも現地に行かないと全く想像のつくものではなかった。事前にやることは皆把握しており、どうインドネシア学生に伝えて教えるかを考えたが、コミュニケーション以外に見つかる言葉はなかった。子供たちは意外と日本語を知っている事に驚き、一つ一つに真剣に取り組む子供もいれば、少しやんちゃな子供もいて、教える難しさを感じた。また、「私たちは準備をただけ、後はインドネシア学生に任せる」と言う感じになってしまったのが個人の反省点だった。

最後に日本食プログラムだ。今回はBBQとミニカレーをアスラマの子供たちやホストファミリーに振る舞った。これも、現地に行かないとどんな器具があり、どんな場所で調理するのかなど想像はつかなかった。だが、終盤のプログラムだった事もあって皆のコミュニケーションがとれていた。インドネシアの方に日本のカレーは甘いと聞くが、口に合うだろうかとすごく不安だったが、皆が笑顔で食べていたり中にはおかわりする姿も見れてすごくうれしく感じた。

離村式ではお世話になり、様々な体験をさせていただいた大好きなホストファミリーや子供たちとのお別れに涙ぐむメンバーもおり、私自身も感謝の気持ちと寂しい気持ちに堪えられず涙し、別れを告げた。

このような様々な出来事を通し、物事一つ一つの経験が新しく、たくさんの人に支えられ、人の幸せは裕福かどうかではないと言うことを学んだ。アスラマの子供たちはどんな事情でそこにいが常笑顔で私たちと接してくれた。その笑顔がこちらまで伝染してくるかのように元気をもらえた。このプログラムは私たち学生だけでは成り立たない。ホストファミリーの方々、各関係教員の方々、現地で看護師の働きをしてくださった石井美和さん、そして何よりも参加させていただいた日本の家族。様々な方々に支えられてきたと

いうことを忘れてはならない。更に一番大きな存在となった、毎日を共に過ごしたIWC第32回の16人の最高のパートナー。毎日を共に過ごす、嫌な部分なども垣間見えてくる。そんなメンバーでも個性豊かで、一人一人何か考えを持っていたり、思いやりを忘れない心。失敗や空回りした事もたくさんあったが、そう言ったことが心の支えになったように感じた。

本当にありがとう。

感謝

社会学部 3年次生 大西 芽瑠



「はじめに」

今回このIWC32回ワークキャンプに参加して、たくさんを経験し、学ぶことができた。私にとって自分の視野の狭さを実感する旅でもあり、またこの22日間で経験したことが私自身が変わるきっかけにもなった。

私がこのワークキャンプに参加しようと思ったきっかけは、単位が少なかったことも少し理由としてあげられるが、何か大学生の間に大きな事にチャレンジし、みんなに自慢できるようなことを成し遂げたかったからだ。大学生生活を普通に送る生活に飽きてきて、ウズウズしている頃に出会ったのがこの活動だった。

事前研修を通して、参加するメンバーとは日に日に仲良くなっていった。初めは人間関係が不安でたまらなかったが次第に心を開くようになり、

はじめの印象とはガラリと変わり居心地が良いと感じるようになった。色々なプログラムを共に乗り越えたり、プライベートでも遊んだりし、このメンバーとなら苦じゃないと感じた。

第1章「行く前に自分が思い描いていたこと」

インドネシアへ訪問する前、私はインドネシアに対して様々なイメージを持っていた。文化、宗教、生活、人間性など様々である。中でも一番不安に感じていたことは、生活である。日本では当たり前前のことでも、現地ではそうではない。その現実を自分で確認できるという良い機会になった。また、私が抱いていたイメージは、現地の人々と関わることや、実際に身をもって生活を体験してみると、文化に触れることで自分の中の悪いイメージは消えていった。

日本にいる頃は、宗教に対して堅苦しいイメージがあったが、実際に日曜礼拝に参加してみて、日本ではあまりできない経験が出来たし、その宗教を信仰している人たちにとって大切な場に行けたことで、さらに宗教をへの関心や興味が高まった。

第2章「実際のインドネシア（バリ島）の印象」

第一印象として「日本と違い個人を尊重していて自由な国なのかな。」というものだ。仕事中に携帯を触っていたり、お喋りしていたり、日本では考えられないようなことがたくさんあり驚いた。空港からホテルまでのバスの中から見る街は新鮮で初めて見るものが多く興味津々だった。ホテルに着いて、インドネシア学生と合流した。初対面の感想は、「まじかあ〜」というのが本音。女子学生は積極的で、日本の男子学生に話しかけていた。突然自己紹介が始まり、言語の違う人とコミュニケーションの取れなさを実感。中学校・高校生で学んだ英語を思い出そうと思っても出てこない。必死に知っている最大限の単語で話すのが精一杯だった。初めはなかなか言葉が通じなかったが、ジェスチャーや英単語を使うことでフレンドリーなインドネシア学生とは仲良くなった。インドネシアに無事着き、これから始めると

いうウキウキする気持ちの反面、事前研修でインドネシアの生活や食について学び、やっていけるのか？死なないか？と心配と不安があった。初めは辛く、特にマンディーヤトイレは衝撃的で、女の私にはたまらなく過酷で、シャワーのお湯は出ず、滝修行のようなもの。また、トイレにトイレットペーパーはまず無く、あったとしても、流せないで水を便器の横に置いてある大きなバケツから桶ですくって流すなど、残りの村での滞在時、耐えられるか不安でたまらなかったが、生活していくうちにその生活を自然と受け入れれている自分がいて気づけば馴染んでいた。

食に関しては、想像していたような物ではなく意外と口に合うものばかりだった。少しスパイシーな味付けのものが多かったが、そればかりということもなく美味しかった。正直辛いものは苦手で、日本にいるときも基本辛いものは食べないようにしている。だがせっかくインドネシアに来たのだから新しいものを食べてみようと思い、色々な料理に挑戦した。苦手なものもみんなと一緒に食べるご飯では美味しく感じ、インドネシアを去る時には辛い料理も以前より少し食べられるようになった気がする。アスラマでご飯を作ってくれたスタッフ、ホテルにて毎日美味しい料理をご馳走してくれたスタッフ、友達には本当に感謝している。

グリーンビンサリ村では、アスラマの施設に着き、バスの窓から外を見て見ると、私たちが来るのを今か今かと待ちわびているかのような満面の笑みで出迎えてくれていた。日本での事前学習の時に子供達にはさまざまな背景があると聞いていて、親がドラッグ中毒・両親が両方とも亡くなってしまい、1人になってしまった子供達、貧しい家庭に生まれて貧困のサイクルにある子、親からの虐待などと、マイナスなイメージしか私はなかったが、実際に見て見ると子供達の顔には笑顔があふれていて、そのような背景は感じる事ができないくらい、元気とパワーに満ち溢れていた。その笑顔を見ると、いよいよこのプログラムの醍醐味が始まるのかと実感したと同時にやはり様々な不安があったのも確かだ。日本では風呂とトイレが

別々になっていて、トイレにはトイレットペーパーが常備されており、お風呂からはあったかいお湯が出る。しかしインドネシアでは多くのトイレにトイレットペーパーが設置されていなかったり、水洗トイレでないため、水を汲んで排泄物を流すという方法であったり、朝でも夜でも水風呂に入らなくてはならないので、寒い思いをしたのを覚えている。村だからなのか、ハエが多く、自分についていることは当たり前で、ニワトリや犬が、放し飼いにされている犬が多く、嘔まれて、狂犬病にならないか不安になった。ホームステイ先のイブはとても優しく、暖かい笑顔で迎え入れてくれた。ホームステイは初めてで緊張していたが優しさが滲み出るイブのお家で良かったと安心した。日本語と英語が通じなかったがジェスチャーやルームメイトのインドネシア学生に通訳してもらいコミュニケーションを取った。

第3章「プログラムで印象に残っているエピソード」

ワーク作業は、主に塀作りと農作業の2つをした。塀を作る為にブロック運び、砂運び、砂利運びなど力仕事が多く男子が率先して女子をサポートしつつ、こまめに休憩を取り効率よく作業をした。一つ一つの作業が積み重なり大きな壁を完成させた。塀が完成した時に仲間と共に喜びを分かち合った瞬間を今でも鮮明に覚えている。

農作業のワーク内容は、畑の整備、畑のビニール被せ、ビニールの穴あけ、ビニールを竹で止める、種や苗植え、肥料を与え、水を撒く、植えた苗が真っ直ぐ伸びるように添え木の設置、添え木に沿ってロープを張ることだ。日中のワーク作業は、過酷で何度もやめたいと感じた。どちらも、ともしんどいワークでしたが、みんなで協力する楽しさや、「頑張れ！」などの声かけの大切さを実感し、それらを通してやりがいをもっと体験できた。炎天下での過酷な作業でしたが、アスラマの子供たちも手伝ってくれ、声を掛け合ったり、励ましあったりしながら、インドネシア学生との絆を深め、子供たちと交流し、お互いの言語を教えあうなど楽しく作業ができ、時間が経つのがあっという間に感じた。このワークを通じて、

IWCのメンバーが1つになれた気がした。1つのワークをチームみんなでやり遂げることで、達成感やチームワークの大切さを実感し、学んだ。またこのような作業は、日本では体験できないことなので、とても貴重な経験になった。

交流会では、歌とダンスをした。練習の最中に意見の違いから仲間とぶつかって苦い思いをした場面もあったが、しっかりお互いの意見を言い合い、話し合い、解決し、きちんとダンスと歌を完成させることが出来た。結果、子供たちがとても喜んでくれ、また、意見が違ってもお互いを尊重していくことや、チーム一丸になって何かを成し遂げることの大切さを学んだ。

日本語プログラムでは、日本にいる時から沢山準備をしていて、その準備のおかげでハプニングもなく全て順調に進み、小・中学生に喜んでもらい無事成功した。授業の内容は、動物の名前が書いてある「あいうえお表」を教えるもので、興味があるのか真剣に話を聞いてくれてとても授業がしやすかった。このプログラムを通して、教師という職業の凄さと難しさを感じた。難しいけれどその分生徒の笑顔を見ると楽しいと感じた。授業が終わる頃には、子ども達が教えた日本語をしっかり覚えてくれていたので、とてもやりがいを感じた。

「まとめ・感想」

今回のプログラムに参加して、行く前と帰国した時の気持ちの変化や、考え方が変化したと感じる。沢山の経験をして、いっぱい壁にぶつかったからこそ成長できたのではないかと考える。最高の仲間に出会えて、自分の視野も広がり、日本での今の生活の幸せさや、日本の安全さ、生活の贅沢さ、お金の大切さ、なにより1人で生きているのではないということに気づかされた。何度も嫌になったり、諦めそうになることがあったが、その度に仲間にも助けられた。この経験が自分自身を見つめ直し、変わるきっかけになり、自信へと繋がったことに間違いはない。なにかをみんなで成し遂げる嬉しさや苦しさ、やりがいや達成感を感じるいい機会になった。毎日書いていたふりかえ

りシートや日記を見るたびに戻りたい、また行きたいという気持ちになった。インドネシアに行く前は、帰国後こんなスカッとした気持ちになっていたとは想像もつかなかった。とにかく、時間が経つのが早くて、延泊を合わせた22日間があっという間に感じた。インドネシアでは毎日違う体験ができ、それら全てが私にとって刺激となり糧となり素晴らしい時間を送ることができた。一番私が学んだことは、私はインドネシア語はもちろん英語も喋ることはできないが、そこで投げ出さず諦めず、努力することで、相手に気持ちを伝えられることの素晴らしさであった。IWC32回に参加して良かったと心の底から思う。IWCワークキャンプというプログラムは、私の大学生活を大きく変え、この経験は私の一番の宝物だ。関わってくれた全ての人に感謝の気持ちでいっぱいです。

IWC32回での経験

経営学部 3年次生 藤原 健嗣



はじめに

私は高校時代に異文化を知りたい、他人のために役に立つこと、ボランティア活動をしたかった思いがありました。大学に入ってから、卒業までに大学で何か特別で貴重な体験がしたいなどほかに多く思っていることがありました。私がそんなことを思っているときに国際ワークキャンプ(IWC)があることを知りました。私は内気な性

格で、インドネシアが初めての海外でとても不安で参加するか迷っていました。迷っているときに昨年の国際ワークキャンプ（IWC31回）に参加した先輩と話しをする機会があり、先輩の体験したこと経験したことを聞きました。それが最後の一押しとなり、参加する決心がつきました。

事前研修

事前研修では毎週金曜5限に集まり、インドネシアでの活動、言葉、文化の違い、諸注意などインドネシアに行くために必要最低限の事や困ったときに役に立つものなど色々と教えてもらいました。プリンビンサリ村に滞在中に行うプログラムを準備するため、交流班、日本語プログラム班、日本食班の3グループに分かれてそれぞれのグループで何をするのかを考え、時間が足りない場合は時間を作り集まるなどとても大変でした。

しかしアスラマの子供たちの喜ぶ顔が見たいため、みんな一生懸命取り組み少しでも喜ばせるために色々な意見を出し合っていました。

現地 インドネシア

日本から約7時間飛行機に乗るとデンパサールの空港につき、そこから車に乗りホテルに向かいました。ホテルに着くと既にインドネシアで一緒に過ごすインドネシア学生が集まっていました。バス移動の時、窓から外を眺めていて思ったことがありました。それは、車とバイクの多さです。日本ではあまり見かけない風景でした。インドネシアで過ごしていた間、歩行者、自転車に乗っている人はあまりみかけませんでした。また車に乗り少し移動していくと、犬が放し飼いにされていたこともびっくりしました。

インドネシアに着いた日の夕食と翌日の朝食はインドネシア学生との交流を深めるためにインドネシア学生と日本人学生が均等に分かれるように座り食事をしました。インドネシアの学生と話しをするのが難しいと思っていましたが、インドネシア学生はとてもフレンドリーで英語を話せるのでなんとかコミュニケーションが取れました。ホテルで一泊してからプリンビンサリ村に向かいま

した。プリンビンサリ村はとても自然豊かでした。アスラマに着いてバスから降りると多くの子供たちが出迎えてくれました。子供たちはとても生き生きしていて笑顔でとても瞳がきれいでした。アスラマの子供たちは親元から離れて生活していると聞いていたため、こんなにも笑顔で出迎えてくれるとは思いませんでした。親元から離れているため、悲しい気持ちや暗い気持ちになっていると思っていました。そのため正直そんなに出迎えてくれないと思っていました。

しかし、子供たちは一人一人丁寧に笑顔で自己紹介をしてくれました。そのため良い意味で期待を裏切られました。

ホームステイ先、村の様子

子供たちとの交流が少し落ち着くとホームステイ先が発表され各々ホームステイ先に。ホームステイ先に行くまではその家のお父さんとアスラマの子供たちが一緒に行ってくれました。その時に子供たちと少し話せました。ホームステイ先に着くと父母が笑顔で迎え入れてくれました。そして丁寧にどこに何があるかを教えてくれました。また、ホームステイ先に行くまでに村の人達とすれ違ったのですがみんな笑顔であいさつしてくれてとても温かい村だと思いました。しかし番犬がとても吠えてきました。また基本放し飼いのため、私の後ろをずっと付きまどってきました。朝、昼はそんなに気にならなかったのですが夜はとてもうるさくしつこかったです。また狂犬病のことを事前研修の時に保健の先生から聞いていたため、最初のほうはとても怖かったのを覚えています。しかし滞在期間が長くなるにつれ徐々に慣れていき、最終的には気にならなくなりました。

ボランティアワーク

今年のボランティアワークは塀づくりと農作業の2つを体験させていただきました。塀づくりは、土台となる大きめの石運び、塀となるブロック運び、セメントに必要な砂利などを運びました。砂利運びの時は、バケツなどを使いました。また、バケツリレーなど効率の良い方法を試しました。

農作業は畑にシートを敷き風で飛ばないように竹串で止め、シートに穴をあけ野菜の種を植えました。ワークをしているとき子供たちが手伝ってくれました。

交流会

交流会では、歌とダンスを披露しました。アスラマの子供たちの歌、ダンスがとてもかわいいのを覚えています。インドネシア学生たちも歌とダンスを披露してくれました。ダンスの時は、日本人学生も呼んで一緒にダンスしました。とても楽しかったです。

日本語プログラム

日本語プログラムでは、私たち日本人学生がメインとなって、インドネシア学生にいっぱい支えてもらいながら小学生と中学生に日本語（ひらがな）を教えました。小学生はとても積極的に取り組んでくれました。中学生はすでにひらがなを勉強していたらしいが、こちらも積極的に参加してくれました。また事前研修で用意していたゲームをすると大反響でした。とても楽しい時間でした。

日本食

日本食ではホームステイ先の家族、アスラマの子供たち、施設の方々など、インドネシアに来てからお世話になった方々をお招きして夕食を食べてもらいました。料理は、カレーとバーベキューです。日本食を披露する日、午前中は学生全員で市場に必要なものを買に行きました。学生全員で市場に行くのは初めてだそうです。大体100人分の食事の用意が要するため、とても時間がかかりました。作り終えたときとても疲労感に襲われました。食べに来られた方々はみんな笑顔になってくれました。その時自分が行った行為によって他人が笑顔になってくれてとても嬉しかったです。大成功で終わったと感じました。

印象に残っているエピソード

私が印象に残っているエピソードは、アスラマの子供達との交流です。

私は内気な性格のためほかの学生と比べると子供たちと打ち解けるのが遅く、学生が子供たちと遊んでいたり話しているのを見ているだけの無駄な時間が多かったです。しかし数日過ぎると一部の子供達から名前を呼ばれたり、子供たちのほうから寄り添ってきてくれたりしてくれました。その一部の子供たちと座りながら話していると自然と他の子供たちも寄り添ってきてくれました。

やがてたくさんの子供達から名前を呼ばれ、打ち解けていきました。私はその時にもっと早くに子供達と仲良くなっておけばよかったとインドネシアに来て初めて後悔をしました。私は他の学生に比べ遅く子供たちと打ち解けたため、残りの自由時間はできるだけ子供たちと交流することを心に誓いました。その次の日からは、子供たちと話をしたり、おいかっこをしたりしました。子供たちはとても楽しそうに遊んでいて笑顔が絶えませんでした。そのため自然と私も笑顔になりました。いっぱい遊んだからか、子供たちも心を開いてくれたのか、ずっと一緒に行動してくれる子がいました。また、一日の終わりに手紙を書いて渡してくれました。ホームステイ先に帰りその手紙を読み、翌日に手紙の内容の事を話すととても喜んでくれました。またアスラマの子供たち自身が身に着けているもの、持っているものをプレゼントしてくれてとてもうれしかった出来事もありました。子供たちと積極的に遊ぶようになってから、私は子供たちと別れるのが嫌になり、別れの日が来ないでほしいと思いました。それから数日後についに別れの日が来てしまいました。別れが悲しくて泣いている子供たちが多くいました。また必死に涙をこらえる子、笑顔で手を振り挨拶してくれる子、2週間ほどしか一緒に遊んでいないのに親切にかかわってくれたこと、温かく出迎えてくれたことが本当にうれしかったです。

これが、IWC32回のプログラムで一番印象に残っているエピソードです。しかし子供達との交流で悔しさがありました。それは言葉の壁が大きく子供たちとスムーズに会話が出来なかったこと、思っていることをしっかり伝えることが出来なかったことです。何となくでは通じている感じ

だったが、たまに戸惑っているときもあったためそれがなければもっと仲良くなれたと思っています。これは、アスラマの子供だけでなく、インドネシア学生にも感じていたことであり唯一の悔しさです。自分の英語能力の低さにより招いてしまったことなのでとても悔しくとても心残りになりました。

感じたこと・思ったこと

事前研修で、色々と学んだうえで私が予想していたアスラマの子供たちの生活、現地で見えたアスラマの子供たちとの生活の差に大きく驚きました。毎日観察していると子供たちはぼろぼろの服を着たり同じ服を着まわしたり靴やサンダルがぼろぼろになっているのに使っていたり、履いていない子もいました。またタオルはみんなですうため1人が使うと2人目からは濡れている状態を使わないといけない状態でした。そのためシャワーを浴びた後濡れたままの感じが出てくる子供達もいました。

その時に、私たちとの生活の貧富の差をものすごく感じました。しかしアスラマの子供たちは今の生活に満足している子が多くいました。私たちは毎日違う服を着ることができ、ぼろぼろにならなくても買い替えることができます。またタオルもたくさんあり、使いまわさなくても大丈夫な状態で何一つ不便がない状態です。しかしアスラマの子供たちはそれができる状態ではないのです。

私たちが感じたことは、今まで日本で当たり前のように送ってきた生活はアスラマの子供たちからするととても裕福なことであること。私が21年間を生きてきて当たり前だと思っていたことが当たり前ではなくなった日になりました。

今まで私がとても恵まれた環境で育ったと実感しました。当たり前が当たり前ではなくなる、普段の生活ができることを当たり前とは思わずに、日々感謝しなければならぬと思いました。

まとめ

私にとってIWC32回で過ごした20日間は貴重な経験・体験ができ、多くの事を学ぶことが出来

ました。

IWC32回は人数が少なかった分これまでになかった活動などが出来たため楽しく良い経験ができました。大学生活で1番の大きな経験であり、貴重な体験ができた実感しています。私は、団体行動が苦手な内気な性格であるため、他人に任せきりだったけど、事前研修など多くの場で自分の意見を発言しないといけない場面が多くあり、IWC32回に参加する前に比べると積極的になったと思います。自分なりにIWC32回をしっかりと振り返り、経験したことを忘れず、これからの生きる糧にしていきたい。

自分には何が出来るかを考え行動をする。

日本には『百聞は一見にしかず』『ちりも積もれば山となる』などのことわざがあるが、今回のIWC32回を経験してその通りだと思った。

私は、先輩の話や事前研修で教わったことはある程度理解していたつもりで現地に向かいました。しかし現地に着くと、それを覆されるような出来事が多く起きました。

また今回参加した日本人学生10名とインドネシア学生6名の計16名と引率してくれた方々誰か1人でも欠けていたら上手くいかなかったと思いました。ワーク時、1人では小さな力でもその小さな力がたくさん集まれば大きなものになると感じさせられました。

事前研修、現地でのプログラムを終わらせ、自分自身の長所短所を改めて実感し、気付かなかった事にも気付きました。また自分の英語能力の低さに気づき、今後自分が何をしないとイケないのかがわかりました。

毎日違う体験ができ、異文化に触れることにより物事の見方や考え方が変わり、自分自身この体験を通して、多くの面で成長できたと思っています。インドネシアで過ごした20日間で学んだ「一人で生きているのではなく誰かに支えられながら生きている」ことを忘れず、感謝してこれからは生活して行きたいと思いました。

私が過ごした22日間

経営学部 3年次生 三井 隆司



私は中学校と高校時代は部活に一生懸命に取り組んできて充実感のある生活を送ってきた、しかし大学生になっては授業に出てバイトに行き適当にサークルもやって、なんとなく単位を取ればいだろう、そんな感じの生活を送っていた。そんな生活から抜け出さたくてなにか在学中に、大きなことをしてやろう！と思いそこで見つけたのがこのIWCワークキャンプだ。正直2年次に参加しようと思っていたのだが、機会を逃してしまい今年がラストチャンスだと思ったので人1倍やる気はあった。

テーマは「一歩踏み出す勇気」まさに自分にぴったりだと思った。当時の自分は何か新しいことに対して興味が湧かなかったり、恐怖を感じ前に進まなかったりなど色々停滞している自分がいた。

事前プログラムの時初めて参加するメンバーを見た時、正直言って喋れそうな子がいない…と思った。その気持ちのまま色々と5ヶ月ほど長いようで短いプログラムを通し、プライベートでも遊ぶような仲になり、だんだんメンバーに対する気持ちも変わっていきこのメンバーで絶対にキャンプを成功させて無事に帰る！という気持ちが少しずつ芽生えてきた。

8月20日に関空を出発し、飛行機で7時間ほどかけてデンパサール空港に。初の海外とだけあっ

て入国審査その他諸々でかなり緊張した。

日本を初めて出たので少し寂しい気持ちと、不安で押しつぶされそうだったがデンパサールに着いてからはそんな感情はすぐに消えた。現地では尋常ではない数のバイクの量、2人乗りは当たり前、赤ちゃんを抱えながらの4人乗りなんてのも普通にいて、交通ルールなんてきちんとした定められたものはないんじゃないか？と思った。そこからホテルに着いて一息。夕食時に初めてインドネシア学生と初対面 私もかなり緊張していたが人数的には日本学生の方が多いためインドネシア学生もかなり緊張していた印象だったのを今でも覚えている。夜自分の頭の中を整理し、明日に向けてどうしようかと夜中ずっと考えていた。

次の日ホテルをチェックアウトしてから引率者を含め、プリンピンサリ村へ出発。4時間ほどかけて村に着くとすぐにアスラマの子供達が私たちの元へ駆け寄ってきた。日本にいて普段子供達と触れ合う機会はほとんどなかったので最初に子供達が歓迎してくれたのは本当に嬉しかったし、緊張もほぐれた。事前学習で子供達の背景には様々な暗い過去がある、ギャンブル中毒の両親・親が亡くなって1人になった子供・親からの虐待・貧しい家庭に生まれた子供達 というのは学習していたので、どのように接したらいいかわからなかった。だが子供達の笑顔を見ていると不思議なことに、そのような事は気にせずに触れ合うことができた。

その次にホームステイ先の家に向かった。僕と池田君のホームステイ先の家が向かい合わせだったのが唯一の救いだ。ただでさえインドネシア学生との交流が十分に無いまま部屋分けが発表された。僕と同じ部屋のインドネシア学生はアディティアという一つ年下の20歳の男の子だった。最初はお互いに気を遣い合っていて、自分はインドネシア語はもちろん、英語もまともに喋る事はできないが中学と高校で習った英語を必死に引っ張り出して会話をした。アディティアもなんとなく理解してくれたのか、うなづいてくれて少しだけ

この先やっていけそうかな？と思えることができた。

次にホームステイ先の家族とのコミュニケーションだが自分は正直最初から最後まで満足に会話ができなかった、それは今でも少し後悔している。アディティアは家の人と会話していて、自分も積極的に話に入ろうと頑張った。パパも気を遣って色々と話してくれて内容はほとんどわからないがアディが簡単な英語に訳してくれたのでなんとなく理解することができた。そして日本から持ってきたお土産を家族に渡してその日は、就寝した。

次の日は入村式。村の人や、警察、偉いさんのスピーチで始まり、富士隊長からの挨拶、その時改めて実感することができた。私たちはこの村で一週間と数日過ごすのだと… 様々な不安やメンバー間での揉め事、ワーク作業、子供達とのふれあいがこれから起きるであろうと頭の中に浮かんできたが全て乗り越えていかなければいけない、これからしっかりと頑張らなくてはいけないと思うことができた。そして昼からはいよいよ、ボランティアワーク開始。

昼食を食べて、早速作業開始。ワーク隊長池田くんの指示のもと皆が動き出した。ワーク作業の主な内容は畑に種を植え・添え木をあてる・レンガ運び・石運びなどである。私は一応スポーツしていたので体を動かすといった仕事に対しても特別嫌悪感を抱いているわけではなく、体を動かして汗を流すことが好きなので、ワーク作業は苦ではなかった。むしろ楽しかったし、体も鍛えられて、インドネシア学生ともコミュニケーションが取れる場、また日本人メンバーともさらに交流が深められると思い一生懸命取り組んだ。しかし中には途中で体調を崩すメンバーなどもいて、自分も後日腹をこわすのだが、その度にメンバーが気を遣ってくれて少しずつ休憩をとりながら、効率よく仕事に打ち込むことができた。一人一人が互いに意識しあい、考えると、自然に周りからも声が飛び交いスーマンガ（頑張れ）とインドネシア

学生が喝を入れチーム全体のムードも良くなりその日のワーク作業は無事に終わった。

そしてそこからアスラマの簡単な施設紹介。アスラマがどのような場所なのか日本での事前学習時にもある程度しか聞いていなかったが、おおまかに説明してくれた。そして施設を歩き回っていると、部屋から子供たちがたくさん出てきて、手を握ってきたりハグを求めてきたので、僕らも快くそれに応じた。そして夕食を食べ、その後はミーティング。1日の振り返りシートを書いて、ホームステイ先に戻り1日が終わる。この生活を村にいる間毎日していた。

私が一番インドネシアへ来て困った事はトイレと風呂であり、日本では考えられないような体験ができた。トイレはホームステイ先の家によるが私の家はトイレトペーパーは無く水洗トイレでないため、最初の方はかなり苦労したのを覚えている。トイレトペーパーが無いため左手で拭いて、シャワーで流すという潔癖の私にとっては地獄であった。そして排泄物を流すため井戸から水を汲んで勢いよく便器に向かって流すため、用をたすのにかなり苦労した。マンディ（風呂）ではお湯は出ず水しか出ない仕様になっており、水風呂自体にそこまで抵抗はなかったが、朝マンディする時とかはかなり寒くて震えていたのを覚えている。

日本にいる時から事前学習で交流プログラム・日本語プログラム・日本食プログラムの3つに力を入れていて、全員で協力しながら作業を進め、インドネシアに来て本番になっても力を発揮することができた。交流プログラムでは、錯覚ダンスを踊り世界に一つだけの花を歌った。錯覚ダンスは日本にいる時にもかなり苦労した。インドネシアに来てからもメンバー間での意見の食い違いにより揉め事があり、一時はどうなるかと思ったが、全員がそばに集まって、話を聞く事で解決することができ、歌も全員が何回も練習する事で2つとも本番で成功することができた。子供たちや、村

の人の前で披露するのは少し恥ずかしかったが一生懸命やる事で終わった後は達成感と笑顔に満ち溢れていてとても充実した時間を過ごすことができた。

日本語プログラムでは、わたしが担当者だったので日本語班だけあって責任感を持って取り組み、事前学習時から前川さんと板倉さんとコンタクトを取り合いながら紙芝居を作ったり、カルタを作ったりと万全の態勢でインドネシアに臨んだ。しかし正直なところ他の日本語班メンバーに任せっきりなところもあったので、申し訳なく謝った。授業は小学校と中学校と2日に分けて行った。子供に日本語を教えるのは簡単な事ではなく、日本で考えてたように上手いいかないこともたくさんあったがその度に、インドネシア学生からのフォローがあり、あいうえお表・動物神経衰弱・動物バスケットと、危なっかしい部分も少しだけあったが大きなトラブルなく2日とも終わることができて本当に良かった。日本にいて子供達に日本語を教えるという立場に立つ事はなく、私たちも子供達から教わる事はたくさんあり、皆真剣になって聞いてくれた時は「今までやって来た甲斐があった！喜んでくれてよかった。」と心から思えた。

最後は日本食プログラム（日本食）である。

カレーとパーベキューを作った。日々お世話になっていたホームステイ先の家族の人と子供達を招いて感謝の気持ちを込めて作った。この時にもメンバー間での揉め事があり、私は中で野菜を切っていて知らないところで喧嘩が起きた。その時に大西さんが寄り添っていたのですごく思いやりのある子だなと思った。料理が出来上がりみんなと一緒に食べている時に私のホームステイ先の家族が来てくれた時は本当に嬉しかった。一緒に席に座り写真も撮り、今まで満足に会話することがなかったがこの時初めてちゃんとコミュニケーションをとることができた気がした。

毎週日曜に教会で礼拝があり、人々がお祈りを

し、私たちもそれに同行させてもらえた。桃山ではあまり宗教が根付いていないように私は感じる。私自身無宗教で、そこまで関心はなかったが、村の人たちと一緒に祈りする事は非常に良い体験になり、刺激になった。長時間礼拝堂で坐っていると板倉くんが貧血で急に倒れびっくりした。でも後で石井さんに聞いたところによると空腹による貧血とのことで少し安心した。

村での滞在時間がどんどん少なくなり、子供達とホームステイ先の家の人と過ごす時間が少なくなり、だんだん親しみが増し、同時に寂しい気持ちになった。離村式の時子供たちは皆泣いていた。ホームステイ先の家の人に向けてスピーチをしている時、アディに教えてもらったインドネシア語で挨拶をした。僕の下手くそなインドネシア語でもパパとイブは目に涙を浮かべていて、それを見た時僕も涙が出た。絶対に泣かないと決めていたが今までの感情が込み上げてきて感極まり涙が出てしまい、本当にこの村を去りたくない！という気持ちになった。この日はすぐに家に帰り、残りの家族との時間を大切にした。

それからまた日がたち文化探訪へ…。

バリプロテスタント教会の本部に行き、日本人学校や教会と様々な名所を訪れた。インドネシア学生とも共に過ごす時間も少なくなり、マタハリショッピングモールに買い物行き、残り少ない時間を大事に過ごした。そして別れの時、インドネシア学生からの手紙、私たち日本人学生からの手紙を交換しあった。この時は本当に涙が止まらなかった。ずっとお世話になりっぱなしだったインドネシア学生、言葉が通じないのに英語でわかりやすく教えてくれたり、色々な言葉を教えてくれたり、本当に言葉では言い表せないくらいにお世話になった。インドネシア学生とのハグの時は本当に今までの感情が込み上げてきた。ルームメイトのアディには感謝の気持ちでいっぱい。ホームステイ滞在中にしょうもないことで喧嘩をしたことがあり、お互いに気まずい時間が続いたこともあり、アディには特別な思いがあった。そういつ

た出来事を含めて本当に別れたくなかった。

インドネシアでは様々な人と出会い、色々な感情が生まれ、今までとは違った視点で物事を捉えることができるようになった。インドネシアに来るまではこんな感情にはならなかったし、適当に過ごして単位を取得すればいいと思っていたが、終わってみれば人との出会いの素晴らしさ、別れの辛さ。インドネシア、バリ、プリンビンサリ村の人たちの暖かさ、笑顔で接してくれた人達。

全ての人たちとの出会いが私にとって宝物だ。日本人学生の事も大好きになったし、引率の先生方、お世話になった人達、そしてインドネシア学生たち、本当に感謝しても仕切れない。このワークキャンプに参加した事で私の学生生活に影響を与えたと思うし、今後にも役に立たせたいし、この経験は絶対に忘れない。素晴らしい時間をインドネシアで過ごせたと思うし、この経験はずっと私の中で輝き続ける宝物だと思う。

気づき

国際教養学部 3年次生 前川 未侑



まず、インドネシアに降り立って感じたこと。それは、想像していたよりも都会だったということだ。私の中のインドネシアは、道路整備もままならない状態で、なんとなく薄暗いイメージだった。しかし、実際のインドネシアは、道路整備もきちんとされており、スターバックスやマクドナ

ルドといった外資系飲食店が数多く立ち並んでいた。また、道路の交通量の多さといったら笑いが出そうになる。信号待ちしているバイクが、レースの開始前と勘違いしてしまうような状況が想像できるだろうか。車とバイクで道路が渋滞することなんて、日常茶飯事。私は、このプログラムの間で気になった点があった。それは、バイクを運転する人も同乗者も、ヘルメットを装着しているということだ。私は、今年の二月に学内プログラムでカンボジアに行ったのだが、ヘルメットを装着している人を見かけなかった。同じアジア圏であるインドネシアも、そのような文化なのだろうと思っていたが、実際は違っていた。今の世の中、現地に行かなくても情報なんてスマートフォンで検索すれば、すぐに出てくる。しかし、実際に自分の目で見るのとは全く違っていた。百聞は一見に如かずということわざがあるが、まさにその通りだ。

プリンビンサリ村に到着してからは、各々アスラマの子供たちにホームステイ先まで案内してもらった。どのような家庭なのか聞かされるのがなかったため、手土産をいつのタイミングで渡そうか、初めは、やはり覚えたインドネシア語を使うべきか、今の時間のあいさつはSelamat siang? それともSelamat sore?といったことで頭の中でいっぱいだったのが、昨日のこのように懐かしい。結局のところHello.と出迎えられ、インドネシア語を使う余地はなく、つたない英語で手土産を渡した。これから2週間お世話になるのに、こんな状態で大丈夫なのかという思いしかなかった。唯一の救いは、同じホームステイ先にインドネシア学生がいたということだ。彼女には本当にお世話になったし、こんなにも居心地の良いルームメイトがいていいのだろうかという程、お互いが素を出せる関係だったと思う。ホームステイ先でまず驚いたことは、お風呂だ。それは、初日の出来事だった。アスラマで一日の振り返りを済ませ、お風呂に入ろうとした21時頃。日本にいるころと何ら変わりなくシャワーを出した瞬間、驚きのあまりシャワーを止めてしまった。その理由は、

シャワーノズルから出てきたのは、お湯でもなく、はたまたぬるま湯でもなく、紛れもなく水だったからだ。日本での事前研修で、そのようなことは聞いていたが、大げさに言っているもんだとばかり思っていた。ぬるま湯くらい出るだろうと思っていた私の儂い想いは、一日目にして幕を閉じた。

アスラマに向かう前、私はどのような表情で子供たちと接するべきなのかということばかり考えていた。私自身、今まで施設に足を運ぶという体験がなかったため、どのような雰囲気なのか全く予想ができなかった。しかし、私の心配はすぐに消えた。なぜなら、アスラマの子供たちが私たちを笑顔で出迎えてくれたからだ。先ほどまでの悩み事が嘘のように、いつの間にか私も笑顔で子供たちと接していた。子供たちとの時間は本当にかけがえのないもので、お互い知っている単語を並べての会話であったが、少し分かり合えたような気がした。このときは、目の前にある笑顔の奥にあるものなんて、考えもしていなかった。本当の意味で子供たちを分かってあげられたのは、エヴァリエーションで子供たちにインタビューをしたときだと思う。私は、この日を一生忘れることができないうだろう。これほどまでに自分の中に衝撃が走った出来事は、後にも先にもこれが最後なのではないだろうかと思えるような一日だった。そして、言語の壁をさらに痛感させられた。エヴァリエーションでは、施設が掲げる目標が本当に実現しているのかということ自分たちの意見と、それとは別に施設のスタッフ、中学生、小学生にインタビューをして問題点を考えるという形式だった。私は中学生を担当していたのだが、彼らの口から出た言葉は、いつもの笑顔からは想像できないほどに辛く、信じたくないようなことばかりだった。施設で暮らし始めて10年になる子供や、親に捨てられ親戚にも引き取ってもらえず、ここに来た子供。一人一人、ここに来た理由は違うけれど、私には到底想像できないような過去を彼らは抱えていたのだと思知らされた。インドネシア語が分からない私たちは、インドネシア学生が子供たちの回答を英語に訳してくれるまでは、な

にを言っているか分からなかったのだから、それが本当に辛かった。インドネシア学生は、子供たちが話している最中も慰めていたり、コメントをしたりしていたのだが、私は子供の側でただ話を聞くことしかできなかつた。子供たちに、私はどう映っていたのだろうか。このプログラムに参加するまでは、英語が少しでもできればいいだろうとか、ジェスチャーでなんとか通じるだろうとか、そんな風に考えていた。たしかに、不自由だったかと言えそうだが、それでなんとかやり過ごしていた。しかし、この日初めて私は、言葉を理解したい、自分の言葉で声をかけてあげたいと思った。どこか生温い気持ちだった私を変えてくれた、そんな一日になった。

日本語プログラムは、私が思うに成功だった。日本での事前準備は、本当に手探り状態で、どのような環境なのかも分からない中でプログラムを考えないといけない状況には、大変苦労した。毎年しているプログラムがいいのか、それとも丸つきり変えてしまう方がいいのか、そもそもどの程度の日本語ができるのか、全くできないのか。挙げだしたらキリがないくらい、疑問が私の中で浮かんで消えを繰り返した。日本語教員資格過程を履修中である私だが、実際に教えた経験は一度もなかった。私はそれを経験したくて、このプログラムに参加したわけだが、模索していけばいくほど、なにをするのが正解なのか分からなくなった。結局、今年のテーマは動物にし、昨年までとは違い、プログラムに一貫性を持たせるために、動物を使うゲームを多く取り入れた。教えに行くまでは、少し簡単すぎただろうか、このスケジュールで時間は余ってしまわないだろうかと考えていた。しかし、子供たちははるごく楽しんで授業に参加してくれ、ほぼタイムスケジュール通りにプログラムを終えることができた。このプログラムが成功したのは、各々がなにをすべきが把握し、臨機応変に対応してくれたからだと思う。そしてなりより、インドネシア学生には感謝しかない。授業をしに行く前日に、インドネシア学生と日本語プログラムを準備する時間が設けられていた。私

は、タイムスケジュールとゲームの簡単なルール説明、そして紙芝居を翻訳してもらっただけだろうと考えていた。それほど時間がかからないものだと思っていたが、そうではなかった。まず、神経衰弱や伝言ゲーム、フルーツバスケットといったゲームがインドネシアには存在しないようで、ルールを理解してもらうのに時間がかかった。ルールを理解してもらってから、実際にゲームをやってみたのだが、通じてないことも多く、改めて人に物を伝える難しさを思い知った。そして、一番苦労したのは、紙芝居の翻訳作業だった。そもそも簡単な英語しか話せない私たちにとって、日本語で書いてある文章を英語に直すことは難点の一つだった。頭の中の数少ない英単語とジェスチャーでなんとか理解してもらい、5分程度の紙芝居をインドネシア語に翻訳してもらうまで30分あまりの時間を要した。出来上がった時の達成感、今でも忘れることができない。時間をかけてプログラムのために取り組んだことで、本番はスムーズに進めることができ、インドネシア学生が次は何をするのか、ルール説明等を子供たちにしてくれたおかげで子供たちも混乱することなく、授業を終えることができた。

このプログラムを通して、私は改めて出会いの大切さ、また同じ目標に向かってなにかを成し遂げることの素晴らしさに気づかされた。まず、このプログラムに参加しなければ、日本人メンバー9人にも出会えていなかったし、インドネシアで出会った学生や子供、ホームステイ先の家族、このプログラムに携わっている他の人にも出会えていなかった。初めは不安や期待、いろんな感情が胸の中にあっただが、出会った人たち、見たものの全てが本当にかけがえのないもので、忘れることができない、忘れたくない毎日になった。そして、このプログラムに参加していなければ、私は生涯インドネシアにプリンビンサリ村という場所が存在していることも知らなかっただろうし、アスラマという施設があることも知らずに生きていた。一期一会というのは、こういうことを言うのだろうと二十歳にして気づいた、大学三回生の夏

休みとなった。こんなにも毎日毎日が短いと感じたのは初めてで、もっとみんなと一緒にいたい、もっとここで過ごしていたいと思えた。特にアスラマの子供たちには、色々なことを気づかせてもらえた。もっと勉強したいと思えたのも、日本にいるときには感じることはできなかった感情をくれたのも彼らであり、この感情を忘れないように生活を送ることが、自分の将来のためでもあり、出会った人たちのためにもなるのではないだろうか。

海外に行くとき必ず驚きがある。その驚きに大小はあるものの、自分の固定概念を覆してくれ、日本にいると気づくことのできない当たり前の毎日が、当たり前ではないと気づかせてくれる。毎日が発見であり、毎日が出会いだった22日間。他人からすると、たかが22日だと思われるかもしれない。しかし、されど22日だと私は思う。

「初めての海外、初めての経験や発見、そして初めての気持ちinインドネシア」

経営学部 3年次生 池田 翔三郎



私はこのIWC（インドネシアワークキャンプ）に参加して本当に良かったと感じています。なぜなら、普段日本ではすることができない体験ばかりで、視野や知識を広げ深めることができたと思うからです。

しかし、最初からそうしたいと思っていただけ

ではなく、志望動機はもっと別のものでした。私が最初このプログラムを見つけた時、「海外かー、行ったことないから行きたいなー」という軽い気持ちぐらいでしか思っていませんでした。それで友達二人（富士君と三井君）と一緒に応募しました。選考会の面接のときの「志望動機は」と聞かれたとき正直なんと答えるか困って「海外で自分を変えたいです」と言ったのをよく覚えています。そして、面接が終わり、無事に合格をしたときにうれしさもありましたがそれ以上に不安のほうが大きかったです。なぜなら、一回も外国に行ったことがなく外国というものがどんなものかよくわからない私にすれば未知の世界だったからです。

そんな不安を抱えながら、第一回目の事前研修を行ったときに一緒にインドネシアへ行くメンバーに出会いました。名前も顔もまったく知らない中、自己紹介をしたときはめっちゃくちゃ緊張しました。たぶんみんなも同じ気持ちだったのか全体的にすごく重たい雰囲気だったのをよく覚えています。これまでにボランティアに参加したことがある前川さんや海外経験が豊富な大西さんなど私のような海外経験がないという人があまりいなかったのやっぴいけるのかなとさらに不安になりました。

そこから毎週金曜日の事前研修が始まり、インドネシア語やインドネシアという国がどういうものかインドネシアの宗教についてなど行くにあたっての知識を学びました。

事前学習が進んでいくうちに軽く考えていた気持ちが本当に心の底からインドネシアに行きたいと思えるようになってきました。アスラマのこと、子どもたちのことこれまでのIWCがどういうものだったのかを学んで行くにつれ、「このボランティア活動に参加することで大学生活の中で証をのこすことができ、日本以外の国を自分の肌で直に触れることで自分自身を変えることができる」というふうに強く思いました。

そこからは、インドネシアに行くことがすごく楽しみで役職を決めるときも副隊長&ワーク隊長に立候補しました。これは、やらされたのではなく自分の意志でやりたいと思いました。メンバー

をまとめることができるか、自分にそれほどの能力があるかとても不安でしたが隊長の富士さんと協力してなんとか頼りない副隊長だと思えますが務まっていたかなと思います。

インドネシアに行く前日の夜、緊張して全然寝れなかったことを今では昨日のように思います。飛行機にもそれほど乗った経験がなく、乗ったことがあっても日本国内だけだったので約8時間というフライトはどんなものかわくわくしていました。飛行機に乗り込み「あー、これから海外に行くんだなあ」と初めての気持ちになりました。どんどん日本の景色がなくなっていく感じが私は好きでした。

目的地であるインドネシアについたときの光景を今でも強く覚えています。すごく外国っぽい建物、いっぱいバイク、違う人種の人々、日本と全く違う光景にとっても驚きました。ホテルに着くまでのバスの中でもずっと興奮していました。

ホテルに着いたときに初めて食べたインドネシア料理はとてもおいしかった。もっと辛いものだと思っていたが、そんなに辛くなくとても食べやすかったです。そこでインドネシア学生と初めて喋りました。日本に住んでいて英語をしゃべることがあまりなかったため、コミュニケーションを取ることが難しかったです。それでも「なにかしなくちゃ」と考え、ヘタクソな英語でコミュニケーションをとっていました。その結果空回りしていた部分も多くあったと思う。うまくできていた気もしますが、ちょっと恥ずかしいって思い、正直これからやっぴいけるのかとても不安になりました。それよりもホテルで一番驚いたことはシャワーの水が温水ではなく冷たい水だったことです。事前学習で学んでいたことでしたが実際に体験すると想像以上にしんどく感じ、一瞬でインドネシアの現実をたたきつけられました。

そんな不安を抱えながら、日本領事館訪問、そして今回のボランティアワークを行う場所であり、私達がホームステイする場所であるプリンピナリ村に向かいました。行きのバスの中でも何を話したらいいのかわからず気まずい雰囲気でした。

日本領事館へ行った時、警備の人や領事館に来る人達を見て日本という私達が住んでいた国を外国で見ることにより改めて何かを感じることができました。領事館で飲んだお茶は久々に飲む日本茶だったので少し感動しました。

プリンビンサリ村は私達が泊まっていたホテルや街と比べると、とても緑が多く自然豊かな場所でした。最初はとても田舎でありきれいな場所じゃないのだろうと思っていましたが、そんなことはなく空気もおいしくとてもきれいな村でした。

アスラマの子どもたちはとても人懐っこく私達を温かく笑顔で迎え入れてくれました。本当にグイグイくるのでちょっと驚きました。人見知りというものがまったくなく最初からフランクな感じだったのですぐに打ち解けることができました。プリンビンサリ村の人はみんな優しく驚きました。特に驚いたのは挨拶すると絶対に笑顔で返してくれ誰一人嫌な顔をしないことです。本当に良いところだなと感じました。

ホームステイ先の人も最初はどんな人とこれから一緒に過ごすのかととても不安でしたが、初めて会ったにもかかわらず本当に優しく迎え入れてくれて本当に嬉しかったです。ホームステイで一緒になったインドネシア学生もその日のうちに仲良くなることができ、ホームステイ先の家族とインドネシア学生と夜と一緒に歌を歌い、しゃべったあの時間は今でも宝物のように楽しかった時間です。

次の日は入村式があり、子どもたちがインドネシアの伝統音楽を披露してくれました。違う国の音楽を生で聞く体験などあまりないため少し文化を知ることができました。また、沢山の人が来られていたため改めてこのプログラムには多くの人が携わっているのだと再確認することができ、頑張ろうと思えました。

現地のコーディネーターであり、これから様々なことでお世話になるスィクラマさんがこのアスラマに住む子どもたちのことを私達に話してくれた時、事前学習でこの村のことやこの施設のことを学習はしていたが、実際に見て、触れて、聞いて

て、よりリアルに知ることができました。家庭崩壊や身寄りのない子どもたちの話を聞いていると自分は経験したことがなく、周りにもいないので子どもたちの純粋な笑顔を見てるととてもやるせない気持ちになりました。子どもたちとおもいきり楽しんでその笑顔を絶やさないようにしようと思いました。

この日からボランティアワークが開始され、ワーク隊長としての初仕事でした。自分が思っていたよりもハードな仕事でとてもやりがいのある仕事だったと自分も含め参加メンバー全員が口を揃えて言っていました。ワーク中は誰一人弱音を吐かずに仕事をしていました。私はワーク隊長としてみんなの仕事のペースや体力、日照などを考え時間の配分を組みました。そして私が一番大事だと思っていたことは「率先して動いて、見せる」ということです。こんな私に文句の一つも言わず、ついてきてくれたメンバー全員には本当に感謝しています。ともしんどかったが、山盛りの石がなくなる瞬間、畑が出来上がった瞬間のあの一体感と達成感は言葉では言い表せないほど嬉しかったです。何より嬉しかったのは塀を作り上げ、記念碑に文字を刻む瞬間でした。これまでのボランティアワークの集大成でもあり、このIWCの証でもあるので自然と涙がこぼれそうなほど感慨深かったです。ワーク隊長としてうまくいかない時や、苦勞、苦悩もあったがやりきった感でいっぱいでした。

ワークの休日としての日曜礼拝は普段絶対に経験することのないものなのでとても貴重な体験でした。同じバリプロテスタント教会に属する教会ですが、一週目の日曜に行った教会と二週目に行った教会では全く雰囲気の違い、現地の生活を知ることができたと感じました。その他にもプリンビンサリ村の近辺散策では水源のダムであるブンドゥガンパラサリを見て大自然を感じることもできました。一番楽しかったのは車の荷台に乗って移動するという体験です。直に風を感じることができ、日本では絶対に体験できないことだったのでとても興奮しました。

また、日本語授業では小学校の時はインドネシ

ア学生に頼りっぱなしで正直何もできなくて悔しかったが、中学校ではその反省点を活かし、積極的に話しかけていき、子どもたちとしっかりコミュニケーションをとることができました。余った時間も交流会で紹介した日本の国技の相撲を子どもたちととったりし、時間を有効に活用することができ、子どもたちと一緒に楽しむことができました。この日本語授業で人に教えること、言語が違う中で伝えることの難しさを学ぶことができたと感じました。

さらに、日本食パーティーでは全体的にうまくいきましたが、私はBBQの肉を焼く係だったのですがいろいろ問題もありました。子どもたちに配るカレーとBBQの肉が遅くなったり、段取りがうまく組めていなくもめたりもしました。しかし、子どもたちが「エナッ！」と言ってくれて本当に嬉しかった。でも、一皿しか食べれないということでしたが正直もっとお腹一杯に食べてほしかったのが本音でした。

この日本食パーティーの途中にプリンビンサリ村に映画を撮りに来ていた人たちから取材を受けました。質問が「一番印象にのこっていることはなんですか」ということだったのでカメラを前にすると緊張してうまくしゃべることができなかつたです。この瞬間がこのIWCの中で一番緊張した瞬間かもしれないです。終わりの挨拶も担当させていただきホストファミリーの人、子どもたち、アスラマのスタッフの人全員が笑顔だったことが印象的で成功してよかったと心から思いました。

次の日からは、エヴァリュエーションの原稿作成、練習が始まりアスラマのスタッフ、中学生、小学生の三グループに別れインタビューを行い、私はスタッフを担当しました。

スタッフの人の本音という部分は聞けなかったのですが、修復が必要なところや見直すべき点などよりリアルに施設の現状を知ることができました。原稿を作成する際にインタビューした内容を英語で言ってもらい日本語に訳すということが難しかったです。きっと最初の頃ならできていなかったでしょうがずっと英語で話していたからか

意外にスラスラとできました。

プリンビンサリの最後の夜には離村式が行われ、今までのすべての出来事、例えば一緒に歌ったこと、優しい笑顔で本当の家族のように接してくれたことすべてのことがフラッシュバックされ、ホームステイ先の人が「もう家族だよ」と言ってくれてその言葉が本当に嬉しくて色んな思いがこみ上げてきました。

アスラマの子どもたちとの「バーイ！」もいつも言っていた言葉だったが明日から会えなくなると思うと言いたくなくなるほど寂しくて悲しかったです。

すべての子供達が本当にいい子でその笑顔を見たら自然とこっちも笑顔になっているそんな素敵な子どもたちでした。本当にありがとう。

このIWCの経験は新しい発見と体験の毎日で溢れていました。この経験を通じて、今後の人生では、これから私達は日本でできることは何があるのだろうと考え、全てのことに感謝をしなければならぬと考えました。今送っている生活を当たり前と思わず、親と一緒に暮らせていること、ご飯が美味しくお腹いっぱい食べられること、飲水が豊富にあること、不自由なく暮らせていることそのどれをとってもインドネシアでは当たり前ではないことだから、日々感謝を忘れないことが私にできることだと思いました。また可能であればアスラマの子どもたちが立派に大人になるまで見届けたいと考えています。

Terima kasih

経営学部 3年次生 富士 拓真



この国際ワークキャンプに参加した動機は大学生活の中でなにか周りの人があまりやっていない事を自分はやろうと思い、軽い気持ちで応募しました。私は第三十二回国際ワークキャンプに参加して本当に良かったと思っています。

国際ワークキャンプに参加した事で一回りも二回りも成長できたと思います。

<行く前の自分自身の気持ちと帰国後の感想>

私は海外経験が一度もなかった為、治安が悪そうなイメージがある東南アジアに行くため、日本を出るという事が不安でした。しかし、インドネシアについて学び、各プログラムについて様々な意見を出し合い検討し、研修を行っていく内にその不安はあまり気にならなくなり、とにかく全てのプログラムを成功させたいという気持ちが強くなりました。「失敗してもいい、失敗するのも勉強」という先生達に言われた言葉、私はその言葉が嫌いでした。しかし、池田副隊長と二人で話し、事務の朝倉さんとメールのやり取りをし、始めは何がどうなれば成功なのか、何をしてしまえば失敗になるのかと考えていたのですが、失敗などはなく、子供達が喜んでくれれば全ては成功であるという考えに至り、出発直前は早く行きたいという気持ちでいっぱいでした。

帰国後、インドネシアとは違う日本の風景に懐かしさを感じました。私は日本に帰国し、家に着

いた瞬間に倦怠感に襲われました。何もする気にならず、ひたすら思い出に浸っていました。このワークキャンプで学んだ事は何か、ダメだった部分は何か、帰国日の次の日にひたすら考えていました。今考えてみるとこの18日間は長いようで本当に短く、1日24時間では時間が足りないと思うくらい早く感じました。子供達は全てのプログラムで笑顔いっぱいでもとても喜んでくれたのでやってよかったと心から思いました。そして、インドネシアメンバーからの手紙、日本メンバーからの手紙を家に着いて落ち着いてから読み、みんながどう思っていたのか、私がどういう風に見えていたのかを知る事が出来ました。

<プログラムの感想>

・交流会

事前研修から一生懸命ダンスや歌の練習をしていて、あまり覚えられないメンバーもいたが練習を繰り返し、しっかりと覚え、本番で披露すると子供達が喜んでくれ、会場全体がとても盛り上がった事が私はとても嬉しかった。また、高校生時代に相撲部に所属していたので相撲という国技を紹介するように宮チャブに頼まれ、まわしを巻いて村の人たちや子供達と相撲を取り、紹介しました。子供達は笑ってくれ、村の人たちは盛り上がってくれたので良かったです。高校生時代は何の為に相撲をやっていたのか全く分からず、だからとやっていたので今回この国際ワークキャンプで披露する機会があり、高校生時代にやっていた部活動は無駄ではなかったのかなと思いました。

・日本語プログラム

日本語プログラムは日本語プログラムの隊長が事前研修からコツコツと頑張って準備をしていたので、その準備の成果というか、その準備のおかげでハプニングもなく、全て順調に進み、成功しました。日本語プログラムの班長としての責任感やプレッシャーはすごかったと思います。授業の中で私は動物を使ったあいうえお表を教える担当だったのですが、話し方一つで笑いが取れたり、わかりやすくなる事が分かり、教師という職業

の方の凄さと難しさを感じました。難しいけれどとても楽しいなと思いました。子供達が楽しみながらしっかりと日本語を覚えてくれていたので良かったです。

・日本食プログラム

私が日本食プログラムの隊長だったので事前研修時に材料や美味しくなるワンポイントなどを調べまとめ、とにかく美味しいと喜んでくれる子供達を想像しながら頑張りました。日本食プログラムの担当メンバーは僕ともう一人の二人なので色々悩んだ点はありましたけど全部うまくいって良かったです。子供達が遠慮しておかわりをしなかった事が私はかなりショックでした。お肉を食べすぎるとお腹を壊してしまうので仕方がない事なのですが、もっとたくさん食べてほしかったというのが素直な感想です。ですが、子供達が笑顔でおいしいと食べている姿を見て、母親はこういう気持ちなんだなと思いましたし、とても嬉しかったです。食べる姿を見ていて私自身笑顔になりました。

・ボランティアワーク

ボランティアワークでは副隊長がワーク隊長を務めていました。ワーク隊長としての素質やリーダーシップ力に関してこの人の右に出る者にはいないと思うくらい凄く感じました。ブロック運び、砂運び、砂利運び、一つ一つの作業が積み重なり大きな壁を完成させました。塀が完成した時の達成感本当に気持ちよかったです。塀作りの他に農作業も行いました。子供達のご飯の材料になる野菜などを育てる為にシートを引き、穴をあけ、種を植え、肥料をかぶせる。日本では全て機械で行う事を体を使い行ったので日本の機械の便利さを実感しました。ボランティアワークは子供達の為に何か力になれるという事が良かったのと体を動かして働くという事が気持ち良かったです。

<エヴァリエーション>

エヴァリエーションを行う為に私たちは小学生、中学生、調理スタッフの3グループに分かれてインタビューを行いました。私は中学生グルー

プでした。アスラマの子供達の背景というか、生い立ちなどを知り、現実を見ました。アスラマの子供たちには様々な過去がありました。しかし、親のようにはならない。自分は親のようにはしないという向上心が子供達にはあり、仕事で成功したいという気持ちが強いと感じました。アスラマの子供達のほとんどが辛い事情がありながら、あんなにいい笑顔をする。アスラマの問題全てを解決するのは不可能ですが、アスラマの子供達への情かもしれませんが、私はあの子達の為に少しでも良い環境にしてあげたいとエヴァリエーションに取り組みました。子供達は私が暗い顔をしていると笑顔で話しかけてくれ、元気を出させてくれました。本当に優しい心を持っているが、心の闇は本当に厳しいものがあると感じました。涙を流している子も多く私たちがどんなに恵まれた環境に育ったかを実感しました。子供達の事を考えると心はしんどかったです。アスラマの子供は本当に強いと思いました。私自身心が弱いので、子供達を見習っていかないといけないなと思いました。

<アスラマ施設で出会った一人の少年>

私はバユという少年に出会いました。彼は15歳でなかなかのイケメン。彼はシャイで可愛い男の子でした。初めて彼と話したのは私が休憩時間に一人で施設に残り、子供達とバレーボールをしていた時でした。お互いに自己紹介をし、同じチームの仲間として戦いました。彼がミスをした時に僕は優しく声をかけたのにも関わらず、僕がミスをした時に彼は爆笑し、煽ってきました。そこから煽り合いが始まり、一気に距離が縮まり、すぐに打ち解けました。彼はいつも僕を見かけると「たく」と声をかけてくれ、たわいもない世間話から恋の話まで色々な話をしましたし、日本語を教えたりインドネシア語を教わったりしました。日本語プログラムでは僕が担当したクラスにバユはいました。彼は僕が先生をしていたので話をあまり聞かず、常に馬鹿にしているように笑っていました。エヴァリエーションの問題提起の為の情報として子供達にインタビューを行った時に

僕はバユにインタビューをしました。通訳アプリを使い、私の想いを伝えると彼は微笑みながらインタビューに答え、それから1通の手紙をくれました。その手紙の一部に「僕はたくが一生の友達になってくれればいいなと思っている。僕を忘れないで。僕はたくを親友として思い出します。」と書かれていました。バユに私は何をしてあげられたのかわからないが、一生の友達になってほしいと言われた事が嬉しかった。彼とは今でも連絡を取っています。バユという少年に出会えた事がこの国際ワークキャンプに参加して良かったなと思った理由の一つでした。

<向こうでの私の生活>

私は朝5時30分に起き、用意をして毎日早めに施設に向かっていました。行く前までは早寝早起きなんて無理だと思っていましたが予想していたよりもはるかに精神的に身体的に疲れるので寝る体制に入るとすぐ眠れていました。向こうは日差しが強く、とにかく暑い。陽の下でいると体力を根こそぎ持っていかれます。日焼けがすごかったです。食事は正直口に合うものと合わないものがありました。僕はバナナが大好きだったので毎日のようにバナナを10本くらい食べていました。インドネシアのバナナはとても美味しいです。毎日お昼休みにホームステイ先に帰るとイブが帰りを待っていており、簡単なインドネシア語を教えてくださいました。夜はホームステイ先の家族に会わない事がほとんどだったので、お昼の時間にコミュニケーションを取れたのは良かったし、何より話していて楽しかったです。とても優しいお母さんでした。インドネシアで生活している中で一番怖かったのはとにかく犬。私のホームステイ先の夜道は他の場所よりも犬が多く、かなりしつこく吠えながら追いかけてくるのでホストファミリーのパパはあなたが帰ってきているのがわかると言っていました。私は施設に居残り、子供達と話して帰る事が多かったので一人で帰る事がほとんどでした。ある日の事でした、いつも通り帰り道の番犬達の手厚いお出迎えを受けながら帰っているとなぜか私は一匹の犬に足を甘噛みされまし

た。私はその時死を覚悟しました。あまりの衝撃と狂犬病が頭によぎり、パニックになり、今までの人生で一番の全力疾走でホームステイ先に帰り、ルームメイトに噛まれた事を報告し、ルームメイトと二人で私の足を洗いました。その日はあまり寝れず、次の日石井先生に聞くと、唾液が入ってなかったら大丈夫だと言われて安心しましたが、本当に怖かったです。犬には本当に気を付けてください。

<インドネシアの子供達の食事>

子供達の朝ご飯は2回だけですが、お昼や夜の食事は何回も見ました。ご飯にししゃもくらの大きさの魚1匹とちょっとした和え物。全ての食事を見る事はできていないですが、成長期の子供達にとっては少なく、栄養バランスも偏りがありました。アスラム施設の子供の何人かはお飯が足りてないと言っていたとメンバーから聞きました。子供達はおかずをお代わりしてはいけないルールがありました。日本では大人は自分がお腹が空いている場合も自分を後回しにし、子供にどんどん食べ、遠慮するなという感じですが、アスラムの子供達は普段フルーツやお菓子などごく稀にしか食べていないのに、アスラムの調理スタッフの方々は休憩時間にお菓子やフルーツなどをよく食べていました。子供より大人の方がたくさん色々な物を食べている気がしました。子供達のご飯はお米をお代わりして一食3000ルピアくらいと聞いた。日本円で一食30円です。計算するとアスラムの子供達全員で1カ月約19万円。日本人男性一人の1カ月の平均食費は45000円です。物価の違いはありますが、アスラムの子供達全員(60名余)の食費は日本人男性4.2人の食費と同じくらいでした。インドネシアの田舎では栄養素という概念が浸透していないのでとにかく食べる事(お腹を満たす事)が大切であると聞きました。また、空き地のゴミを拾い、綺麗にし、その場所にパパイヤとかのフルーツなどを植えたい願望があるが、スタッフの方々は日々の仕事にかかりつきりなので、人手もお金も足りていない事も知りました。日本とインドネシアの食に対する考え方

の違いやインドネシアの田舎の状況は技術面であまり発展していないと感じました。そして、全体的に労働者が足りていない所は日本の田舎と問題はあまり変わらないと感じました。エヴァリエーションの際に私たちのアピールに対してアスラマの食事の予算を増やすとウィディヤアシ財団の方が答えていたので今後もっと色々な面で改善されていく事を願います。

<隊長 メンバー>

メンバーに背中を押され、自分自身の為に頑張ってみようと思い、私は隊長をやらせてもらいました。隊長というポジションは正直しんどかったし大変でした。その分様々な事をたくさん学ばせていただきました。人前に代表で挨拶するという事自体が高校生以来だったので、大学生活で初めての緊張感と責任感がありました。メンバー同士での揉め事もありました。自分自身の悪い部分が本当によく見えました。代表の挨拶を考えなければならないと日々追われていたので、メンバーより早く施設に行き、挨拶を考え、朝倉さんと話をする毎日でした。「隊長頑張れ」「隊長、みんなを任せた」という色々な人からの激励の言葉、メンバーの「それは隊長が決める事」という言葉が私の中でプレッシャーになっていました。そんな中で悪い方に解釈をしまい変に頑張ってしまう、色々間違えた事が多かったけれど隊長としてこの18日間を過ごせたのはすごくいい経験になりました。インドネシアという土地での生活で慣れないため全員が何かしらのストレスを抱えていたと思います。正直人の嫌な部分をたくさん見ました。一緒に生活する事でこんな嫌な所あるのかと知った事もあったし、こんな良い人だったのかと知る事もありました。私の嫌な部分もメンバーは見たと思います。正直物凄く腹立った事もありました。ですが、毎日全員で同じ時間に同じご飯を食べ、同じことで笑い、同じことで苦しみ、同じことで悲しみ、メンバー全員が家族のように感じました。仲間っていいなと再び実感しました。この国際ワークキャンプに共に参加したメンバーは本当にいい友達になります。いい仲間になります。

アスラマの子供達やインドネシア学生の事も深く心には残っていますが、この国際ワークキャンプに共に参加したメンバーとの思い出が今後一番心に残る物だと私は思います。今回は10人という少ない人数でしたが、私はちょうどいい人数だと思いました。10人1人1人が考え、行動し、何かあれば意見を言い合える。一人欠けていても、一人増えていても違ったと思います。10人全員が体調を崩してしまう事も少なく、無事日本に帰れてよかったです。

「初めての体験」

経営学部 2年次生 辻村 圭弘



私はIWCを通じて8月20日(月)から9月10日(月)までの22日間インドネシアのバリ島に研修に行きました。当初の予定では6日に帰国する予定でしたが台風の影響により関空が閉鎖してしまい4日間延びました。そのため最後の4日間は省かせていただきます。

主な研修の内容としてはバリ島の中にあるプリンピンサリ村という場所にあるアスラマでボランティアワークをするというものです。アスラマとはバリ・プロテスタント教会が管轄するウィディヤアシ財団という組織が運営する児童養護施設のことです。アスラマにいる子供達は両親がいない子や母親しかいない子供、虐待を受けた子や壁や床のタイルがない家に住んでいるなどの貧しい子供たちです。第32回のIWCではプリンピンサリ

村にあるアスラマに隣地との境界を仕切る塀を作ることに農作業を手伝わせていただきました。

まず約7時間の飛行機を終えインドネシアに着いて感じたことは交通量の多さでした。空港を出た途端目の前には沢山の車が停まっておりととても狭い隙間を何も無いかのように通っていく車にとっても驚きました。道路にでると日本に比べてバイクがとて多く3人乗りは当たり前、中には子供2人大人2人の4人乗りなども複数見られました。また当たり前のように反対車線にはみ出して行き前の車を抜いているのを見て、日本ではありえないような光景を初めから見させられとても驚きました。ホテルに着くと想像していた以上に綺麗だなという印象でした。しかし、シャワーの水がお湯になったりならなかったりで水圧もあまり安定しなく日本がいかに恵まれているのかを感じることができました。事前研修でホームステイ先は水だと言われていたのでそれよりはとても設備が整ってはいましたが浴槽が恋しくなりました。ご飯もおいしくて心配していたことがひとつ減ってほっとしました。

ホテルで初めてインドネシアの学生と会いました。インドネシアに行く前は行ってすぐ仲良くなれるように声をかけようと思っていたのにとっても緊張して初めは話しかけることもできずこれから仲良くできるのかなととても心配していました。

翌日の21日(火)、プリンビンサリ村に行きました。バスの中でもインドネシアの学生と話すことはなくどうしようとばかり考えていました。またプリンビンサリ村では現地の人でホームステイということでとても緊張していました。しかし実際に着いてみるととても歓迎してくれて安心しました。私のホームステイ先はおじいちゃんおばあちゃん子供3人の家でした。しかしお父さんもたまに遊びに来たりでたくさんの家族がいました。実際に行ってみると日本とは全く違う感じで玄関という概念はあまりなく靴を脱いでタイルに上がるという感じでした。また壁の上の方に穴が空いていて通気性がよかったり工夫のされた家でした。プリンビンサリ村はキリスト教の村ということでどこの家にも十字架が飾られていたり私の

ホームステイ先では聖画なども飾られていました。床は1面タイル張りでもとても綺麗だなという印象でした。私のホームステイ先の人は英語は通じずインドネシア語だけでしたがインドネシア人の学生が通訳をしてくれてなんとか話せる感じでした。しかし、言葉が通じなくてもジェスチャーや表情などでなんとなく通じることができてとても楽しかったです。シャワーを浴びようとどこかと尋ねるとひとつの部屋にひとつトイレとお風呂場がついていました。しかし、2つの部屋に別れて泊まったのですが片方にはシャワーがあったのですがもう片方の部屋は桶と大きなバケツがあるだけでした。初めは隣の部屋に行きシャワーを借りていました。初めから言われていたようにシャワーの水はとても冷たく初めはとても寒くてあったかいお湯を浴びたいと思っていました。しかし時間が経つにつれて桶でバケツから水をすくい水を浴びるのが当たり前になっていました。なにも思わなくなるほど冷たい水にも慣れ、慣れって凄いなと思いました。トイレも私の家は水洗式でしたが自分で水を汲みトイレに流さなければならぬ家もあり少し不便でした。アスラマの施設に行くとハエがいっぱいいて虫があまり好きではない私からするととても嫌でした。しかし、日が経つにつれ何とも思わなくなっていきました。ハエが服についても気にしなくなりハエがついたご飯でも気にせず食べてしまうほどで、私自身、今考えるととても理解できないなと思います。

実際に向こうで行ったワークの内容としては塀を作るために石やブロックを運んだり、セメントを作るために土や小石を運んだりしました。実際に1から作らせてもらったので毎日少しずつ塀が出来ていく様子が見られてとても達成感がありました。農作業の方では畝に黒いシートを被せたり種を植えたりしました。黒いシートを被せる際に竹を曲げて留め具にしたり知恵を使った方法に関心しました。日本では農作業をしたことが無かったのでとても新鮮で楽しかったです。ワークを通じてみんなで協力して働く楽しさを知ることができました。普段はめんどくさいと思うような作業でも子供たちが手伝いに来てくれたりとても楽し

くワークができました。

結婚式というとても貴重な経験もしました。バリの文化としてその時にその家に住んでいる人はみんな家族というような考え方があり、ホームステイ先の方が結婚式に行くということで一緒に連れていってもらいました。まさか初めての結婚式への出席がインドネシアで知らない人の結婚式になるとは思ってもいませんでした。まず、驚いたのはバリの正装は男の人はパティックと呼ばれる柄シャツのようなものだったことです。私自身そういった服がとても好きなのでとてもいいなと思いました。モールに行った際にも買うことができとてもよかったです。言われていた時間では16時に始まるのでそれまでに行かないといけないと言われていたのですが時間にルーズなのか17時を過ぎたくらいにはじまりました。そういった所ものんびりしていてとてもいいなと思いました。結婚式の内容としては牧師さんが司会進行をし、みんなで歌を歌ったり牧師さんの話があたり指輪を交換したりと意外と変わった点は見つからなかったです。しかし、みんなが話していたり子供が走り回ったり赤ちゃんが泣いていたりと想像以上に自由な感じでした。そこで怒らずにみんなが笑っているような雰囲気がとてもいいなと感じました。日本で結婚式に行ったことがないので違いなどはわかりませんが思いのほか想像通りで大して変わりはないのかなと感じました。お父さんやお母さんの挨拶の際に全く知らない人なのに日本からわざわざ来てくれてありがとうと言われた時はとても驚きました。知らない人にもそういうことを言ってくれていい人だなと思いました。結婚式が終わったあとはみんなでご飯を食べました。アスラマで食べているご飯はさほど辛くなくインドネシアの料理はとてもおいしいと思っていました。しかし、実際のインドネシア料理は全然違うものでした。いつも通り食べてみるととても辛くてびっくりしました。アスラマで食べていた食事は日本人向けに味付けを変えてくれていたんだなとそこで気づくことができました。辛いのが苦手な私からすると無理かなと思いましたが食べてみると辛いけどとてもおいしくて全て食べ尽くして

しまいました。本当に辛くて水をたくさん飲みましたが本当においしかったです。

次にエヴリユエーションを行いました。エヴリユエーションで何をしたかというバリプロテスタント教会に向けて、アスラマにいるスタッフや子供たちにインタビューしたと自分たちの意見をまとめそれについてプレゼンテーションをしました。私は中学生の子供たちを中心にインタビューをしました。実際にインタビューをしているとわかってはいたことですが両親がいなかったりお母さんしかいない子供だったり生々しい話をインドネシア学生を通じて子供達から直接聞き、私はとても恵まれていたんだなと実感しました。落ち込んでいると子供達が慰めてくれたりと、子供達が本当に優しくとてもいい子たちだなと思いました。実際にバリプロテスタント教会にプレゼンテーションをするために日本語とインドネシア語の台本を作りました。うまく共有するために英語で伝え合いました。行く前は英語が苦手だと思っていましたが案外伝えることができ、きちんと共有することができました。本番は緊張しましたがきちんと伝えることができよかったです。

日曜礼拝ではキリスト教について何も知らず聖書を読むだけなのかと思っていました。しかし、実際に行ってみるとみんなで歌を歌ったり思っていたよりも楽しいもので貴重な体験ができたなと思います。教会によってもさまざまな違いがあり壁がなくとても開放的なところがあれば想像していたような建物の中に椅子がたくさんあって前に十字架があるというようなもの、他の宗教と少し混じっていたりその土地の文化を尊重したような教会もあり見ていて楽しかったです。

実際にインドネシアで22日間過ごしてとても濃い時間を過ごすことができました。前までは避けて来た英語ともたくさん触れることができ語学力が上がったと感じました。またインドネシア語にも触れる機会が多く頑張っって覚えようと少しは言えるようになりました。また言葉が通じない時もジェスチャーなどを使って伝えたりとコミュニケーション能力も大きく上がったと思いました。最初は不安だったインドネシア学生との交流も終

わる頃にはとても仲良くなり今でもSNSを通じて話したりするほど仲良くなることができました。また実際にアスラマで生活する子供達と生活し、自分の贅沢さに気づくことができました。前までは嫌いだったことや、ものにも挑戦するようになりました。今後もこの22日間の経験を忘れずにさまざまなことに挑戦して行きたいと思います。個人としてもまたバリに行ってアスラマなどももう一度訪問したいと思います。

小さな子どもが教えてくれたこと

経済学部 1年次生 山本 雄大



僕がIWCを選んだきっかけはなんとなくノリに流されて始めたようなものでした。当時は大学受験で落ちてショックだった頃でもあり、盛り返してやるぞと息込んで参加を申し込んだのが始まりでした。しかし、その頃は特にボランティアやインドネシアに興味があったというよりもとにかく何かしなければという気持ちで始めた気持ちの方が強かったです。

いざ事前学習を終え、渡航日が近くなると段々と現地での生活が不安になってきました。生活の不便さには挑戦するつもりでしたが、数多くの疫病のリスクと身の安全が心配になってきました。もしかしたら死ぬ事もあるではないかと思った事もありましたが、いざ現地に着くと不安はすぐ無くなりました。

プリンピンサリ村

プリンピンサリ村は今まで移動中に見てきたインドネシアの村々と違い、綺麗に整備されていて、穏やかな雰囲気のある村でした。周囲は森林に囲まれていて、奥には綺麗な山々が立ち並んでいました。夜には多くの星が見え、真夏でもオリオン座が見られる所でした。またキリスト教の村らしく教会もいくつか建っていて、アスラマの施設の中にもイエス・キリストの壁絵が描いてあったりもしていて、村の雰囲気が他の所とは全く違うなと感じました。村の中では村民の方々とすれ違うと挨拶されることが多かったです。中には会話に呼ばれたりする事もあったりして非常に人情味に溢れる方々でした。村民だけに限らず犬や小鳥といった動物達も人間に恐れずに近寄ってくる事もよくありました。私達が村の人達から見たら外国人に見えるからかなと思いましたが、チャプレンが話されていましたが、今までのIWCの先輩方々がプリンピンサリ村で積み重ねてきた信頼があるからだと思います。やはり信頼を積み重ねる事が将来に繋がっているのだと身近に感じられました。

プリンピンサリ村はバリ島では珍しいキリスト教の村ですが、ちょうど隣はヒンドゥー教の村と隣接してありました。隣の村でお葬式をやっていた時には深夜に大音量でお経が流れていて、寝るときも音が気になった事を覚えています。日本であれば揉め事になりそうですが、住民はあまり気にしてない様でした。お互いの宗教を尊重し合い、共存するというのはいかような事なのかなと身近に感じられました。また日曜日に行った教会での礼拝の際にも、キリスト教の方に限らずイスラム教の方々も訪れていました。こうやってマイノリティーの宗教であっても、他に対して寛容である事が6~70年経った今でもプリンピンサリ村がキリスト教でありながらも続いたのかなと思いました。

プリンピンサリ村では沢山の交流に恵まれました。ホームステイ先の家族や村民の方々とは村の事について教えてもらったり、お菓子やバナナを頂いたりして親切にして頂きました。アスラマの子ども達はもちろん、IWCに参加したディアナ

ブラ大学の学生だけでなく、他のプログラムでプリンビンサリ村に来ていたディアナブラ大学の学生や他の大学の学生とも交流する機会も得られました。インドネシアの大学生も私達と変わらず、自分達の将来について考えていたり、時には課題に追われたり、昼ご飯はカップ麺など簡単なもので済ませていたりといった生活を送っていて、その様な事を片言の英語で話して盛り上がりました。帰国した後でも一部の学生とは今でもLineなどで交流を続けています。IWCをきっかけに良い友人を作れた事はとても嬉しかったです。

言語の壁

特に今回のボランティアにおいて最も大変だったのは現地の方々とのコミュニケーションでした。事前学習の時に自己紹介ができる程度のインドネシア語を習得しましたが、いざ現地に行くと、語彙や詳しい文法まで学んで無かったので思ったように伝えたい事が言葉に出せませんでした。また現地で活動するディアナブラの学生の中には少しぐらい日本語が話せる学生がいるだろうと慢心していたせいもあって、突然の言語がなかなか通じない環境に戸惑いました。その為、インドネシアに着いてからディアナブラ大学の学生と対面した際にはみんな日本語が話せず、逆に桃大生側もインドネシア語が全く話せないという意味疎通が出来ない事態となりました。幸い、ディアナブラの学生はびっくりするぐらい英語が堪能だったので、私達も簡単な英語ながらも日常のコミュニケーションぐらいはできました。英語を使って会話するという体験は初めてでした。この時は今まで英語を苦手教科でありましたが、勉強して良かったと思ったと同時に、思ったことを伝えていたディアナブラの学生の英語力を自分も身に付けたいと羨ましく思いました。しかし、細かい表現が求められるミーティングとなるとお互いなかなか意見が伝わらず苦労しました。この時私は桃大生とディアナブラ大の学生の通訳を行ったのですが、私自身英語は得意でも無く、受験時のセンター英語も平均以下でした。なんとか自分の語彙を総動員して通訳に努めたものの、実際は相手の

英語を聞いても半分程度しか理解できませんでした。また逆に相手に英語で伝える際にはなかなか伝わらず何度も言い直す事があり、自分の英語力の無さを痛感しました。しかし、アスラマの子ども達も英語が話せる子が多く、すでに小学生でありながらも日常会話ができる様な子が数多くいました。流石に日本と同じく小さい子どもは英語を話せないだろうと思っていただけにとっても驚かされました。観光地であるバリでは英語のスキルは都市部のサービス業に就くのに必須のスキルらしく、みんな頑張って勉強していると後で知り、日本とは全く違う世界であると思い知らされました。

インドネシア滞在中はディアナブラの学生やアスラマの子ども達など英語が通じる相手とはなんとか話せましたが、年配の方などとの会話ではインドネシア語だけで会話せざるを得ない場面が多かった為、買い物やホームステイ先の家族とは言葉よりも身振り手ぶりでのコミュニケーションが多かったです。さすがにジェスチャーだけでは伝えられる事に限界があったので現地についてからもインドネシア語の習得には急いで取り組みました。この様な環境の中で何日間も英語で話していくうちに会話の場面でどういう単語を使えば伝えられるのか分かるようになってきました。最後は言葉が通じづらい中でも互いの事を色々知る事ができ仲良くなれましたし、今後この様に言葉が通じづらい中でも努力次第で日常生活の中で仲良くなれるのであれば言葉の障壁は簡単に乗り越えられる可能性を感じられた体験でした。

アスラマの子ども達

アスラマの子ども達から沢山の事に気づかされました。昔に地元で小学生の子どものキャンプで、私が小さい時には参加者側で中学生になってからはリーダー役をしていたので子どもとの関わりについてはちょっと経験していましたが、果たしてインドネシアのアスラマの子ども達とはうまくやっていけるのだろうか不安がありました。

プリンビンサリ村に着いた際には最初にアスラマの子ども達が出迎えてくれました。子ども達は学校で日本語の授業も受けているらしく、「こん

にちは」と大きな声で挨拶された際には驚きました。アスラマの子ども達はいい子でばっかりでワーク中に重い石を運んでいると自分から手伝いに来る子もいました。たまにテオくんが石をスマホに見たてて電話するモノマネをしたり、丸い石をおにぎりに見立てて食べるモノマネをしたりとユーモアあるギャグで溜まっていた自分の疲れも吹き飛びました。自分達は持ってきた軍手をはめて運んでいたのですか、子どもは素手で持ちながら運んでいて自分の方が大きく力もあるのに素手で持たせていることに申し訳なくなりました。休憩時間中やワークが終わった自由時間の間もしばしば子ども達から遊ぼうと誘われることがありました。子ども達とはバレーボールやバスケットボールといった球技にサンダルを投げる鬼ごっこなんかをしていました。みんな運動能力が高い子が多く、体力が無い自分は付いていくだけでも大変でした。時にはボールの取り合いや怪我をする様な緊張する場面もありましたが、喧嘩の際には年長の子が仲裁に入って仲直りさせたりしていて、アスラマの中で小さい子から中学生の子までが一つの仲間として協力しあっていました。遊んでいる間うまくコミュニケーションが取れるか心配でしたが、エクセルくんなどの英語の話せる中学生くらいの子がリードしてくれたおかげでうまくコミュニケーションが取れてとても助かりました。子ども達にはよく名前を聞かれることが多かったです。名前を覚えようにも忘れてしまったり、他の子と間違えてしまうこともあったりして申し訳無いと思う時もありましたが、名前を覚えて喜んで貰えたときは嬉しかったです。アグンくんなどアルプス一万尺の様に二人で手を合わせたりする振付けを一緒にした子もいました。この振付には子どもによってバリエーションがあり面白かったです。友情の印みたいな感じで行われており、自分もスムーズにできるように会うごとに一緒に試してみました。

私は趣味で漫画やアニメのキャラクターのイラストを描いたりもしているのですが、最初の自己紹介の際にその事を言うと、ある子どもからインドネシアでは大人気のアニメであるナルトのキャ

ラクターを描いて欲しいというお願いをされました。いつもは違うジャンルのキャラクターをよく描いていただけに突然のお願いに困惑しましたが、苦肉の策としてスマホで調べて出てきた画像で模写しながら描いていました。やっとできたイラストを恐る恐る渡してみましたが、意外にも喜んで貰えました。自分でも画力には自信は無かったのですが、模写ながらも初めて描いた絵を喜んで貰えた時はとても嬉しかったです。その後も噂を聞いて他の子ども達からナルトのキャラクターで誰を描いて欲しいといったリクエストを受ける様になりました。最初は寝る前などに描いていたのですが、段々リクエストが増えてきたので、やがては休み時間などにアスラマの中でも描くようになりました。日本では恥ずかしくて人前で描くことは余り無かったのですが、実際に描いていると周りから見に来る子どもが沢山集まってきました。少し恥ずかしいとも感じましたが、そこから見に来た子とも会話や交流が広がっていき仲良くなるきっかけにもなりました。描いている所を見てBagus（すごい）と言って貰えた時はとても嬉しかったです。しかし一方でリクエストが多くなると完成も遅くなるので子どもからもう出来ていると聞かれた時は申し訳ないと思ったこともありましたが、完成した絵を渡して喜ばれた時は自分も同じく嬉しくなりました。自分があげた絵がその子の部屋に飾ってくれているのを見た時には絵を描いて良かったと思いました。他にも村の中を回るときに一緒に来てくれたり、落ち込んでいた時には励ましてくれたりとまるで家族の様に接してくれました。別れの際には絵を描いてあげた子からその子自身が描いた絵を貰いました。まさかのサプライズには驚きましたし、子どもの為に絵を描いてあげて良かったと思いました。最後の日の朝に学校へ送り出しての別れでしたが、最後の所で別れの寂しさに泣いてしまいました。今まで絵を描くことについては趣味でやっていましたが、今回子ども達に絵を描いてあげて喜んでくれたのですが、実力が無い自分でもできるとは思わなかったです。しかし、この経験をきっかけに人を喜ばせる事がこんな自分も嬉しくなる事だと感

じられましたし、今後も人を喜ばせたいと思って絵を描きたいと思う様になりました。自分の中の少しの変化ですが、アスラマの子ども達には本当に感謝しています。

この二週間弱のインドネシアでのボランティア活動を通して沢山の事を学び経験しました。ここで会った人の事、アスラマの子ども達の事、見て聞いて思った事は忘れずにいたいです。今回だけに限らず今後も海外など新しい事にもっと挑戦していきたいと思いました。IWCは自分自身を見つめなおして、より積極的に行動するように変化する機会になりました。

いずれ大輪の花を咲かせるために

経済学部 1年次生 板倉 悠佑



私が今回このプログラムを選んだのには2つ理由があります。第1に私は大学生になったら、海外に行こうと思っていたからです。日本の中で住み続けるということが悪いというわけではありません。ですが、海外に出て違うものの見方を知ることが自分の視野を広げるために役に立つのではないかと、今海外に行った経験は将来必ず生きるのではないかと思ったからです。第2にボランティアができるという点です。私は、過去にボーイスカウトに所属して、自治体の地域の催しに参加しておりました。その時に、お金をもらわずとも善意で多くの人が集まり、何かを成し遂げていくと

いう過程が素晴らしいと感じました。その感情を大学生でも味わいたいと考えたからです。この2点を両方兼ね備えているのがこのプログラムだったので私は参加しようと決意しました。

私は今回の活動についてプログラムのメインテーマである「ボランティア」という視点から何を体験し、何を感じたのか記したいと思います。

。「ボランティア」

私は海外でボランティア活動をするという経験が思い浮かべたのは、綺麗な水を確保するための井戸作りです。東南アジアやアフリカ諸国において、青年海外協力隊や学生などが作業している様子をTVやインターネットのニュースでよく見るからです。しかし、日本人が少し作業をして最後に現地の人と写真を撮るといった流れしか見たことがなく、具体的な中身は掴めないまま現地に入ることになりました。

現地の作業は主に塀作りと農作業です。塀作りは最初石を運ぶということをしました。この石は大きいものは地面を転がさないといけないぐらいの大きさ、小さいものは片手で持てるほどの大きさです。この石は塀の基礎として使いました。続いて外部から持って来ていただいたブロックを壁の近くまで運びました。インドネシアのブロックは型にセメントを流し込んだ物なので詰まっているが脆く、角とかは削れやすいものでした。肩に担ぐと両手に一個ずつ計二個だが、両手で抱え込むように持つと計三から四個も一度に運ぶことができるようになりました。このように今回働いていた人はそれぞれどのように動いたらチームのためになるか、素早く終わらせていくにはどのようにしたらを考え、実行していくことができたと思います。また、無言でやっけていても精神的に辛くなるだけなので、すれ違いざまに「頑張って！」や「スマンガ（頑張るのインドネシア語）」など声を掛け合いながら作業していき、お互いのことを思いやりながら進めていけたのがよかったと思います。ほかにも、セメント用の砂を作業場所の近くまでバケツで運んだり、砂利を運んだりしました。一番良かったのはブロックを積み、セメ

ントで固定していくというブロック積み体験をさせてもらったことです。基礎の上に積まれたブロックの上に次のブロックを置くべきラインが示されています。その高さに合うように下のブロックにセメントを盛ります。最初スコップ一回の量で足りるかと思いましたが全然足りません。山盛りとはこういう感じだと言わんばかりに重ねていき、その上に次のレンガブロックを重ねていきます。そして、同じ高さの隣り合うレンガの間にもセメントを流し込み完成です。私は今回ブロック塀づくりというものを初めてしました。普段ブロック塀を見ても何も感じない人生を今まで送ってきました。しかし、基礎を作りブロックを積み重ねて隙間はセメントで埋める、という単純だけどとても多くの労力があることがわかり、それを学生と現地の人々が協力して組み上げることができたとき、何とも言えない達成感、爽快感を得ることができました。

この塀作りを通して私が感じたのは、石を隙間なく詰めて土台を作っていくという技量の高さ、日本と比較した際に余りにもブロックが脆いということです。石というのは一つ一つが違った形をしています。その石の形を立体的に捉えて平らになるように積んでいくのは職人の成せる業だと思います。しかし、あくまでも“積んでいる”だけです。最終的には隙間に向かってセメントを流し込み形だけは整えますが、横からの衝撃に対する対策は全く講じられていません。よって横方向から強めの力が加わると崩れてしまい、上の壁も倒れてきてしまいます。日本では、今年地震の際にブロック塀が壊れるというニュースがあり、本来なら法律に基づいたものを作らなければならないのに、ルールを守っていない案件が多いということが話題になりました。そのことを踏まえて今回の塀を見直したら、基礎のところは杭を打つ、針金を通すなどの措置を取らないといけないのではないかと強く思いました。このように思う理由として、今回塀を作った場所は児童養護施設だからということが言えます。塀は子供たちが普段生活している範囲を守るために、施設の中と外を分ける場所に作られています。ということは子供

たちが塀にもたれかかる、遊びに使うなど触れる機会が沢山あると思われます。その塀が非常にもろく、もし何らかのアクシデントがあって崩れるようなことがあれば子供たちが危険にさらされてしまいます。そんなことあってはならないと思います。つまり、何かが起きる前に、そのリスクを回避することができるのであれば策は講じていかなければいけないと言えます。この現状を改善していく方法の一つとして、国が民間の事業者に対してリスク管理に関する法律を設けること、企業向けのガイダンスなどをすること、そして企業が法律を順守しているのかを確認するシステムを整備しなければならないと思いました。インドネシアは現在発展途中の国で、制度やリスクに関する国の法整備の遅れや民間人への周知の遅れなどがあることは確かです。しかしインドネシアという大きな国を将来的に支えてくれる子供たちなので、安全は確保してほしいと強く感じます。ここに日本や諸外国がソフト面で支援すべきことが垣間見えたかと思えます。

ボランティア活動のもう一つの事柄として、農作業がありました。私たちが着いたころには、畝が整備されているだけの状態でした。私たちはまず遮光シートを畝にかぶせ、竹を細かく裂いたもので柵のように丸くして直接さして固定していき、このやり方は日本でも広く用いられており、日本のやり方を参考にしているのだといえます。今回は私たちの桃山学院大学にも留学生として来られていた方がその技術を持ち帰って広めたそうですが、このような作業を通じて日本と東南アジアの繋がりを見ることができるとてもうれしかったです。自分がやってきたわけではないけれど、日本の海外に対する支援がその国に利益をもたらしていると実感できるからです。作業としては、次に穴をあける機械（手動）で三列に直径10cm程度の穴をあけていき、作物の種か苗を植えていきました。今回扱った作物はナスや空心菜など多種多様でしたが一番印象に残っているのが唐辛子の苗植えです。唐辛子は現地では欠かせない作物です。現地の料理には本来たくさんの唐辛子が使われています。（私たちが食べた料理は

日本人が食べやすいように加工してくださっていて、一部インドネシア学生からは反応があまり良くなかったが、おいしいことは確かである。)しかし、最近唐辛子の値段が少しずつ上昇してきていると聞き自分たちのため以外に、余剰分を販売して施設の利益にすると知ってからはこの苗は特に丁寧に扱わなければならないと思いました。この苗が子供たちの生活を助ける、大げさな言い方かもしれませんがそれぐらいの緊張感があったと思います。そして、順調にやっているつもりでしたが一つ、茎の部分を誤って持っしまい、茎と根を分断してしまったときには大変申し訳ないことをしたなあと反省し、暫く立ち直ることができませんでした。種や苗を植えた後は、上から肥料をかぶせ水をかけるという作物を育てていく基本的な流れを進めていきました。驚いたのは作物の生育の速さです。私たちが帰国するころには種は発芽し、苗は成長して倒れかけているものまでありました。なので、最後の作業として竹を立てて補強していきました。

私は今まで農業を体験するということはありました。しかし、しんどい仕事は一部大人や機械が代行してくれていてちゃんと成し遂げたことはなかったかと思います。ですが、今回畝の整備から種、苗植えに成長しかけの作物のアフターケアと収穫以外の一通りの流れを体験することができました。この体験より、普段何気なく食べている

野菜は作るのにとても労力が必要で、生産者に対する感謝を感じたと共に、この作物がやがて子供たちのために生かされていくと思うととても嬉しく感じました。いままでボランティア活動というものはたくさん経験してきました。しかし、ことを成し遂げたときは充実感があっても、そこでそのボランティア活動は終了し以後気にかけることもほとんどありませんでした。ですが、今回は私たちがやったことがこの先どうなるのかということがみえたのでとてもうれしい気持ちになりました。手伝ったことをきっかけに、相手のこれからのことを共に考え、歩んでいきたい!という特別な感情を得ることができたのはとてもよかったですと思います。

私は今までボランティア活動というのは無償で作業を手伝いたい人が集まってするものだと思っていました。しかし、今回ワークキャンプに参加したことによってボランティアをするということはどういうことか考えるようになりました。ただ、依頼されたことを淡々とこなしていくのではなく、終わった後どうなるのか?果たして今やっていることはこのままでいいのか?など作業している最中に何度も気にかかることがありました。そこで、疑問をそのままにしておくのではなくこうして振り返ってみることができ、今までの自分とは違う思考が芽生えてきたのが、今回のワークキャンプの一番の収穫かなと思います。

IWC32

Slamet Riadi (Well)



First of all I personally would like to extend my a lot thank you to numbers belonging to all a member of officials involved in the program IWC 32 years 2018. In this program I personally get a lot of friends especially from a foreign country especially from japan.

First of all I in told you to do to register in the program this encounter recently where I personally for all the staff worry because to I heard many students japan are expected to conclude it could not have speak English and also Indonesia language. What I was thinking, we will not can talked direct and work with them for limited our language different, But after meeting with them precisely in hotel puri plain of sharon denpasar on the 20 august 2018 we all students undhira start welcome them with each other friendly and introduce one another with English Although most of them perfect in his sight for discussing with no results call any human being common my name is with the requirements of truth because to as far as I know people of japan it could not have the miracles of the “L” so my name is turned into a song of “weru” that was originally “well” -.- . And I one also first introductions with them, I could not be immediately memorization their names because

many similar to and difficult to say, that night was a night short for me it cannot chattering and talk a lot with them. The next day we paid a visit japanis consulate in renon to find how the condition of bali as well as the habit of the people of bali in the specific case of belimbingsari which is going to be where we live 2 weeks in the future. After that in the afternoon all of member go to belimbingsari to continue the program as a volunteer work for was there. Fears over as I like to call a second time after arriving in belimbingsari because to all that college boy crap undhira it is pieced together what the students are japan are expected to conclude him to turn away his stay together in houses of community members who we do not know at all, However after arriving in guest of the house is scheduled to take the two of us in to welcome in friendly greeting to by her host were and her host were also can speak japan are expected to conclude so I was dizzy own prices of other and he saw two japanese language studies and school but I was too short understanding what they are talking about, Day by day we during there I personally learned so much of the students and those who was there, for there compactness our team very good although we indonesian students do not understand them but increasingly we learn with autodidact and began to see what they say every day, For example ungko-ungko, boki-boki and many other languages they tell us, in that way we learn to speak each other so that closer and more understand what they say every single day. Of the program I personally a lot to learn especially about how appreciate time honor others at the time of speaking in front and having my new very special if possible haha☺. Through this program I can see people who is

similar to my X girlfriend, The last word is, iwc are members of this year you were so valued, love u all and love this program. THANK.

IWC32

I Gede Aditya Wahyu Wardana



When I first met with Japanese students, I felt awkward, I was confused about what to say to them and I ventured to interact with them. The first day I wanted to go home, but I canceled that wish with the original I wanted to add my best friend. Because for me life will be beautiful if there is love, but it will be even more beautiful if there are friends. Then when we arrived in Blimbingsari village I was very happy because the village where my grandmother was born and where the first time the Protestant Christianity stood in Bali. The village of Blimbingsari for me is a very beautiful village, friendly smile of local people makes me very comfortable.

During my guidance, I stayed at the house of Mr. Made Purta Wijaya. Then it was time for the opening of the IWC program to be held at the Blimbingsari dormitory. I saw the enthusiasm of Japanese students and the lecturers and students who were very happy

to see the Balinese traditional dance performed by the orphanage children. and the time comes when we begin our main activity, namely the construction of walls. We work together to complete our first mission, which is to move the stone as the foundation of the wall. this is the first time I have been doing activities like this. And this is my first experience that I will never forget. As time went by, I began to recognize Japanese characters. Japanese people really care about the time for them time is everything, in contrast to the character of Indonesian people who are don't care with the time, I can see from the way they drink coffee or tea. They are very quick to spend the tea or coffee even though they are still very hot.

Three days passed, we continued to build the wall. then my body condition began to weaken, I got sick and could not carry out the activity, fortunately the family where I lived was very kind and wanted to consider me as their own child and take care of me. One day passed the condition of my body improved and I was able to return to the activity. not only mutual cooperation to build walls, we also have teaching and learning activities in elementary and junior high school. This is also the first time I teach children. Not only teaching us also doing BBQ activities we invite hosts in our place to stay for dinner together in the dormitory. And it doesn't feel like we've lived in Belimbingsari village for 2 weeks, our mission of building the wall was finally finished. The moment I will never forget I saw a child named Okinawa, only this little boy could make my heart touched. And I promised myself I would come back every 2 or 1 months to help fulfill the child's needs in reaching his goals.

IWC32

Marten Dwi Putra Yuda M.



The first time I found out about the IWC program when I worshiped at Ambyarsari Church, there I saw a friend who attended the event, then my friend invited me to take part in the IWC program, at first I was afraid to join this event, because I didn't really get it in Japanese, but because of the encouragement from lecturers and friends on campus, I was finally willing to take part in the IWC program. The first time I met students from Japan, I felt very nervous, because I didn't really speak Japanese well with them. But with time and often meeting with them, finally I can understand and speak their language, even though they only use mixed languages, from Japanese, English, and contain a little sign language, so that they can all understand what we want to convey to them.

During the IWC program in Blimbingsari Village I felt very happy and grateful, because when I was there I lived in the family home of Mr. and Mrs. Ketut Wijaya, together with his niece named Lia. I was at home, I felt like I was at home, there I was considered like their own child. Every day I was cared for and cared for very well by this family, I really love this family. While working in the making

of the wall for the Widhya Asih Blimbingsari dormitory, I felt happy and eager to do all the work, from lifting stones, transporting sand, moving brick and others. In addition to working to make a fence, there I was invited to plant in the garden. There I planted many plants such as chili, various kinds of vegetables and others. I did all that with enthusiasm, and full of laughter from Japanese students made me not feel tired to do all the work.

During the event I got to know Japanese students more closely, and learned some Japanese vocabulary. I think Japanese students are very friendly, and very joking with us students from Indonesia. But during work time Japanese students were very excited, even though the weather in Blimbingsari was quite hot but they still wanted to work hard until it was finished, and also the children in the orphanage were very friendly to us all so they wanted to help us and lighten the burden of all of us. Not to forget I was able to study Japanese songs whose title was "Sekai ni Hitotsu dake no Hana", the song was very good. I loved the lyrics in the song, it was when I first sang Japanese songs and it was a memorable experience for me. Thank God for allowing me to be able to join this event until the end, also thank you for Japanese students who are willing to come from far away to attend this work camp until finally?

Thank you for the time and very important teaching that I got from Japanese students. Thank you also to Indonesian students who are willing to participate in this event, so that this event can run smoothly and complete until the end. Thank you for the host who was ready to take care of me while I was there, and the last thank you for the Widhya Asih foundation that made the camp at Blimbingsari, hopefully with the completion of this program

there were many changes to the children in the Widhya Asih Blimbingsari orphanage.

IWC32

Gusti Ayu Mutiara Karismayani



International Work Camp is the first international activity I have ever joint. It was 32nd. International Work Camp with Momoyama Gakuin University Japan. At first, I think this activity become awkward because I can little bit spoke at japanese language. I think "what if I can't continue this work camp and in the middle of this activity I want to go home?". I also think if the event will dull and tiresome. But thats all indisputable when I'm really getting joint this work camp. In fact this program is very interesting and fun. We can learn many things like discipline, time management, learn how to speaks polite, and good attitudes.

At IWC 32nd. we learn about jaanese culture and language. We had opportunity to visited Japanese Consulate General with the students and staffs from Momoyama Gakuin University. We celebrate the 60th partnership between Indonesia and Japan at that time. The students and staffs from Japan gave some explanation about Japan and Indonesia partnership and

part of Bali Island to all members. We also went to Japanese club at Sanur.

This 32nd International Work Camp held at Widya Asih Foundation Blimbingsari Village at Melaya, Jembrana. We had job to build walls for the childrens. We move the sand, rock, and brick to the spot that has been determined. Our job is not only to build the wall but also learning how fo farming vegetables. We are farming vegetables like green beans , eggplant, chili and pokcoy. So much fun to learn how to farming all this vagetables. Started from give some plastic on the land, make holes, planting vegetable seeds or sows into the holes, give fertilizers on it and watering the seeds. We did evaluation about Widya Asih Foundation Blimbingsari at Synod GKPB office. We did evaluation for make the better place for the childrens. We also want the childrend get good food, facilities and a safe environment.

At one time we held exchange party about japanese culture and indonesia culture. The japanese students presents dancing and sang a song. The indonesia students do the same thing. We also watch children's dance and they are dancing happily. The Japanese students also show a sumo wrestling. We all can join to fight with the sumo. All happy and laughed together. We bring them to travelling to some place in bali, like Tanah Lot temple, Gua Gajah Temple, Tampak Siring, and Kintamani.

IWC32

Agnes Nyoman Putri Jenita



This is the first time I have participated in a voluntary work program. I got lots of new experiences and new friends with different cultures. When I first met Japanese students, it was very difficult to communicate with them because not all Japanese students can speak English well and Indonesian students can't speak Japanese well. And it was very difficult to remember their names. It took about 3 days to remember their names.

When we arrived at Blimbingsari village, so many Widhya Asih children welcomed us well. They helped carry our luggage and accompany us to the host family house. For 13 days in Blimbingsari, I lived with a grandmother who lived alone in her house. She is very nice and friendly to us. I got a roommate, her name is Meru. She is a good roommate and my bestfriend. Me, Meru and Muti live in the same house. Before going to sleep we often shared stories until late at night.

Volunteer work began, we started this activity by moving stones and sand to make Widhya Asih backyard fence. This activity is very fun because it makes us closer to each other. We do this work together and help each other so that we are not really tired. While

working, we also learn about Japanese and Indonesian new vocabulary. This is very interesting. In voluntary work, we also learn gardening. We prepare plantation land and plant vegetables together.

Besides doing volunteer work, we also do a lot of activities, such as exchange party. I'm very happy to be MC for the exchange party. In this event, we exchanged culture in dances and songs. It is very happy to be able to watch the performances of Japanese students and watching Sumo. Everyone enjoys this event. It is very fun to be able to entertain The Widhya Asih children and see them laughing.

13 days living in Blimbingsari, time passed very quickly. We really enjoy staying there. The day before back to Denpasar, we held the Farewell Ceremony. It is very sad when we have to say goodbye to our host family and Widhya Asih children. Everyone cried and hugged each other to say goodbye. The children hugged me tightly. They gave me lots of letters and little gifts. I will not forget them, I love them so much and I promise that I will back to Blimbingsari soon.

International Work Camp is a fun experience that I will never forget. I will study Japanese so that I can communicate well and get closer to all Japanese students. Thank you for your cooperation and see you again.

IWC32

Aprillia Ayu Anggraeni



This is the first time I joined an international volunteer program. And since it is my first time to be having this experience, I was overwhelmed with my own thoughts and worries that the program will be all awkward and full of miscommunications since my knowledge in Japanese language is almost close to zero (it is actually zero but it wouldn't be nice to give an impressions that I am stupid at literature in this report, at least I got to pretend I know a little after all right? >,<). But despite all of that I also felt over joyed and excited during all those time we have spent together. Our togetherness and spirit to get to know each other's culture broke the language barrier that often happened every now and then. We got closer and closer through all the activities we did together at the camp.

This program is called International Work Camp (IWC) it was 32nd collaboration between Widya Asih Fondation, Dhyana Pura University and Momoyama Gakuin University. The program started with our visit to Japanese Consulate General where I and all the participants learned that it has been 60 years Indonesia and Japan have a smooth and

stable partnership together. But to tell you the truth, I can barely catch any information if it wasn't with the help of my Japanese tomodachi (Japanese language for friends, see, I did learned something at last). Yet to make it clear, my lack of understanding is not because I was sleepy all the time we were there, but because all the printed paper was written in kanji, hiragana, and katakana (Japanese styles in alphabet, see I do know much about Japan now).

After we were done with the activities at the Japanese Consulate General, all of us move along to Blimbing Sari Village. And only after we ate lunch, we were introduced to the owner of the houses where we were gonna live in for the next thirteen days. I was assigned to be Miyu-chan roommate in the Damian's house where we were treated like their own family.

We did an opening ceremony on the day after we arrived at the Blimbing Sari Village. The ceremony was lead by those in charge of the village. It was held for more or less 4 hours, started from 8 in the morning till in the middle of the day. Started from the elders giving a welcome speech for our volunteer program, which includes; building a wall, farming, and teaching. Continued with us having lunch together before we all started working for the programs.

For two days straight all we ever did was just building the walls for the orphanage border in the afternoon and farming in the evening. The wall's purpose is to protect the children living in the orphanage and the farming things is for keeping them full, because a happy kids is a kids with a full stomach. These kind of activities made me feel like I did a real good things for others. It gave me the feeling of contributing something nice

and spreading great vibes to the world.

On the third day we were there, we did the same for the afternoon but for the evening we didn't do farming anymore. Instead, we were preparing something big for the exchange party. In the party we are supposed to have a more understanding about each other culture and learn from one another. And believe me, the party was extravaganza. The Japanese students performed their long-prepared-and-trained dance. The theme of their dance was black and white but I have trouble remembering the dance name (sorry). And for the exchange, we taught the Japanese students a dance from NTT called 'Maumere'. Together we enjoyed the dance and so we can give the orphanage children something nice and memorable to watch. We also learn about Japanese traditional sport called "Sumo" I guess and also some people try to do with a Japanese student and that is very hilarious and very memorable.

On Sunday all of us went to the church we pray together, sing together and I like the song that we sang together at the church as a

vocal group. The song it's about the only one flower in the world (I don't remember the title of the song, sorry but I still remember the lyric of that song). On next day we do the same activity like usual but the different is we getting closer with each other after that we started to prepare the materi to teach the kids on elementary school and junior high school about hiragana for two days. On the next day we made curry a traditional food from Japan and served to the children and host family. Thirteen days flies so fast we went back to Denpasar after that We did evaluation about Widya Asih Foundation Blimbingsari at Synode GKPB office. We did evaluation for make the better place for the childrens. We also want the children get good food, facilities and a safe environment.

We spend our last few days to having fun. We visited a lot of place such as Tanah Lot, Tampak Siring, Kintamani etc. over all I'm happy to be the part of this program and really greatfull that I have an oppurtinity to joint with this volunteer program and met with a lot of new friend from Japan.

3度目のバリ

第32回国際ワークキャンプ団長

チャブレン 宮 嶋 眞

出発まで

8月20日から9月6日の予定でインドネシアバリ島、プリンビンサリ村にて実施しました。

4月の説明会には4回にわたり50人余の学生が参加してくれ、期待しましたが、応募者は意外に少なく12名にとどまりました。応募者に筆記試験、面接試験を行い、残念ながら2名は不合格。男8名、女2名の10名が参加者として決定しました。第1回のワークキャンプの参加者が13名だったのを下回る少人数に不安を覚えたのですが、のちのち、この少人数だからこそできたというよい面が色々と現れたように感じます。

5月初めから事前学習を始めました。昨年と同様、根っこワークスの穂久氏にグループワークの指導を最初に受けました。仲間作りと自己責任をチームの中で果たしていくという目標を持って、土曜日一日の研修を行いました。昨年度もこの研修の「仲間作り」としての効果はあったと思われましたが、さらに今年は「チームの中での自己の役割や責任を果たす」ということにもフォーカスしてもらい、その点が、参加者に意識されていたことが、大変成果につながったように思います。

その他事前研修の中で今年変化したところは、バリ島の歴史、プリンビンサリ村の歴史などの講義、ワークキャンプの歴史とそこで大切にしてきたこと、などの学びが大切にされたこと。逆にインドネシア語の研修が7回から3回に短縮され、それも出発前に集中して行なったことなどが挙げられます。インドネシア語の学びを減らしたのですが、現地ですばほど困ったことはなかったと思われまます。

従来から行われていた、個人の衛生管理と病気予防、そのための予防注射などの対策、海外旅行での危機管理、ボランティアとは、インドネシア概論などの学びは継続して行われました。

直前合宿では、日本語プログラムや、日本食提供、ダンス、歌などの練習が行われ、また、巖副学長推薦の「僕たちは世界を変えることはできない」のDVD鑑賞も行いました。同世代の大学生が、カンボジアでの小学校建設にチャレンジするという設定に、学生たちも大いに引き込まれたようで、その中で生じる課題、問題などもある程度先取りして意識できたように思われます。

現地到着

さて、実際に現地に飛び、初日、バリ、デンパサールにある「ディアナプラ大学」の学生男女各3名と出会いました。参加者の人数が多いと、どうしても活発な学生が表に出て、消極的な学生がその後ろに隠れるという現象が起こるのですが、少人数だと隠れる場所がなく話をせざるをえない状態になったようです。インドネシアの学生も、日本人学生が多いと少し気後れしてしまうのですが、今年はそのような意味では、どんどん日本人学生と交わっていったように思われます。

毎回お世話になっているシクドラマ氏、石井美和さんも元気な笑顔で迎えてくれ、フォルマン氏も静かな笑顔で迎えてくれ、今年も大丈夫だという安心感を与えてくれました。

第30回の途中帰国の経験から、日本人学生が疲れをためないようにという配慮で、夜も早めに切り上げ、翌日もすぐにプリンビンサリ村へ出発するのではなく、朝、少しゆっくり起きて、少人数であることの利点を生かし、日本国総領事館へ全員で表敬訪問に出かけました。これも貴重な経験だったようです。小回りがきくという利点はアスラマ滞在中にも発揮され、日曜日の午後、プリンビンサリ村内の観

光（ダムの見学、カトリック教会の訪問など）、食事の買出しを兼ねたムラヤの市場とスーパーの見学なども行うことができ、バリの庶民の生活に触れることができました。

さて、昼食後、プリンビンサリ村へ向かい、夕方アスラム（養護施設）に到着。子どもたちの歓迎を受けました。昨年の参加者の名前を覚えていて、その名を連呼したりしてくれました。私の感想ですが、昨年よりも一回り大きくなった子どもたちの姿を見ると、その成長を驚く方が強く、「おっ、大きくなったね」と反応してしまい、相手も少し恥ずかしそうにニッコリと微笑を返してくれる感じでどちらかという落ち着いた歓迎を受けたという印象でした。

ワークについて

翌日、開村式、ワークの起工式（隣家との境界のブロック塀を作るために、その土台を定礎する式）を行い、いよいよワーク開始です。今年は、滞在中のプログラムの一部を見直しました。学校訪問の日程が多くなり、ワークの時間が落ち着いて取れていないという反省を踏まえ、看護学校、高等学校での日本語プログラムを中止し、その分ワークの時間を増やすことにしました。その結果は、ワークそのものに学生が集中でき、落ち着いて最後までワークに取り組めたように思います。

昨年は参加学生が多く、また中学、高校生の生活する、ムラヤの町のアスラムでの作業でしたから、中高生も大勢手伝ってくれて、全員が一列に並んでバケツリレー方式で石や砂を運ぶことができました。しかし今年は学生の人数が少ないうえに、小学生中心のプリンビンサリ村のアスラムでの作業でしたから、手伝いもあまり期待できず、学生一人ひとりがバケツを持ち、石や、ブロックを抱えて運ぶという重労働となりました。ただ、昨年はワークをするためにムラヤまで行かねばならず、食事のたびにプリンビンサリに帰るといふ、移動に結構時間がとられたのですが、今年は、プリンビンサリの施設内で完結しており、その点ではかなり時間的には余裕ができたと思います。一方でムラヤの中高生との交流ができなかったという点は残念な点でもありました。

隣家との50m以上にもなる長い塀作りは、6人の職人さんも加わりましたので、私たちは主に、土台になる大きな岩を運び、その後セメントと混ぜる砂運び、さらにその上に積み上げるブロック運びを担当しました。車が入れる道路から、作業現場までは50mくらい離れているために、資材運搬の必要があったからです。

職人さんは、運ばれた材料で手際よく土台を作り、ブロックを積み上げ、塀を造っていきました。約二週間で予定の工事を完成することができました。私たちの働きがよかったのか、時間的な余裕も生まれたようで、何人かの学生は、ブロック積みの手ほどきを職人さんから受け、実際にコテを使いコンクリートのバテを置き、その上にピンと張られた糸に沿ってブロックを水平に積み上げる作業を体験させてもらいました。完成後、土台の一角にコンクリートで平らな面を作り、そこに「第32回 IWC 2018年8月29日 桃山学院大学 UNDHIRA (Univercity of Dhiana Pura)」とサインし、大満足の完成となりました。

昨年から少し行っていた「農作業への参加」は、今年はかなり本格的に取り組むことになりました。アスラムの敷地内に昨年の三倍、桃山学院大学のアンデレ広場の半分くらいの土地に、日本の野菜栽培と同様に、畝にプラスチックのフィルムをかぶせ（雑草よけのため）、60センチ間隔で穴を開け、そこに苗（トウガラシ、空心菜、ナスなど）を植え、あるいは種（インゲン）をまき、肥料を入れ、水をやる。苗が伸びてきたときのために支柱を立てるなどの作業を行いました。こちらも全ての作業を終え、帰る頃にはインゲン豆から芽が出て、15センチほどに伸びていました。育った野菜が子どもたちの食卓に並び、余ったものは売って、収入にすることができるといいでしょう。これらのワークの完成は大変嬉しいことでしたが、このように私達の力量を予測し、滞在中にちょうど完成する程度のワークを用意すると

いうことはとても大変なことで、現地スタッフの皆様に、その準備のご苦勞を感謝いたします。

その他のプログラム

その他のプログラムについては学生の報告を読んでいただければと思いますので、ここでは日本語プログラムを行う小学校で伺った話を書きます。インドネシア政府が近年、教育を重視する政策を取り、高等学校までの教育無償化政策を実施するようになってきています。これ自体は素晴らしいことなのですが、その際、教育無償化の恩恵を受けられるのは、本人の家族が登録している（ファミリーIDのある）県の学校に限られるという法律ができたそうです。アスラマに生活する多くの小・中・高校生は、自分の故郷、家族から遠く離れて、プリンビンサリ、ムラヤに滞在しているため、家族が登録している県外に住んでいることになり、無償化の恩恵に浴することができないという問題が起こっています。今までなら、貧しくて教育費を払えないから、アスラマに預けるという家族が、貧しくても、無償で学校に行けるので家族との生活を選ぶということが起こっているようで、今年アスラマに入所した子どもは全体で7名と激減したようです。家族と共に過ごし、無償で学校に行けることは素晴らしいことですが、食べられないという問題が解決しているわけではありませんから、ふるさとに残っている子どもの栄養状態は心配です。

アスラマに来る子どもたちが減少すると、アスラマの子どもが大半を占める、バリ・プロテスタント教会立のプリンビンサリ村の小学校や、ムラヤの中学校は存続の危機に立たされることになります。実際、ムラヤの中学校は、今年度の一年生を募集停止にしたそうです。ただ、この法律に関しては反対の意見もあり、今後も継続されるかどうか不透明で、変更される可能性もあるようです。バリ島、インドネシア共和国の状況も、これから先も、大きな変化が起こるかもしれません。今後のワークキャンプの開催にも大きく影響するかもしれない問題だと思います。

本年度の学生の状況とふりかえり

少人数だが健闘したというのが今年の学生の状況です。少し厳しかったけれどもワークで安定した働きができた満足感は何物にも変えがたい体験でした。スタッフ側も気を緩めることなく、朝の集い、食事時の祈り、夜の「ふりかえり」をきちんと行なった事は、学生たちの毎日の生活のリズムを保つために良い影響があったと思われます。この夜の「ふりかえり」については、学生数が少ないこともあり、①各自での個人作業としての「ふりかえり用紙」の記入と、②それに基づいて全員が一言ずつ感想を述べわちあうことが1時間のミーティングの中でちょうどできました。例年ふりかえりの時間が長くなって昼間の疲れもあり、夜のミーティングがかなりきつくなるのですが、今年は手早く行えて、メンバーの緊張感を保つこともできてよかったと思います。

試験的に、インドネシア語に通訳するときにはスィクラマ氏が、一方日本語に通訳するときには石井さんをお願いしてみました。これはスィクラマ氏の負担の軽減になったと思われますし、双方の学生のよりよい理解にも役立ったと思います。

エヴァリュエーション

毎年、その方法や、準備に頭を悩まされるエヴァリュエーション（評価）プログラムですが、今年は、現地でのスィクラマ氏から受けたアスラマ（養護施設）、ウィディヤアシ（アスラマを運営する団体）の講義に基づき、ウィディヤアシが掲げる「6つのミッション」に基づいて評価することにしました。この内容も学生の報告にゆだねますが、そのミッションについて ①参加学生の評価、②アスラマに滞在する子どもたちの評価、③アスラマに働く9人のスタッフの評価と三者それぞれの視点からの調

査を行いました。まず学生は自分自身で6つのミッションステートメントについて各人が評価し、その後、子どもたち（小・中学生、幼児は除く）やスタッフにも同様の質問をインタビュー形式で行いました。昨年も子どもたちにインタビューをして、その声を聞くことができよかったですと思いますが、今年はさらに、スタッフにもインタビューをしたのが特徴です。スタッフの方はさすがに緊張した面持ちで質問に答えておられました。学生からではあっても、やはり、ご自分の仕事について問われるという経験が、実は貴重だったのではと私自身、密かに思っています。

帰国のトラブル

台風21号による関西国際空港の閉鎖による帰国の遅れは4日に及びました。

当初、9月6日帰国予定で、台風も前日に日本を通過し、翌6日に帰阪できると考えていましたが、関空閉鎖の情報が入ったため、予約した6日の飛行機を7日の飛行機に変更してもらい、運よく翌7日の座席を抑えることができました。また、ホテルも宿泊していたプリ・サロン・ホテル（デンパサール）が延泊1日可能であったために予約しました。この時点でガルーダ航空も、翌日に飛行機が飛ぶという判断でした。やれやれ、これで帰れると思って一安心しましたが、6日の夕方になって、翌7日の飛行機がキャンセル、しかもしばらく関空は使えないという情報が入ってきました。急いで、成田行きの便を押さえようとしましたが、9日まで満席で、10日ようやく13席を確保できました。（これも、もし例年通りの学生数で20席以上の確保が必要だったなら、さらに滞在が伸びた可能性があります。）ホテルに関しては、プリ・サロン・ホテルがそれ以上の滞在は不可で、第30回のときにもお世話になったスイクラマ氏の関係のホテルをようやく3泊確保することができました。このホテルの立地が、クタという繁華街で、深夜になると、引ったくりや、強盗などが日常的に起きる危険のある場所であったため、学生のホテルからの外出は禁止とし、ホテル内のみ自由行動可としました。ホテルの前の通路にはガードマンが24時間常駐して警備を行っており、不審者の外からの侵入、学生の自由な外出にも目を光らせていただきました。閉じこもるばかりでは、ストレスも貯まるので、息抜きも必要との判断から、全員で、近くのスーパーや、百貨店への買い物や、有名なバリのビーチの夕日の見物なども行ない、一時を楽しむことも行いました。

さらに、ホテル滞在中に、帰国後の事後研修の振り替え授業として、4コマ分のふりかえり作業、報告書の執筆に関する相談、役割分担、実際の報告書の執筆などを行ないました。順調に帰国していたとすると、残り約二週間の夏休み終了後、これらの作業に着手するのですが、今回は現地に滞在しながら、まだ記憶が鮮明な間に、感激も薄れないうちにこれらの作業に取り掛かることができたのは、非常に効果的だった様に感じます。学生もしっかりと取り組んでいました。

なお、せっかく掛けていた旅行者保険ですが、このような災害によって起こった航空機遅延に関わる補償が、1事故につき一人2万円までということで、大学側には大きな負担を掛けてしまいました。保険会社とも打ち合わせ、今後の検討を要する課題かと思われます。

帰国にあたって大きなトラブルに巻き込まれた第32回のキャンプでしたが、全行程を通じて実り多い研修ができたこと、特にこのようにして、災いを転じることができたのは、現地スタッフの方々、また、大阪でサポートしてくださった大学の教職員の方々のお働きに負うところが大きいと思います。改めて感謝を申し上げます。

付言：滞在中に、インドネシアのキリスト教関係のメディアが、「プリンピンサリ村」そのものを特集する取材をしており、その中で滞在中の私たちIWCの取材も行われ、ワークの様子、交流会の様子の撮影、また学生へのインタビューなどが行われました。本年12月初旬に完成しネット配信の予定とのことです。

第32回国際ワークキャンプ（インドネシア）を振り返って

経済学部 吉田 恵子

初めてのインドネシア

私は第32回国際ワークキャンプにて前半の引率教員として、8月20日から8月30日までバリ島に滞在した。バリ島は大阪府の3倍程度の大きさで、経済の多くの部分を観光業に依拠している。この地で本学がワークキャンプを続けていることは知っていたが、どのような内容であるかについては第28回ワークキャンプに参加したゼミ学生の話聞くまでほとんど知らなかった。インドネシアに行くことも、ボランティアの引率をすることも初めてであったが、私にとっても貴重な学びの機会となった。

ゼミ学生の話

以前、第28回ワークキャンプに参加した学生一人が私のゼミに所属しており、アスラマでの経験を嬉しそうに話ってくれていた。アスラマでの経験で人生観が変わったこと、ふがいない自分に腹が立ったこと、子供たちの笑顔やスタッフの人々の優しさに触れたこと、運動会をして子供たちが喜んでいたり。聞いているだけでこちらもインドネシアに行ったかのような気にさせてくれるくらい、熱のこもった話しぶりだった。

彼女はその後インドネシア語の学習を続け、3回生の秋学期に日本語パートナーズの一員として半年間インドネシアの高校に派遣されることとなった。卒業した今でもインドネシアに対する思いは変わらないようだが、ワークキャンプが彼女に大きな影響を与えたことは間違いない。私が引率教員としてアスラマに行くことになったことを話すととても喜んでくれた。

学生たちが見せてくれた勇気

今回のテーマは「一歩踏み出す勇気」であったが、参加したメンバーそれぞれに一歩だけでなく、二歩三歩と踏み出す行動がみられ、心強く感じた。特に、日本国領事館で複数の学生たちからインドネシアの政治経済について活発な質問があったことは忘れられない。質問することはさぞ緊張したであろうと推察するとともに、貴重な機会を生かした学生の能動的な学びの姿勢にこちらも勇気づけられた。

学生たちは、初日のごちこないながらもやる気に満ちた様子から、徐々に生活に慣れはじめ、小さいざこざがありつつも一つの目標に向かって協働していく過程を見せてくれた。デンパサールから参加してくれた6人のインドネシア人学生たちとも、最初はなかなか打ち解けられなかったがアスラマでの交流イベントなどを通じてより親密になっていく様子がうかがえた。おとなしく人見知りをしそうな学生たちも、アスラマの子供たちと接するときは子供たちに負けないくらいの笑顔で遊んでいたのが印象的であった。その中でも、一人、いつも涙目の子供がいた。聞けば先月からアスラマにやってきた子供だという。その子は隊長を務める学生の優しさを見抜いたのか彼に良く懐き、学生もいつもその子の傍にしようとしていた。隊長の任務との兼ね合いで悩むこともあっただろうが、彼の優しさはその子の心をどれだけ慰めたかわからない。私が帰国する直前には、その子供の顔にも笑顔があった。

ボランティア作業はワーク隊長を中心にブロック塀を造るための石やレンガを運ぶ作業や農作業を行っていた。ワーク隊長を務めた学生が人一倍意欲的であったことも大きいですが、多くの学生が高いモチベーションを維持してボランティアワークに励んでいた。途中、気持ちが強すぎて自分の許容量以上に

頑張り、その結果体調を崩す学生もいた。体調を崩したことは残念であるが、自分の限界に気づくよい機会でもあったかと思う。帯同してくださった看護師の石井さんが適切で優しいケアをしてくださり、彼らはすぐに回復していた。

どちらにとっても大変なコメントシート

学生たちは連日のワークでくたびれた後でも夕食後に集まり、その日の振り返りとともに毎日コメントシートを書いていた。疲労困憊で夕食を食べた後での手書きの作業は大変であったろうと思う。彼らのコメントシートに宮嶋チャブレン、朝倉さん、私がコメントを書き、後日返却していた。私にとって、最初のうちは一人一人に返事を書く作業がなかなか大変であった。最初のうちは一枚一枚、何度も読み返しては考え込み、なかなか減らないコメントシートの束を見てはため息をつき、文字数の極端に少ないコメントシートに何と返事するべきかを逡巡している自分がいた。しかし何日か経つうちに一人一人の性格や、その日の行動を思い出しながらコメントシートを読むという作業が楽しくなってきた。

小学生のころ、「あのね帳」という日記を書かされ、面倒くさいと思いつつも先生からのコメントを楽しみにしていたことを思い出す。小学校の先生は毎日どんな気持ちで返事を書いていたのだろうかと考えながら、学生たちのコメントシートに返事を書いていった。インドネシア人学生も英語やインドネシア語でコメントシートを書いてくれ、彼らに英語で返すのも、あまり英語が得意ではない私にとっては難しい作業であったが、都会で学生生活を過ごしてきた彼らがアスラマで感じたことを読み取ることが望外の喜びであった。一人のインドネシア人学生が「外見で物事を判断してはいけない」と書いており、思わず自分の振る舞いやものの見方を反省した。宮嶋チャブレンと朝倉さんのコメントを拝見した際、学生たちへの暖かな眼差しや教員とは違う観察から、多くのことを教えていただいた。

このワークキャンプは「アジアの人々の協働から学ぶ」ことが目的である。ボランティアの成果も大事だが、学ぶということも大事な要素である。経験した当初は瑞々しいものであっても、時がたつごとに風化し、その意味は薄れていきかねない。学生の皆さんはぜひコメントシートを見返して、自分が感じたこと、学んだことを思い出していただきたい。微力ながらもコメントシートにコメントしたものの一人として、少しでも活用してもらえれば幸いである。

帰国、そしてこれから

あっという間に最後の日が来てしまい、前半の引率教員である私は一人だけ帰国しなければならなかった。前半で大きく成長してくれた学生が後半でより大きな飛躍を遂げるだろうと確信していたため、それを見届けられないことが非常に残念だった。初日に皆で到着したングラライ空港に一人でチェックインし、関西国際空港に一人で降り立った時にいつもの出張とは違う寂寥感があった。もちろん、日本の台風の影響ではかのメンバーが何日もバリ島に留まることになるとは予想もしなかった。日本側の事情でスケジュールが変更になったことは今まで聞いたことがなく、ただ心配するしかなかったが、全員無事に帰国してくれた本当に安堵した。帰国後に何人かの学生と話したが、見違えるように成長しており、自分の確信が間違っていなかったことを知った。

アスラマでの生活は、今まで引率を経験してきた方々から聞いた話よりも清潔で便利であると感じた。これはインドネシアの経済発展のためと、何よりスイクラマさんをはじめとするウィディアアシ財団、アスラマの人たちのご尽力の賜物であろう。特に食事はおいしく、様々な料理を体験させていただいた。バリ島の気候は大阪よりも涼しく過ごしやすく、特に日が落ちてから肌寒く感じることもあった。日中でも蒸し暑く感じることは少なく、バナナ畑やヤシ林の間から吹いてくる風は心地よくワークの疲れを癒してくれた。このワークキャンプは故藤間繁義先生が始められ、長きにわたり多くの人々の協働の上

で成り立っているものである。短くない期間を教員として桃山学院で過ごしてきたつもりであるが、本学の建学の精神や歴史について、まだまだ不勉強であるとわかったことも今回の引率経験から得た貴重な学びである。キリスト教徒ではない私にとって、毎朝の集いや食事ごとの祈りに参加することで多くの発見があった。本学はキリスト教精神に基づいた教育を行っている、ということに関して以前よりも理解することができるようになったと感じている。これまでのワークキャンプにかかわってきたすべての人たちに感謝申し上げたい。この歴史がこれからも末永く続き、一人でも多くの学生、教職員が経験してほしいと願いつつこの文章を結びたい。



引率教員の立場から見たIWC



経済学部 櫻井 雄大

1. はじめに

本稿では、第32回IWCの引率教員として参加した者として、現場の立場から本プログラムの意義や内容、実情などを述べる。私にとって、今回は初体験と言えるものが多い業務であった。海外渡航、長期間の学生引率、英語圏以外の人々との対話。このように何もかもが不慣れな状況にあって、それでも無事にワークを終え、学生が全員元気な状態で帰国することができたのは、ひとえに関係各位の協力によるところが大きかった。この点について、まずはこの場を借りて感謝の意を表したい。そして来年度以降の参加を検討する方々に対して、本稿を通じてIWCの内容や魅力、現地の雰囲気などを伝えることができれば幸いである。

2. 業務内容

今回のIWCにおいて、引率教員2名はそれぞれ前半と後半に別れる形でスケジュールが生まれ、前半は同じ経済学部の吉田恵子先生、後半は櫻井が担当するという形となった。予定としては8/27～9/6までの11日間であったが、後述する台風被害の影響でスケジュールは4日延長され、実際は9/10に帰国することになった。引率教員の業務としては主に学生と行動を共にする形で、彼らの活動内容を観察し必要があれば適宜アドバイスを行う、グループワークでのトラブルや現地での慣れない生活に戸惑う者がいればメンタル面のケアを行うといったことがメインとなる。また長期間の滞在から気が緩み、学生達の風紀に乱れが出る様子があれば、夜間に現地の人と協力して見回りを実施することもあった。

こう書くと堅苦しい印象を受けるが、実際のところは「あくまで主役である学生と共同生活を行い、本プログラムにおける活動を滞りなく進めるためのサポートをする黒子役」という一文で表現できる。先に述べたように参加前の不安は大きなものがあったが、同伴する教職員の皆様はもちろん、現地にも看護師の石井先生や桃山への留学経験もあるスィクラマ氏をはじめとして多くの方々のサポートに助けられ、終始不安なく業務を遂行することができた。

3. 現地での生活

私は後半からの参加ということもあり、学生の皆と一緒にではなく一人で出国する形となった。既に事前研修で深い繋がりを築いているメンバーと違い、私は引率業務参加が決定したのがかなり遅い時期だったということもあり、7時間という長いフライトの中で「引率教員として彼らと通じ合うことができるのか」と不安をつのらせていたのだが、これは後にすぐ払拭されることになる。

デンパサール空港に到着後、ウィディヤ・アシ財団の方が迎えに来てくださっており、車内で歓迎の意を伝えられるとともに現状についての情報交換を行った。途中で夕食を挟み、夜に初日の宿泊先であるプリサロン・ホテルに到着したのだが、その道中で車窓から覗かれる、インドネシア・バリ島の活気に満ちた街並みが強烈な印象として残っている。道路を行き交うバイクの大群、夜遅くまで続く道路工事の様子、海外進出してきた大手フードチェーンを含む数々のレストラン、派手な看板や建物が並ぶ裏

で積み上げられた瓦礫の山といった風景にどことなく懐かしさを感じるとともに、今の成長に伸び悩む自国の様子と比較して少し焦りを覚える一幕であった。

次の日にはプリンピンサリに入村し、アスラマでの生活が始まった。既にワークに取り組んでいる学生は皆現地馴染んでおり、遅れて参加した私は気負いするところもあったが、皆メンバーとして暖かく受け入れてくれ、今回は参加者にも大変恵まれていることを実感した。アスラマでの生活はかなり厳しいものになるかと覚悟していたのだが、施設のスタッフは既に幾度となく本プログラムを支えてくださった経験があり、食事や部屋の環境といったものは想像以上に快適であると感じられた。これらは先任の方々が本プログラムの継続的な実施を通して積み重ねてくれたものでもあり、ただただ頭が下がる思いである。

その一方で、子供達にとってのアスラマの環境は一見して大変整っているように見えるが、建物の裏側を少し覗けばそれが表面上のことであり、未だ多くの課題が残されていることがすぐに分かる。それらは学生がEvaluationプログラムの中で財団に報告したわけだが、その内容は本学・ディアナプラ大学の学生達がアスラマの子供達や施設スタッフにヒアリングを行い、その内容について日本語・英語・インドネシア語の相互翻訳という大変な労力を通してまとめられたものであり、彼らの経験と成長を示す成果のうちもっとも大きなものの一つであると言えよう。その成果を公の場で堂々と発表する学生の姿を通して彼らの成長を確認することができたのは、引率教員としてとても喜ばしく、誇らしいものであった。



4. 台風被害と帰国の延長

本稿を読まれている方にも記憶に新しいことと思うが、9月4日に日本を襲った台風21号は近畿地方を中心に大きな被害を出し、その影響はIWCにも帰国スケジュールの延長という形で大きな影を落とした。我々は当日にインターネットを通じて関空の被害情報を得たわけだが、連日のワークで体力・精神力ともに疲労困憊の学生達にとって、帰国に向けてリフレッシュを兼ねた文化探訪の途中に知らされたということもあり、当初は彼らの間に動揺と不安が広がることが懸念された。蓋を開いてみれば、朝倉氏・スィクラマ氏の尽力もあり、宿泊先の確保をはじめとする各種手配もスムーズに行われたために事なきを得たわけだが、これらを通して本国側との連絡体制や保険支払いなどいくつかの課題が顕在化した。これらの課題については、次回の実施に向けて委員会で検討する必要がある。

このように最後に大きなトラブルが発生してしまったことは残念ではあるが、そのような状況であっても、当初懸念されていた学生のメンタルについては全く問題ないどころか、一部の学生からは「帰国の目途がつくまでまたアスラマで子供達と接したい」という意見が出るほどであった。今回のIWCが彼らにとって意義あるものであることを再確認することができ、大変嬉しく思った次第である。

5. 終わりに

第32回IWC全体を通してみれば、最後に不可避のトラブルがあったとはいえ、成功したと言い切って良いという印象であった。この思いは、帰国後の事後研修において、学生が生き生きと学祭用の発表資料を作る様子を見ることで、私の中で確信に変わりつつある。また今でも目を閉じれば、ディアナブラ大学で熱烈な歓迎を受けた時に壇上で照れながらも誇らしく胸を張る学生達の姿が浮かび上がり、そのたびに胸がすく思いを受ける。IWCが学生のみならず、すべての参加者に与える影響の大きさを改めて実感させられた次第である。

最後に、私にこのような貴重な経験の機会を与えてくださったスタッフの皆様を重ねて感謝を申し上げ、本稿の締めとさせていただきます。



第32回国際ワークキャンプ（インドネシア）を振り返って

学部事務課 朝倉 康仁



今夏も昨年度に引き続き、国際ワークキャンプ（以下IWC）引率者の一員として参加させていただきました。プログラム実施の事務担当者のひとりとしてこれまで数年にわたり携わってまいりましたが、歴史のあるIWCに引率者として参加できる、貴重な機会を再度与えてくださり、ありがとうございました。

自身の年齢からも、体力に自信がなく、また当たり前ですが、プログラムを終え、とにかく全員が無事に帰国できるようにとのことで、緊張しながらの参加となりましたが、学生の皆さんの活気やボランティア活動に取り組む姿勢、意気込みに励まされ、また勇気をいただくことができました。

今年度の活動は、例年に比べボランティアワーク（今回は外壁建設の基礎工事、農作業等）の時間数を増やすとともに、施設の歴史やそこに暮らす子どもたちについて、参加学生の皆さんにもっと知っていただきたいとのことで、現地コーディネーター（スイクラマ氏）・担当者（ヤティ氏）、事前研修の講師に無理をお願いし、内容、スケジュールを調整していただきました。また、現地でのボランティア活動期間中、日々の振り返りシートを学生の皆さんが作成し、それに対するコメント作成を引率教職員が行ったことで、（本音か否かは抜きにして）皆さんがその時に考えていたことや、気持ちの変化、目標といったものを知ることができ、プログラム期間を通じて（少なくとも私は建前ではなく、素直に感じた事を書きお伝えすることができた点で）少しはプラスに働いたのではないかと感じています。コミュニケーションの手段は多岐に渡りますが、話したり、文章でやり取りしたりと、アナログといえる方法での感情の伝わりやすさ、暖かみを改めて感じることができました。

長期間にわたる共同生活の中で、学生の皆さんはとにかく懸命に、真剣に取り組んでいたと、素直にそう思える時間をともに過ごすことができました。活動内容・時間を増やしたことで、相当な疲れもあったかと思いますが、ボランティア活動のみならず交流会、また振り返りと、積極的に、真剣に取り組んでいた姿を目の当たりにし、自身の生き方や考え方を少しは変えてみようと思えた瞬間もありました。

本学チャペルの、2018年度テーマである「一歩踏み出す勇気」があれば、未知の体験ができる貴重な機会に恵まれ、また、人生を変えるような出会いや、刺激があるのかもしれませんが。参加学生の皆さんには、IWCを通じて過ごした時間を忘れず、そのときに感じたこと、考えたことを糧に、また「一歩踏み出す勇気」をもって、これからを過ごしていただければと思います。

最後に、今回は台風の影響で帰国が4日間延長されましたが、その期間に余裕のある時間もあり、インドネシア国内におられる関係者と些細な事ではありますがお話をしたり、街や海岸を散策することができました。今年度のIWC準備段階から1年にわたり、メールや電話でやり取りをしていた者同士で、そのような時間も共に過ごせたことで、友人も少なく、あまり人に対して執着もない私自身が、IWCでお世話になった前述のスイクラマ氏、ヤティ氏、石井氏（期間中、参加者全員の健康面でのサポートを頂きました）と、これからは友人としてもつながりを保ちたいと素直に思うことができました。参加者の皆さんも、4月からの約10ヶ月間をたまたま集った、ともに過ごした仲間を、いつまでも大切にいただければと、それだけを願っています。

国際ワークキャンプ報告書編集委員

上久保 圭

大西 芽瑠

藤原 健嗣

三井 隆司

前川 未侑

池田 翔三郎

富士 拓真

辻村 圭弘

山本 雄大

板倉 悠佑

第32回 国際ワークキャンプ（インドネシア）報告書

発行日：2018年12月

発行：桃山学院大学 キリスト教センター

編集：国際ワークキャンプ実行委員会

〒594-1198

大阪府和泉市まなび野1番1号

TEL. 0725-54-3131（代）

印刷：和泉出版印刷株式会社

〒594-0083

大阪府和泉市池上町四丁目2番21号

TEL. 0725-45-2360（代）



桃山学院大学
St. Andrew's University